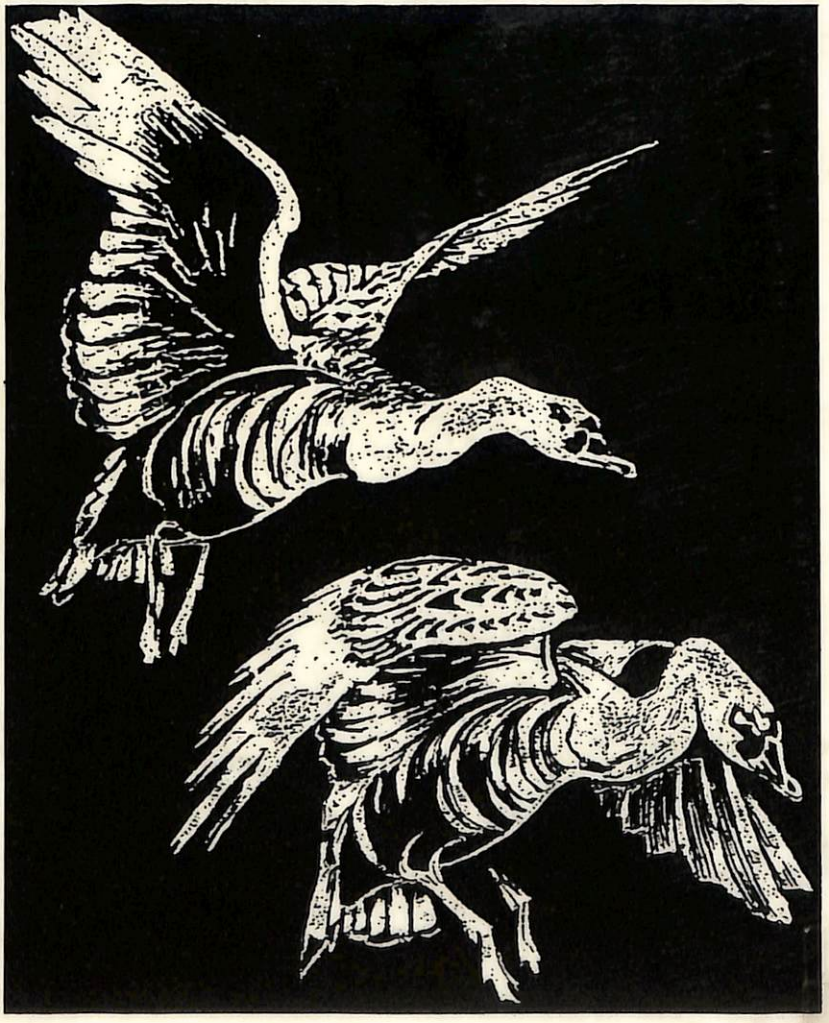
# すみだの史跡文化財めぐり

改訂版



墨田区教育委員会

ご利用時の注意について

刊行物の発行後に史跡説明板の移設や撤去、文化財登録の解除等があり得るため、現状との相違がある場合があります。

参考資料としてご利用になる際には、現状との相違を確認する必要があるため、下記までお問い合わせください。

（問合せ先）5608-6310 生涯学習課文化財担当

# はじめに

『すみだの史跡文化財めぐり』も改訂版を刊行するたびに新しい文化財を加え、南部編・北部編の二冊に分けてまいりましたが、持ち歩くのに便利なようにまた一冊といたしました。

『すみだの史跡ガイドマップ』とともにご利用いただければ、区内の文化財についてすべて知ることができます。

また、さらに詳しく調べたい方には『墨田区文化財調査報告書』『墨田区古文書集成』を発行していますので、ご利用ください。

なお、本書の編集は文化財調査員の中野日出夫が当たりました。

平成八年五月

墨田区教育委員会

# 凡　例

一、各所在地ごとに編集し、ほぼ年代順に配列しました。そして物件の多い場合に限り、図版を添えました。

二、類似した物件については、一つのタイトル・見出しのもとに①・②・③として解説・紹介しました。

三、タイトル・見出しは原則として、『墨田区文化財調査報告書』に準拠しました。

　通称のある時は、その下に（　）で、また東京都・墨田区の史跡・登録文化財等については＜　＞で、その旨表示しました。

四、人名・地名・銘文ともに、旧字体は新字体に改めました。また、剥落等は□で示しました。

五、年号は和暦を優先し、江戸時代まではそれに対応した西暦を（　）に付記しました。

六、数字は原則として漢数字とし、〇・一〇・一〇〇を多用しました。尺貫法は原則としてメートル法に換算しました（ただし、cm・m・㎡を使用）。

# 目次


1 多聞寺……一
2 円徳寺……六
3 成林庵……八
4 正福寺……九
5 隅田稲荷神社……一二
6 木母寺……一三
7 隅田川神社……二六
8 梅若公園……三三
9 法泉寺……三五
10 白鬚神社……四〇
11 子育地蔵堂……四九
12 向島百花園……五二
13 蓮花寺……六五
14 幸田露伴旧居跡……七四
15 力石（伍大力菩薩銘）……七五
16 長命寺……七六
17 弘福寺……九三
18 三囲神社……九六
19 牛島神社……一〇五
20 堀辰雄旧居跡……一〇九
21 隅田公園……一一〇
22 常泉寺……一一六
23 森鴎外旧居跡……一一八
24 秋葉神社……一一九
25 高木神社……一二一
26 正円寺……一二二
27 飛木稲荷社……一二四
28 円通寺……一二五
29 香取神社……一二七
30 福神橋橋台地……一二九
31 吾嬬神社……一三〇
32 慈光院……一三四
33 東漸寺……一三五
34 白髭神社（立花）……一三八

35 白髭神社（東墨田）……一三九
36 万福寺……一四〇
37 三輪里稲荷社……一四三
38 八広の道標……一四四
39 八広庚申堂……一四五
40 如意輪寺……一四七
41 天祥寺……一四九
42 清雄寺……一五二
43 本久寺……一五三
44 妙縁寺……一五四
45 福厳寺……一五六
46 桃青寺……一五八
47 源光寺……一六〇
48 横網町公園……一六一
49 葛飾北斎生誕の地……一六四
50 旧安田庭園……一六五
51 舟橋聖一生誕の地……一六七
52 斎藤緑雨終焉の地……一六九
53 両国橋界隈……一七一
54 回向院……一七三
55 両国国技館……一八五
56 芥川竜之介生育の地……一八六
57 榛稲荷社……一八八
58 本所警察署……一八九
59 両国公園……一九〇
60 尺振八の共立学舎跡……一九一
61 本所松坂町公園……一九二
62 塩原橋……一九四
63 江島杉山神社……一九五
64 要津寺……一九七
65 弥勒寺……二〇二
66 野見宿祢神社……二〇四
67 日本電々（株）墨田営業所……二〇五
68 法恩寺……二〇六
69 本法寺……二〇九
70 春慶寺……二一一
71 法性寺……二一三
72 伊藤左千夫旧居跡……二一九

73 両国高等学校……二二一
登録文化財一覧表……二二三

表紙「芦雁図」（部分拓本）向島百花園

# 1　多聞寺

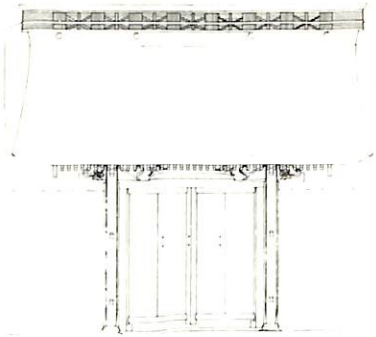
墨田五丁目三一番一三号

天徳年間（九五七～九六〇）には隅田千軒宿、今の隅田川神社付近にあって、大鏡山明王院隅田寺と称え、本尊は不動明王でした。降って天正年間（一五七三～一五九一）には四一代鑁海上人がある夜、夢に毘沙門天（多聞天）尊像を感得して以来、毘沙門天を本尊とし、隅田山吉祥院多聞寺と改称したといいます。なお、明治維新までは隅田川神社の別当寺でした。

多聞寺は区内の最北端にあり、関東大震災、戦災ともに遭わなかったので、昔日の面影を残す数少ない寺院となっています。

明治四五年には、永信講として「地蔵尊密言流念仏」が発足しましたが、戦時中に中断したのち昭和二六年に復活し、毎月二四日に催されています。

また、境内の狸塚の前には弥陀三尊の**板碑**（年紀不明）があり、他に弥陀一尊（花瓶）のものが保管されています〈区登録文化財〉。



多聞寺山門　正面図

1　**山門**〈区登録文化財〉

木造茅葺切妻造四脚門の様式をとり、境内正面入口に東面して建てられています。多聞寺に残る唯一の江戸期

木造建築であり、区内最古の建造物と考えられます。

慶長一一年（一六〇六）諸堂宇が中興再建されたのち、慶安二年（一六四九）に山門も建立されましたが、享保三年（一七一八）に焼失してしまい、現在のものはその後に再建されたものです。その様式が、江戸近郊の素朴な特徴から、再建年代は一八世紀中葉と考えられます。

2　「毘沙門天」案内碑

多聞寺は毘沙門天を祀ることから、文化年間（一八〇四～一八一八）に、隅田川七福神のひとつに組みこまれ、以来、文人墨客を中心に七福神めぐりの流行をみました。

山門の左側にあり、「隅田川七福神之内　毘沙門天　正二位　子爵榎本武揚」、裏面に「明治四十一年七月」とあります。

3　狸塚（伝承）

寺地移転（鑁海上人のころか）の折、薮を切り拓き、根本に洞のある老松を切り倒して以来、夜ごと天地鳴動して怪異なことが起ったといいます。上人が毘沙門天を念じたところ、使者の善尼子童子が現れて妖怪を倒し、怪異を鎮めたといいます。

翌朝みると、老松の洞の主である古狸が息絶えていたので、上人はそれを憐み、寺中に葬ったといいます。これが現在の狸塚とされています。寺宝に狸の軸ものや、狸にまつわる伝承もあることから、多聞寺を一名「たぬ

き寺」とも呼んで、親しんでいます。

4　**下村義楽居士「たることを」の狂歌碑**

本堂に向かって左前の、高さ一〇〇cmほどの石に次の二首が刻まれています。

「たることをしれば浮世も面白や　長し短し夢のうきはし」

「乳ぶさも呑しむかしはきのふけふ　あすは月見ん鷲の御山で」

寺の過去帳によると、下村義楽は福井県小浜の人で、文政二年（一八一九）に没し、戒名を「実成院高樹義楽居士」としています。墓所は確認されていませんが、右の二首は辞世の歌とみることができましょう。

5　**六地蔵座像**〈区登録文化財〉

墓域全体を見わたす位置に、年紀、印相（持物）不同ですえられています。多少の損傷はありますが、六体ともに保存良好なものは、区内でも多くはありません。

正徳二年（一七一二）、同三年二体、同四年、享保元年（一七一六）、同三年にかけて、僧理慶が作らせた六地蔵です。いずれも、現世と来世の「二世安楽」を願っています。とくに、享保三年銘のものには、童子、童女の名が多く、胸の痛む思いがします。

6　**庚申諸像**

①「寛文四年」銘庚申阿弥陀像〈区登録文化財〉

参道入口右側の祠に安置された阿弥陀立像で、光背上部に破損が見られますが、高さ一四五㎝のボリューム感のあるものです。

銘によると、隅田村の坂田・勝田氏などによって、寛文四年（一六六四）に造立されたものであることがわかります。

②「延宝八年」銘庚申地蔵像

墓域入口左側の祠に、明和八年（一七七一）銘観音立像と共におさめられています。「庚申供養二世祈所」「欽白」の銘を彫り、これも隅田村の人々によって造立されたものでしょう。

③「延宝八年」（一六八〇）銘**庚申塔**　高七五㎝

④「元禄十年」（一六九七）銘**庚申塔**　高六〇㎝

⑤「元禄十五年」（一七〇二）銘**青面金剛像**（しょうめんこんごう）　高七九㎝

⑥「（年紀不明）」**青面金剛像**　高七一㎝

右はいずれも墓域入口に四基並ぶもので、銘文や表現に少しずつ相違があって、子細に見ると味わい深いものがあります。

7「慶応三年（一八六七）」銘線刻**地蔵供養石塔**

墓域中央部にひときわ高く（総高二三八㎝）、切石積の上に二段の台座を設けて塔身を置き、一見、墓碑のよ

うにも見えます。

塔身の正面には線刻の地蔵像を刻み、その左面にはご詠歌「わが身をばちひろのそこにしつめてもくるしき海の人渡さらまし」を掲げています。右面には、造塔主旨として「法界万霊地震二霊十三回忌追善菩提」と「十方信者二世安穏平等扶済」を願ってのことですから、安政二年（一八五五）の江戸大地震の十三回忌供養塔であることがわかります。

これだけ立派なものを作るためには、相当の資材が必要であったでしょう。それら「造塔助力連名」は、台座に隈なく記銘されています。それを見ると、下谷、千住および当所（隅田村）などの荒川流域の人々であることもわかります。

## 2　円徳寺（えんとくじ）

墨田五丁目四二番一七号

醍醐（だいご）山円徳寺といい曹洞宗に属します。はなやかな朱の山門が目立ちます。寺伝では、慶長一八年（一六一三）に文京区駒込にある吉祥寺一三世離北良重和尚の開山としています。本尊は薬師如来です。

なお、『葛西志』に見える正慶元年（一三三二）・嘉吉四年（一四四四）銘の古碑（板碑）は所在不明となっています。また、水戸徳川家の参府の折には、当寺で最後の身仕度をととのえる屯所に充てられたとも聞きます。

庚　申　塔

1　「寛文一二年」銘**庚申阿弥陀像**〈区登録文化財〉

本堂前の左側にあり、みごとな三猿を彫り出した台座に、舟型光背を持つ阿弥陀立像は区内随一（総高二二六㎝）の大型のものです。寛文一二年（一六七二）の年紀に「奉造立庚申待供養現当二世安楽所」として、隅田村の二七名の人々を刻んでいて、資料性も高いと言えましょう。

## 2「文化八年」銘宝篋印塔

山門を入ってすぐ右側にあります。正面に「宝篋印塔」とし、銘して「皇風永扇　仏日増輝　五穀成就　国家安全」、背面に「文化八辛未歳（一八一一）二月　吉祥廿八代　願主八十翁彰山」とあります。そして、台座に「安政四丁巳歳（一八五七）仲夏」とありますから、安政二年（一八五五）の江戸大地震で倒壊したものを再建したであろうことがわかります。

## 3　佐藤中陵「にごりなき」の歌碑

先の庚申阿弥陀立像の側に、不整形の自然石（高九三㎝）に三首を添えていますが、下辺部にやや風化が見られるのは措しまれます。上部に「天保十四年（一八四三）癸卯八月朔日　水藩　八十二翁中陵」として、自身の眼疾とその全治の経過を簡潔に記しています。

「にごりなきこころの水にすむ□□　波もくだけて光とぞ□□」

「春は花夏ほととぎす秋は月　冬雪さえて冷しかりけ□」

「世の中はなににたとへ□□　むしふる露にや□□」

佐藤中陵（一七六二～一八四八）は江戸青山の生まれで、成人して薩摩島津侯・米沢上杉侯・水戸徳川侯に仕え、薬草の採集・栽培や椎茸の栽培につとめ、本草学者として大成しました。著書に『山海庶品』のほか、『七十二候新撰』『採薬録』『流虬百花譜』など多数あります。

## 3　成林庵（じょうりんあん）

墨田二丁目一一番一二号

臨済宗妙心寺派に属し、文京区湯島麟祥院（りんしょういん）末で、本尊は釈迦（しゃか）如来となっています。区内でも数少ない尼寺です。開基は上野国高崎（群馬県高崎市）城主安藤対馬守重博（しげひろ）に仕えた老女千代が、享保元年（一七一六）主君の追善供養のために、山堂和尚を招いて庵を起こしたのに始まるとされます。

山堂和尚没後、常林尼が持住となり、以来代々尼僧が持住をつとめ現在に至っています。また、常林尼は尾張徳川家の帰依を受けたとされ、今も三つ葉葵紋の什器を寺宝としています。

これら、当庵の開基そして中興の事情は、今に残されている「武蔵国隅田村成林庵由来中興再建旨趣書」〈区登録文化財〉に詳しくうかがい知ることができます。

また、かつて参道奥にあった「万治四年」（一六六一）銘阿弥陀像〈区登録文化財〉は、現在、近くの正福寺に移されています。

## 4　正福寺

墨田二丁目六番二〇号

月光山薬王院と号し、真言宗智山派に属して、東向島蓮花寺の末寺となっています。開山は慶長七年（一六〇二）、宥盛法印によると伝えられ、本尊は薬師如来を祀っています。また、一〇数代後の持住伝雅和尚は大の猫ずきで、寺内に数十匹の猫を飼っていたことから、以来「ねこ寺」の通称で呼ばれたともいいます。

1　「宝治二年」銘板碑〈区登録文化財〉

本堂前に起立しています。ボリューム感のある青石（緑泥片岩）の塔婆（高一一六㎝）です。これは近くの御前栽畑から出土したものと伝えられています。

弥陀の種子（梵字）を大きくおどらせて上部中央にすえ、その下に銘して「宝治二年（一二四八）戊申三月三日」としています。この武蔵型板碑は原石産地が埼玉県秩父方面であるだけに、荒川流域に多く、この「宝治二年」銘板碑は都内で最古のものであることが確認されています。

板碑は鎌倉時代を中心にして流行した塔婆で、現在多くは仏寺・

板　碑

墓域で見られます。そして、弥陀・釈迦（図像や種子（梵字））を信仰し、願文・回行（えこう）文・題目・讃などを表現もしています。中には、逆修（預修）と言って、生前に供養するものさえあります（法泉寺の「貞和三年」〈一三四七年〉銘板碑）。

正福寺には、このほかに、年紀不明の弥陀三尊のもの二基（うち一基は鶴岡氏墓所内）が保管されています。区内全体としては二八点（うち一点は牛島神社の参考拓本）を数えますが、いずれも区内北部の、ほぼ隅田川と東武伊勢崎線に囲まれた地域に集中することは、すこぶる興味のあることです。なお、これらのうち、区の登録文化財に登録されているのは二〇点を数えます。

2　「万治四年」銘**阿弥陀如来像**〈区登録文化財〉

舟型光背を持った阿弥陀像（総高一七六㎝）で、水盤を扇形にこらした台座に起立していて、顔容はいかにも柔和といえます。

銘を「奉造立日記念仏無縁講供養二世成就所　万治四辛丑年（一六六一）三月廿日」とし、尊像の左右に六二名（その多くは女性）の人員を数えることができます。おそらく、女性中心の念仏講中の人達が、正福寺の僧の勧めによって造立、供養されたものでしょう。

もとは成林庵門前にあったとされ、永らく庵の参道奥に安置されていたものを、近年、当寺内に移した経緯があります。

3　「寛文一〇年」銘**庚申地蔵像**

墓域に入ってすぐの無縁仏群の上段右側に安置されています。舟型光背の一部に欠損が見られますが、ふくよかな尊像全体には江戸初期の雰囲気が伝わってきます。銘は「圏蹋立庚申待二世安楽所　寛文十庚戌（一六七〇）八月吉日」としています。

4　**首塚**（伝承）

門前の道路に面して、立派な覆堂（さやどう）に地蔵像（高六二㎝・昭和一四年銘光背）が安置されています。これは天保四年（一八三三）の隅田川浚渫（しゅんせつ）工事の際に出土した多数の人骨を埋葬し、供養の地蔵像を建てたものです。とりわけ頭骨が多かったことから「首塚」と呼ばれるようになり、いつしか首から上の病を治してくれると信じられるようになったとのことです。今でも香華が絶えません。

## 5　隅田稲荷神社（すみだいなりじんじゃ）

墨田四丁目三八番一三号

古くは「八僧稲荷」とも称し、旧善左衛門村（明治二二年町村制施行により消滅）の鎮守（ちんじゅ）社（荒川開削により移転）でした。土地の開拓者、江川善左衛門の五代目が伊勢参詣の折、種々の厄災を八人の僧によって救われ、帰郷後、村人と合力して稲荷社を建てたのに始まると言われています。

往時には八僧の縁起を万燈（まんとう）にしたてた輿（みこし）はにぎわったといいますが、長い中断の後、近年復活され、毎年六月一五日を例大祭としています。

1　「弘化四年」銘**水鉢**

手水舎に安置された、かなり大型のものです。銘に「奉献　氏子中」「弘化四未年（一八四七）九月吉日」「弘福二十七代　尭隣　納」とあり、弘福寺開山鉄牛和尚ゆかりの稲荷社であることをうかがわせています。

2　**津久井安太郎「生みの子の」の歌碑**

村社昇格を記念しての社司津久井安太郎の和歌碑で、「生みの子の代々つきつきにみやしろの　まつりの手振り忘るなよゆめ」として、昭和七年の建碑（高一二三㎝）です。

## 6　木母寺（もくぼじ）

堤通二丁目一六番一号

木母寺は山号を梅柳山といい、天台宗に属する墨東第一の名刹と言えます。開山は忠円阿闍梨（あじゃり）で、平安中期の貞元元年（九七六）であったと伝えられています。

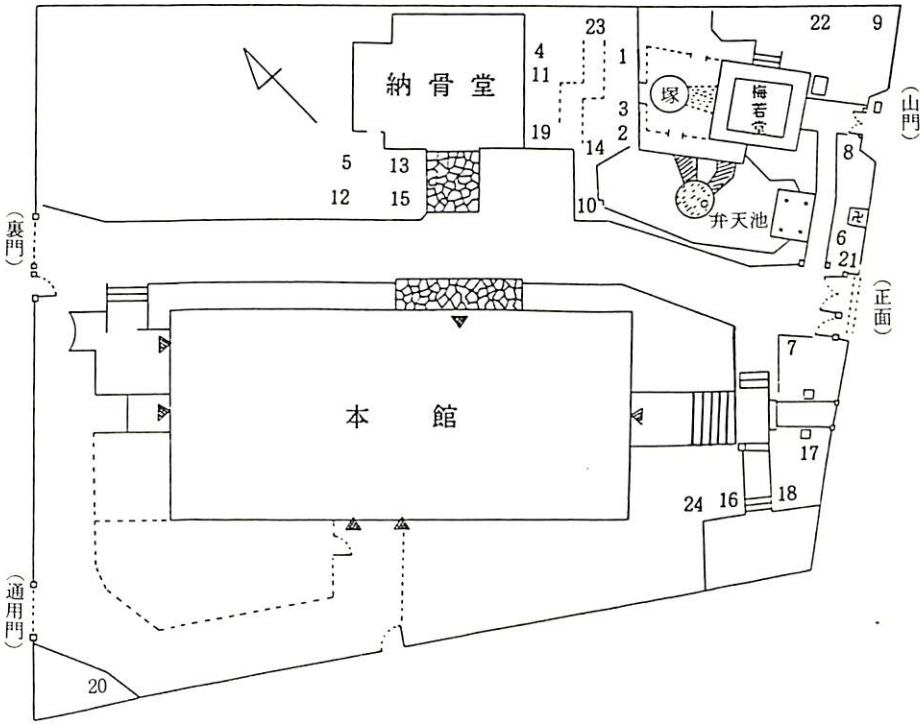
古くは梅若寺（ばいにゃじ）といい、隅田院（すだいん）とも称しました。天正一八年（一五九〇）家康によって、梅柳山の命名を得、慶長一二年（一六〇七）には、前（さきの）関白近衛信尹（のぶただ）が参詣の折、柳の枝を筆がわりにして「梅」の字を「木母」と分けて書いて以来、寺号としたといいます。

その後、明治維新の廃仏棄釈によって廃寺となり、梅若（うめわか）神社となっていましたが、明治二一年、光円僧正の特段の努力により、仏寺として再興されました。その時の当代の有力者が、再興に賛同した旨の「旧蹟再興賛成簿」が残されています。

かつては堤通りに面して、鐘渕中学校と隣り合っていましたが、東京都の防災拠点建設事業により、昭和五一年、梅若塚・碑林ともども、隅田村寄りに一六〇ｍほど移転して、現況に至りました。跡地には「榎本武揚像」のみを残し、区立梅若公園（東白鬚公園）として防災拠点の一景観ともなっています。

当寺には寺宝も多数存在しましたが、この度の戦火で多くが失われました。それでもなお、次のようなものが残されています。

① 扇一面（梅若権現ゆかりの品）


納骨堂
本館
梅若宗
塚
弁天池
(山門)
(正面)
(裏門)
(通用門)
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

②　**書軸**二幅〈いずれも、区登録文化財〉

寛永の三筆と言われる近衛信尹の筆になります。

「木母寺」の**題字軸**

都鳥および角田川の**和歌軸**

「こたへせは　わかいてゝこし　みやことり　とり

あつめても　ことはましを

又戯に

きてみるに　武蔵のくにの　江戸からは　北と東の角田川なり

慶長十二年　信尹（花押）」

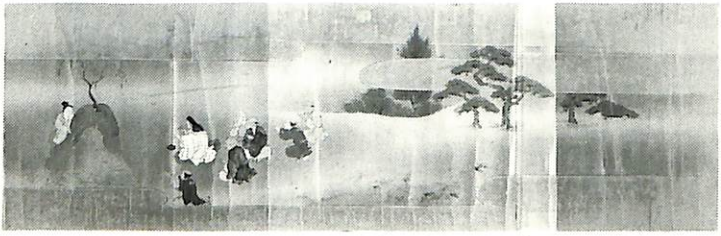
③　**絵物語**「梅若権現絵巻」（作者不詳）〈区指定文化財〉

奥書に「安藤対馬守重治再興して画工能書に命じ縁起三巻となし、寺主典海へ寄進して永く当寺の什物となす。于時延宝七暦（一六七九）己未弥生中旬」とあります。

④　**歌帖**「都鳥手鑑」二冊〈区登録文化財〉

江戸初期以降に、隅田川を遊覧し木母寺を訪れた文人墨客の詩歌・俳句などの短冊・色紙四六一点を、義慎なる人物が文政初年（一八一八～）に整理し、装丁したものです。

⑤　**扁額**「梅若塚」一面（九代目市川団十郎揮毫）



梅若権現縁起絵巻

紹介の他に、境内には「東都俳風狂句元祖川柳翁之碑」（通称・川柳塚）、「**梅若塚二代之柳**」（大正一三年）、「**歌曲隅田川**」（昭和四九年）の碑があります。

1　**空翠子麗翁居士「其ままに」の句碑**

正面に「其まゝに　帰るそ夏の　裸虫」と自虐的な句（裸虫は人間の異称、また貧しくて衣服のない人）を刻み、右面と左面に

「仏にはなられぬものと思ひしか　しねは仏と人はいふなり」

「極楽も地獄もいきてゐるうちそ　死てしまふてなにかあるへし」の狂歌を刻んでいます。

空翁は通称を大口屋八兵衛といい、浅草蔵前の札差でした。また、当時の俳諧刷新の一派である四時観派の一人として祇徳（長命寺の項参照）と共に活躍しました。一周忌に当たり、息金翠によって宝暦一四年（一七六四）に建碑されました。

2　**伊丹宗朝「今を忍ぶ」の歌碑**

「今を忍ふ人もやあらむ水くきの　あとをかたみと残すことの葉」

「水くきのあと」は筆跡、手紙の類をさします。伊丹宗朝自身の、安永一〇年（一七八一）の建碑です。

3　**笠窓巨山「これは〳〵」の句碑**

被災による損傷がはげしく、鉄材をもって補強された痛ましい石碑です。三面に四句を掲げ、四季を構成しています。

「これは〳〵　今来る人や　夕桜」

「草の葉の　月をも隠す　芭蕉哉」

「寝る事を　荷にして戻る　涼かな」（右面）

「行さまは　かはらすもとの　年ならす」（左面）

笠窓巨山は笠間巨山で、江戸の俳人です。半山門人とも破笠門人とも言われています。寛政一三年（一八〇一）の建碑。

4　**「山井先生神遊之表」の碑**

山井景命（楽師）は事情あって京都を去り、三河の竜城三秀の知遇を得ました。三秀の東遊と共に出府、同好の師と仰がれましたが、若冠三四歳で逝去、それを措しみ、文化二年（一八〇五）に建碑したものです。

5　**竜城三秀「斯ぞとは」の句碑**

「けふの土となるきのふの花」と前書きして、

「斯そとは　おもへと舟に　散さくら」としています。

碑陰には、先の「山井先生神遊之表」の建碑主旨を記し、二年後（文化四年〈一八〇七〉）、碑前で詠んだ三

秀の句を刻んだものです。

6 「瘞研冢銘（えいけんちょうめい）」の碑

書に長じた祢津子貞（元）が若冠二三歳で没したのを措しみ、彼の愛用した名硯（研）を埋ずめ（瘞）、塚となしたものです。銘は亀田鵬斎（興）が贈っています。文化一二年（一八一五）の建碑。

7 玉陶斎近見「咲花を」の歌碑

「咲（さく）花を人ちらすかとおとろきて　見れは小蝶の遊ふ長閑（のどか）さ」

作者玉陶斎近見については知られるところがありません。文化一五年（一八一八）の建碑。

8 「華渓先生禿筆之蔵銘并序」の碑

中央部は磨滅、下部は土中に埋没という、条件の悪い石碑です。

稲葉華渓（貞隆・兵吉）は幼時より能書の誉高く、彼の使用した禿筆（とくひつ）を埋めて、筆塚としたものです。なお、碑文中にある三井竜湖（深川親和）の筆になる石碑は、区内にも多々あります（要津寺の項参照）。

9 「浄瑠璃塚」

四代目竹本倉太夫が三代目竹本紋太夫と先代の倉太夫のために、その経歴（碑陰）を記して建てたものですが、

剥落が大きくて、十分な判読はできません。「浄瑠璃塚」の題字、または碑陰も含めてでしょうか、高名な式亭三馬の筆とも思われます。文政四年（一八二一）の建碑。

### 10　亀田鵬斎「題隅田堤桜花」の詩碑

亀田鵬斎（興）は儒者にして詩人、書家。かつて「隅田堤の桜花に題す」の漢詩を作成して（文政三年〈一八二〇〉）、隅田村の長坂田氏に与えたものを、鵬斎の知遇を蒙った名石工窪世祥が乞うて碑としたものです。

「長堤十里白無痕。訝似澄江共月渾。
飛蝶還迷三月雪。香風吹度水晶村。」

なお、左傍には、建碑（文政一二年〈一八二九〉）にあたって亀田梓（鵬斎の子）が撰文、九歳児清水孝（孝蔵）が筆をふるっています。これに似た建碑が白髭神社（「空谷等周先生衣幘之蔵」碑）にもあります。

### 11　「恆山先生武芸勒石記」の碑

酒田恆山は拳法家で、羽州（山形県）の人。伝太郎・恆衛と称し、恆山はその号です。全国に遊んで、武芸百般を修めるかたわら、書を能くし、門弟多数を擁しました。彼の功と徳をたたえて、天保二年（一八三一）の建碑です。一書に「酒田」を「坂田」としているものがあります。

### 12　水品広道「見る度に」の狂歌碑

蜀山人（大田南畝）門下の狂歌師、水品広道の自作を石に刻んだものです。天保二年（一八三一）の建碑。

「見る度に落る□□あつかひの　かひなくなりし昔蒔絵を」

13　**准南堂鳳翁「流れての」の辞世歌碑**

「辞世」として、次の歌を刻んでいます。

「流れての世にや哀れとみやこ鳥　すみたかはらの水茎のあと」

准南堂鳳翁については、知られるところがありません。天保六年（一八三五）の建碑。

14　**春路「花にとて」の句碑**

「花にとて　のけておく日は　なかりけり」を刻んでいます。碑陰の「此中庵社」は春路の主唱した社中でしょうか。天保一〇年（一八三九）の建碑。

15　**冨士田千蔵「種まきや」の句碑**

長唄の中興、冨士田吉次（楓江・明和八年没）とその子冨士田千蔵（楓郷・文政六年没）の七〇回忌と一七回忌を記念して二代目千蔵（楓郷の高弟）が、天保一〇年（一八三九）に建碑したものです。

「泥中にうごめく蛙が鼻唄に似たる」がと謙遜して、次の句が刻まれています。なお、「ふし田」と「冨士田」を言い懸けています。

「種まきや　ふし田の中の　日のめくみ」

ところが、碑面中何箇所か人名が削られています。定かではありませんが、楓紅が立てた高弟の冨士田音蔵家との確執によるものかとも思われます。

16　**二世八巣謝堂「一とせの」の句碑**

初世八巣は信州（長野県）飯田の人で桜井蕉雨、二世謝堂（詳細不明）、三世謝徳（江戸日本橋の人。幕末・明治の俳人）の一派を八巣社中といいます。

これは、三世謝徳が二世謝堂七周忌追善供養に建碑（安政四年〈一八五七〉）したものです。

「一とせの　空のしまりや　けふの月」

ちなみに、二世謝堂が初世蕉雨のために建てた句碑は、西新井大師（足立区）の牡丹園にあります。

17　**冠月庵星員「歌よみて」の狂歌碑**

断碑の感があって年代、建碑者名など不詳のところがありますが、幕末のものかと思われます。

「歌よみて月雪花の楽しみ囲　たるの口から酒も出次第」

春の花、秋の月、冬の雪をめでることを口実に酒を飲む男冥利のさまは、白髭神社にある天広丸の狂歌を思い出させます。

18　**小唄の久満「さみたれや」の句碑**

「さみたれや　身はくれ竹の　夢の露」とあります。

久満については、知られるところがありませんが、おそらく小唄の師匠であって、その門弟たちによる建碑（明治二年）でしょう。

19　**「紀恩之碑」**

吉野真保は武蔵埼玉郡（埼玉県）の人、終始民間人として幕末に『嘉永明治年間録』を著し、明治三年五一歳で没した後、朝廷から嘉賞を受けて金七五円を賜いました。その天恩を記念して、その子真幹が翌四年に建碑したものです。

20　**「守命供時」の碑**

明治一五年七月の朝鮮の変（壬午の変）の時の犠牲者一四名をいたんで建碑したものです。

21　**「華笠文京翁碑」**

華笠文京（一七八五～一八六〇）、本名東条文京（魯助）の一代記の碑と言えましょう。彼の人となりや生きざまを、エピソードを交えて大槻修（如電）の撰文で、弟子仮名垣魯文（野崎文蔵）が建碑しています。

文京は越後高田藩（新潟県）の侍医東条氏の長男として江戸に生まれましたが、芝居好きのため勘当され、蜀

山人（大田南畝）に寄食。その後、諸国放浪して出府。鶴屋南北（春慶寺の項参照）の門に入り狂言作者となりました。

常に奇人の評高く、井伊大老遭難当日に死去し、門人魯文たちが棺を担って菩提寺（蓮花寺）に至るも、葬ることを拒まれ、やむをえず台東谷中の永久寺に葬りました。維新に際会して墓石散逸。その後、文京の碑を建てるための費用を魯文が使いこむ等々。

魯文、前過をわびて、明治二二年に建碑したものです。なお、弟の儒者東条琴台の墓は蓮花寺にあります。

## 22 「三遊塚」

不整形の自然石に「三遊塚」と大書するのは、「幕末の三舟」と言われた一人、山岡鉄舟（高歩）の揮毫、碑陰はこれまた三舟のひとり、高橋泥舟（逸人）の筆です。

三遊塚は、先師三遊亭円生（一七六八～一八三八）の追善供養と同時に、三遊派落語隆盛を記念して三遊亭円朝（一八三九～一九〇〇）が、明治二二年に建立したものです。なお、三遊派に対する柳派の「柳塚」が法性寺にあります。

## 23 「天下之糸平」の碑

「糸平」こと田中平八（一八三四～一八八四）にふさわしく、いかにもボリュームある碑です。

田中平八は本姓藤島釜吉、信州伊那（長野県駒ケ根市）の生まれ。田中保兵衛に養われて、田中平八と自称し

ました。維新には志士として活躍、その時、開港地横浜に出て、身を実業界に投じて大成功をおさめました（屋号「糸屋」）。

「天下之糸平」は、明治の元勲伊藤博文の揮毫です。また、碑陰の「建碑資贈寄諸君」中の発起者の面々は、当代の功成り名遂げた人々であることに注目したいと思います。明治二四年の建碑。

なお、碑陰の平八の略歴は、墓碑ではありませんが、墓誌銘の典型としてもいいでしょう。

24 **「賛奎運」の碑**

幕末・明治の期、わが国における印刷技術の発展の端緒を、長尾景弼（岡山竜野藩の人）の功績でつづったものです。

25 **梅若塚**（伝承）〈都指定旧跡〉

梅若伝説といわれる悲話は謡曲「隅田川」、浄瑠璃「隅田川」、長唄「八重霞 賤機帯」などにうたわれたり、江戸時代に多くの戯作や小説にもなって、多くの人々の涙をさそいました。

平安時代中期、吉田少将惟房の子、梅若丸は信夫藤太という人買いにかどわかされ、途中病気になり隅田川のほとりで、「たずね来てとわばこたえよ都鳥　すみだ河原の露と消えぬと」の一首を残し、一二歳で世を去ります。来あわせた天台宗の高僧忠円阿闍梨が追福を祈って築いたのが、この梅若塚と伝えられています。翌年この地に来た母は、剃髪して妙亀尼と称し、小さな堂を建て、菩提を弔いつつ余生を送ったといいます。

なお、この塚も木母寺堂宇の移転と共に移設され、今ではガラス張りの覆堂（さやどう）に収められ、旧玉垣をもって区画されています。

また、梅若丸が亡くなったとされる四月一五日（もとは旧暦三月一五日）には大念仏供養（梅若忌）が行われ、多くの参詣者にあふれたといいます。そして、この日は、梅若の涙雨と称して必ず雨に降られるという言い伝えがあります。

## 7　隅田川神社（すみだがわじんじゃ）

堤通二丁目一七番一号

「水神社（すいじん）」と呼ばれかっては樹木が繁茂し、水神の森とも称された微高地でした。また、隅田川の増水にあっても沈むことがなく「浮島」の名もありました。昔から、河川交通の要衝（往古の街道筋・近世の渡場）であり、海運・運送業者の尊崇を集めていました。現在は、首都高速道路と防災拠点建設事業のために、昔の面影はなく、社地も旧地の南一〇〇ｍの地に移転しています。

祭神は速秋津比古ほか三神を主神としています。また社伝によると、源頼朝挙兵の折の、治承四年（一一八〇）この地に到り、水神の霊験に感じて社殿を造営したとも言います。現在の社殿は幕末（一八五八・一八六四）の二度の建設によるものです。

また、維新時には社掌矢掛（やがけ）弓雄が出て、大いに社運を盛り上げた模様で、彼の手になる歌碑、記念碑が多数残っています。

なお、同社には「徳治」（一三〇六～一三〇八）銘、「永正十四年」（一五一七）銘など、合わせて三基の**板碑**の所蔵が判明しておりますが、諸事情によって実見することはできません。

1　**木阿弥**「きょうよりも」**の歌碑**（「剃髪碑」）

二の鳥居右側すぐに、高さ一八四㎝の上部を円形にくり抜いた碑面に前書きして、次の歌があります。

「天明のはじめ乃歳卯月十日末李四日の日　年頃の本意遂て角田河のほとり水神の森にて　かし羅おろ志侍りてよ免る俳諧

けふよりも衣は染つ墨田川　流れわた利に世遠王堂ら婆や」

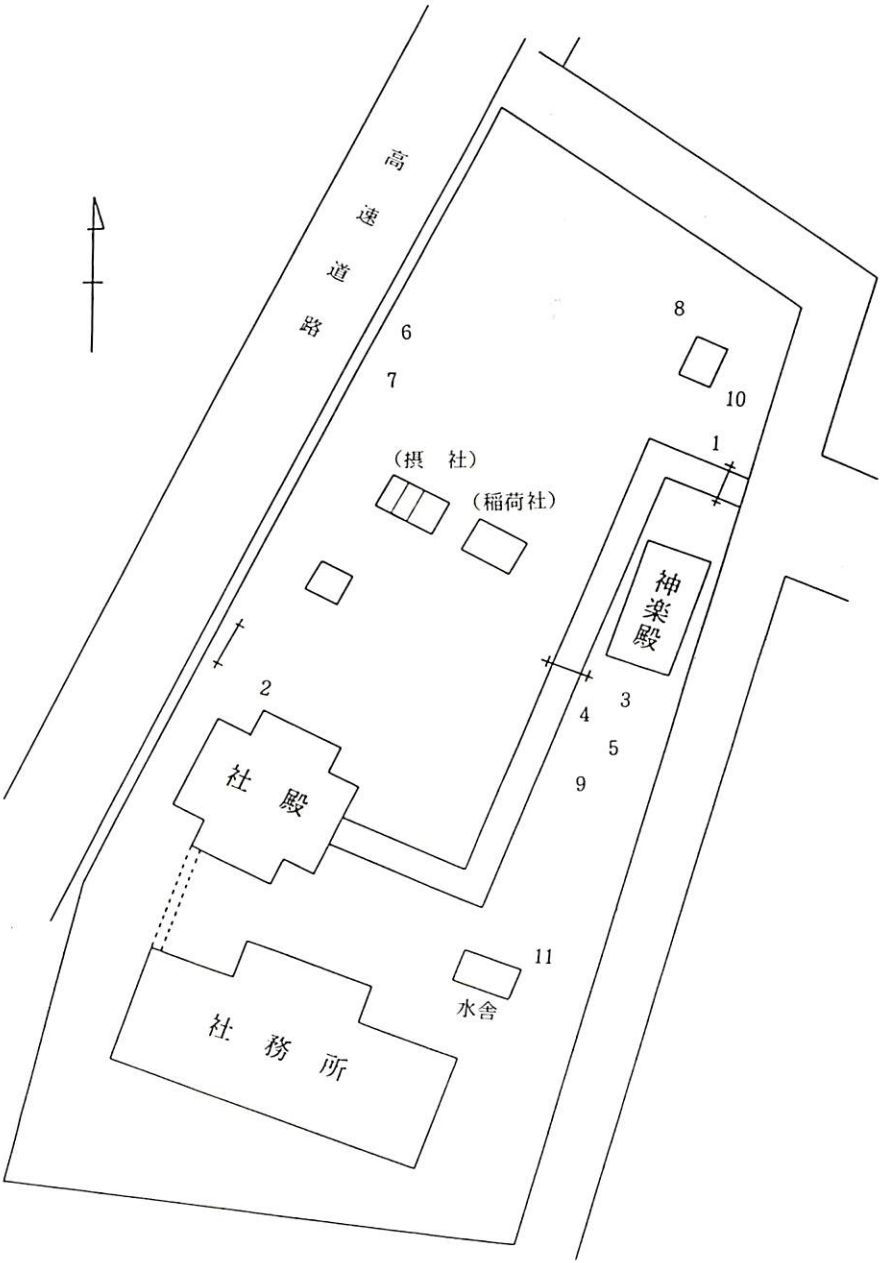
これは、文化三年（一八〇六）、門人達（落栗連）によって建てられたもので、俗に「剃髪碑」と呼ばれているのもうなずけます。

木阿弥（一七二四～一八一一）は姓を渡辺氏、通称を金子喜三郎（正雄）といい、武州（埼玉県）松山の人で、狂歌師として知られ「元の木網」とも号しました。晩年を水神の落栗庵に隠栖し、文化八年（一八一一）に没し、深川（江東区）の正覚寺に葬られました。また、妻すめも「智恵ノ内子」の号で、狂歌をよくしました。

## 2　「無琴道人墓銘」の碑

撰文を亀田鵬斎（興）、書を大窪詩仏（行）のコンビによる、実に優れて端正な墓銘碑で、文政二年（一八一九）に建てたものです。

無琴道人（一七八一～一八一八）は本名を青木金山といい、北陸佐渡に生まれ、一念発起して江戸に出て山本北山（幕儒）に師事しました。考証をよくし『山林余響』を著しますが、残念ながら若冠三八歳で病没しました。彼の早世をいたみ、中国の故事にならい建碑したことがわかります。


高速道路
6
7
8
10
1
(摂　社)
(稲荷社)
神楽殿
2
3
4
5
9
社殿
11
水舎
社務所

3　「文政二年」銘道標

区内の道標の中でも名品のうちに属します。「建久年間垂跡」と篆額に掲げて、「隅田邨総鎮守　水　神　宮　　是より西二丁余　山東庵京山　建並書」としています。おそらく墨堤上にあったものを、のち移設したものでしょう。また、「建久年間（一一九〇～一一九九）垂跡」とは、頼朝の事跡を指すものでしょう。

山東京山（一七六九～一八五八）は京伝の実弟で本名を岩瀬百樹といい、稗史小説の著述を業とし、考証随筆等も試みました（回向院の項参照）。

4　狂歌堂真顔「よけてふけ」の狂歌碑

植込みの中の角柱（高さ一〇〇㎝）状に、特に年紀はありませんが「木挽町（中央区銀座一～八丁目）船持中」によって建碑されたのは興味をひきます。

「よけてふけ花のあすたの河原風　かはらぬ色をあすたにもみむ」

真顔（一七五三～一八二九）は本名を北川嘉兵衛といい、狂歌堂・四方歌垣・恋川好町・鹿津部真顔とも号しました。

5　梅堂安径「雨雲の」の句碑

本殿左手の植込みの石に「雨雲の　下にあかるき　さくらかな」とあります。作者、梅堂安径は大瀬安径で右

膳と称し、梅堂と号しました。碑陰の八百松は当社の隣にあった当時の高名な料亭で、建碑にあたってのパトロンでした。明治一六年建。

なお、梅堂の師の野逸は加藤野逸（俗称定四郎）といい、文化四年（一八〇七）没、常泉寺に葬られました。

## 6 「佐々木荘助君之碑」

佐々木荘助（一八三五～一八九二）の一代記といってもよい碑です。荘助は常陸（茨城県）下妻に豪商長谷部又右衛門の六男として生まれ、二二歳で出府、和泉屋の吉村甚兵衛（定飛脚問屋）に仕えるうち明治維新に際会、有志と結托して運送会社を始めました。名称を内国通運会社といい、後の日本通運株式会社（日通・丸通）の礎を作ります。明治二五年、社運衰退の責任を感じて自決します。

明治二八年の建碑で、篆額は、維新時、荘助と何かと折衝のあった前島密（ひそか）（日本郵便事業の創始者）です。なお、この碑は墨堤にあったものを、昭和九年の墨堤拡張工事の折に移築されたことが碑陰からわかります。

## 7 「医学士須田君之碑」

須田哲造（一八四八～一八九四）の一代記と言えましょう。本姓を細井氏といい、信濃（長野県）伊那福与村に生まれ、徳島藩医の漢学者須田経哲を継ぎ、蘭医学を修め、ドイツの名医につき研修、後年、文京区小石川春日町に明々堂病院を設け、名医の誉高く、「朝（あした）、杖に倚（よ）りて来るも、夕べには杖を遺（のこ）して去る」と言われたほどでした。

明治三〇年の建碑で、碑陰には「門人」「有志」多数が連名しています。またこの碑も、昭和九年の移築であることが哲造の養嗣子卓爾の識で判明します。

8 「吟香岸田翁碑」

岸田吟香（銀次・一八三三～一九〇五）の一代記。「藻塩草」を創刊するなど、日本の新聞事業の先駆者です。作州（岡山県久米郡旭町）の人で、出府後、理化学・商法を修めました。

安政の大獄に発奮し、幕史の捕縛をさけて横浜居留地で、ヴァン・リードと藻塩草を共同創刊したり、米人宣教師ヘボン（ローマ字表記創案者）の英和辞典編纂を助けるなど、開明的な人物でした。碑文中、「遍凡」とはヘボン（自らは「平文」としました）のことで、彼から眼楽「精錡水」の製法を学んだことなども読みとれます。

明治四四年の建碑で、撰文者三島毅（明治一〇年に二松学舎を開学）は漢学者、書丹者の日下部東作（鳴鶴）は楊守敬の教えを受けた高名な書家です。また、篆額者の楊守敬は清国駐日公使の随員として明治一三年に来日した書家で、当時の日本書道界に多大な影響を与えた人物です。

なお、「麗子像」で有名な岸田劉生は吟香の子です。

9 矢掛弓雄「すみだ川」の歌碑

東久世道禧（一八三三～一九一二）は幕末の七公卿落の一人で、彼の筆になる題額「花香月影」のもとに、社掌矢掛弓雄が「隅田川八景」を引き寄せ、その一つひとつに彼の歌を添えたものです。

「浮島秋月」として

「すみた川すみてさやけき月見れは　世のうき島も名のみ也けり」

の歌をはじめ、八首を掲げています。

10　**坂田源次郎翁「頌徳碑」**

隅田村の名士、坂田源次郎氏の「頌徳（顕彰）碑」です。氏は若くして刻苦勉励、家業の漕運塗泥（壁土の運送）業を継ぎ、さらに土木建築業に発展させ家運隆盛して後進をよく誘掖（ゆうえき）したといいます。その功徳を頌して、大正一二年に建碑されました。

11　**黒川真道「言問いし」「世にめずる」の歌碑**

①　頭部を擬宝珠（ぎぼし）状にした高さ一五二㎝の円柱に、

「言問（い）ひしことばの花はすみた川　ながれても世に匂（ひ）けるかな」

②　自然石（高七一㎝）に「金神社」として

「世にめずるこがねはかねをたまじはふ（おう）　神のみたまの□□にぞ有（あり）ける」

いずれも、国学者黒川真道の歌碑で、後者は末社金神社への讃徳碑とも言えましょう。

## 8　梅若公園（うめわかこうえん）

堤通二丁目六番

梅若公園はかつて、梅若神社々頭の地を児童遊園にしたことに始まります。ここは、梅若塚・木母寺等があって樹木にも恵まれ、とくに夏になると、虫取り網を持って走りまわる子ども達でにぎわっていました。

今この地は、東京都の防災拠点建設の改造事業によって、昔日の姿を大きく変え、木母寺、鐘渕中学校の移転、高層防災住宅群の建設により、「東白鬚公園」の中に組み込まれて、榎本武揚銅像だけがとり残されている感があります。

### 1　榎本武揚銅像

榎本武揚銅像は大正二年五月、旧幕臣のち代議士江原素六などの発起により、府会議員本山義成らが中心となって建立したものです。彫刻家長沼守敬の作と伝えております。

榎本武揚は天保七年（一八三六）、下谷御徒町柳橋横町（台東区）通称三味線堀組屋敷に生まれました。家系は、もと橋場村の郷士ですが、父圓兵衛武規は旗本榎本武兵衛の娘婿となりました。

武揚は幼名を釜次郎といい、梁川と号しました。天性聡明で学問好き、早くから昌平黌に儒学を学び、さらに江川太郎左衛門の塾でオランダ語や英語を修めました。その後、海軍伝習所に学び、オランダに留学するなど、生涯、海軍々人として国事にたずさわる端緒を得ます。やがて、海軍奉行となり幕府海軍の育成に全力をつくし

ます。明治と改元される年の慶応四年（一八六八）、いよいよ江戸城明け渡しという八月一九日、彼は幕府の軍鑑八隻を奪って品川沖から蝦夷地の函館を目ざして退却します。そして、フランス式の城塁、五稜郭に拠り、徳川家のために官軍に抵抗します。しかし、かいなく翌二年五月一八日に降伏し、東京に護送されて獄に下ります。五年一月六日赦されて自由の身となりました。

明治政府には開拓使下僚として仕官、のち七年海軍中将に、さらに特命全権公使としてロシアに派遣され、幕末以来の懸案であった樺太帰属問題解決のために尽力します。翌八年五月、ロシアとの間においてようやく千島・樺太交換条約の調印にこぎつけます。

榎本武揚像

やがて、同一八年発足の第一次伊藤内閣の逓信大臣になったのを始めとして、文部・外務・農商務の各大臣を歴任、のち枢密顧問官となり、子爵を受爵しました。

晩年は向島に隠栖して悠々自適の生活を送り、四一年一〇月逝去、文京区駒込吉祥寺に葬られました。

## 9　法泉寺（ほうせんじ）

東向島三丁目八番一号

曹洞宗に属して晴河山法泉寺といい、文京区駒込吉祥寺末で区内でも古い寺院です。寺伝によると、昔、葛西三郎清重が所領地に両親の追善供養のために建立されたとしています。度々の兵火に焼かれたのち荒廃しましたが、天文元年（一五三二）に僧安元が中興し、それまでの真言宗から曹洞宗に改宗したといいます。

本尊は釈迦如来を安置し、かつては、新田義貞の守本尊という伝承を持つ俗称「髻（もとどり）不動尊」があって、信仰を集めたといいます。

また、法泉寺には区内でも多数（八基）の**板碑**が保存されています（原則として非公開・いずれも区登録文化財）。次に年紀等を掲げて紹介しておきます。

貞和三年（一三四七）弥陀一尊
応永八年（一四〇一）弥陀三尊
延徳四年（一四九二）弥陀三尊
銘欠　（弥陀三尊）
延文六年（一三六一）弥陀一尊
永享四年（一四三二）弥陀三尊
永禄一一年（一五六八）日蓮題目
銘欠　（釈迦一尊）

延命地蔵

1　**千鳥庵鳥秦「散る日から」の句碑**（「短冊塚」）

寺門を入ってすぐの右側、藤棚の下に「短冊塚」の篆額のもとに、三世千鳥庵（川崎重亮・肥前唐津の人）の次の四句が刻まれています。

「散日から　ちるを盛や　花の山」
「思ひきって　飛姿なり　ほととぎす」
「我を山に　捨て名月　入に鳧」
「夕煙　雪の野末に　里ありや」

季語を配した一連の句碑と言えましょう。

2　**尚左堂俊満「故郷の」の歌碑**

本堂前の樹木の下に、表に彼の次の和歌、裏に友人石川雅望（宿屋飯盛）による彼の人となりを記したものです。

「故郷のおやの袖にもどるかと　おもへば月はふたつなきもの」

尚左堂俊満（一七五七～一八二〇）は幕末の浮世絵師で戯作者でした。本姓を窪田（窪とも称した）安兵衛といい、生来、左ききの故に尚左堂、また左尚堂と号しました。その色彩感覚は繊細であったとされます。また、多芸であったとみえ、狂歌では一筋千杖、川柳では塩辛房、戯作では黄山堂、あるいは南陀伽紫蘭と称しました。窪俊満・石川雅望ともに、台東区蔵前三丁目の正覚寺（榧寺）に、隣り合って葬られています。

### 3　中山胡民の墓

中山家は寺島村の名主をつとめた家で、胡民は通称を祐吉という江戸末期の著名な蒔絵師です。大へん緻密な蒔絵を作ったことで知られ、古い蒔絵もよく研究し、巧みに応用した作品もあります。晩年、法橋（僧侶の叙階）に叙せられ、泉々と号しました。茶道・俳句にも優れていました。明治六年、齢六三歳で没しました。

胡民の墓は自然石（高さ七八㎝）に「泉々胡民墓」とあり、台石に「名花山」と刻まれています。

### 4　地蔵諸像等

①「寛文二年」銘**地蔵像**〈区登録文化財〉

本堂横の、墓域入口近くに起立するものです。錫杖こそ失われていますが、ゆったりした規格正しい舟型光背を持った眉目秀麗な地蔵尊と言えましょう。さすがに江戸初期（一六六二）の雰囲気を十分にかもし出しています。

とくに、光背部に回向文を有する点は貴重であり、区内では、この一点のみではないでしょうか。「願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成仏道」は法華経化城喩品の一節で、自他共に及ぼす無我の功徳をもって、彼岸に達しようとする信仰心を表しています。

②「寛文六年」銘**庚申地蔵像**

新墓域に安置されている（他所からの移転か）もので、顔面に損傷はあるものの、高さ九一㎝の愛くるしさのただよう地蔵像です。「奉造立地蔵尊為二世安楽也　庚申講中」「寛文六丙午天（一六六六）八月一二日」として

います。

③「延宝八年」銘**庚申阿弥陀座像**

本堂の左側、墓域参道の左側にある笠塔婆型の庚申阿弥陀座像です。今では宝珠・笠石は失われていますが、座像の半肉彫はできがよく、保存状態も良好のものです。銘を「延宝八庚申天（一六八〇）　奉供養庚申二世安楽十一月五日」としています。

④「延宝九年」銘**念仏供養龕**（がん）

先の「尚左堂俊満の歌碑」の近くにある九六㎝ほどの、見落しがちな龕です。「龕」とは神仏を安置する小さい箱の意ですから、石造りの厨子（ずし）と考えていいでしょう。区内にあっては、龕の形式をとるのは極めて稀（まれ）なものです。

龕正面の銘に「延宝九辛酉歳（一六八一）六月廿八日」右側面に「念仏供養」と見えますが、龕に祀られているのは神像で、宝冠に鳥居、上部に日月をいただいているところをみると、神仏混淆（こんこう）の姿をとどめていると言えましょう。

⑤「元禄六年」（一六九三）銘**地蔵座像**

墓域中央のやや奥まった位置にあり、持物等は一切失われていますが、頭部や右手の様子からみて、地蔵尊と判断されます。

⑥「享保（一七一七）二年」銘**金銅製地蔵像**　〈区登録文化財〉

本堂に向う左手にあって、台座の上に立つ高さ一六〇㎝余の金銅製の地蔵像で、「延命地蔵」とされるもので

す。

台座の銘に「奉造納　東海道武蔵国葛飾郡西葛西領寺島村仏頂山法泉禅寺」とし、背後と袖の銘に「導師」前永平吉祥十五世大宣伝大和尚、「願主」念蓮社十誉、「施主」浅草御堂前俗名阿部主水としています。

これだけの大作ですから、多くの資材を必要としたことでしょう。そのための喜捨に応じた人々の名が、全身（法衣）に隈なく刻まれています。

## 5　保護樹木「しいのき」「たぶのき」

区内にはかつて多くの名木・大木がありました。松浦上屋敷の椎の木、東江寺の「見あひの松」、吾嬬神社の「相生の樟」、高木神社の「臥龍の松」、秋葉神社の「千葉の松」、常泉寺の「十返り松」などがあげられましたが、これらは都市化の波と度重なる変災とによって、全て失われてしまいました。

墨田区では、数少なくなった樹木を後世に遺すために、「緑化の推進に関する要綱」（昭和四八年制定）に基づいて、その保護に乗り出しました。この法泉寺のしいのき（三本）・たぶのき（一本）を含めて、現在（昭和五五年三月末）六九本が指定を受けています。

記録によりますと、法泉寺のしいのきは（目通り）、一・三〇m（二本）、一・三五m、たぶのきは（同）二・八五mとなっています。

## 10　白髭神社（しらひげじんじゃ）

東向島三丁目五番二号

牛島神社同様、区内でも古社に属します。社殿は元治元年（一八六四）に造営された白木造りで、区内では震災・戦災を免れた貴重な建造物でしたが、平成二年、放火によって焼失。その後、同四年に再建されました。

社伝によると天暦五年（九五一）慈恵（じえ）大師が関東に下向の折、近江国志賀郡境打下（うちおろし）（滋賀県小松村）に鎮座の白髭（しらひげ）大明神を勧請（かんじょう）したものといいます。これらのいわれは「白髭神社縁起碑」に詳しく述べられています。

主神を国つ神の猿田彦命とし、四神を祀っています。なお、明治四〇年には、当社の南にあった諏訪神社を合祀しました。

1　**白髭神社縁起の碑**

かつて白髭神社の東隣に別当寺西蔵院（現廃寺）がありました。享和二年（一八〇二）社殿修理を機に、その持住の興元の求めに応じて、高名な橘（加藤）千蔭（回向院の項参照）が筆をふるったものです。

また、社地の一角には「**鎮座一千年記念碑**」（昭和二八年）もあります。

2　**北島玄二「うつせみの」の歌碑**（「黒人塚」）

白髭神社にあるもののうち一番の古碑で、寛政一二年（一八〇〇）の建碑です。高さ一〇〇㎝に満たない四角

柱の碑ですが、彫りも深く風格のある碑と言えましょう。

「黒人塚」と大書して、右面に「天やこの人を生み　天やこの人を亡る　この人阡人の玄　崑崙一人に倚る」（原漢文）、左面に

「うつせみのうつつにしばしすみた川　渡りそはつるゆめのうきはし」としています。

北島玄二は本名を源二、色が黒（玄）いので玄二と称したといいます。本業は医師で『くすしのみち』を著したともいいます。

### 3　天広丸「くむ酒は」の狂歌碑

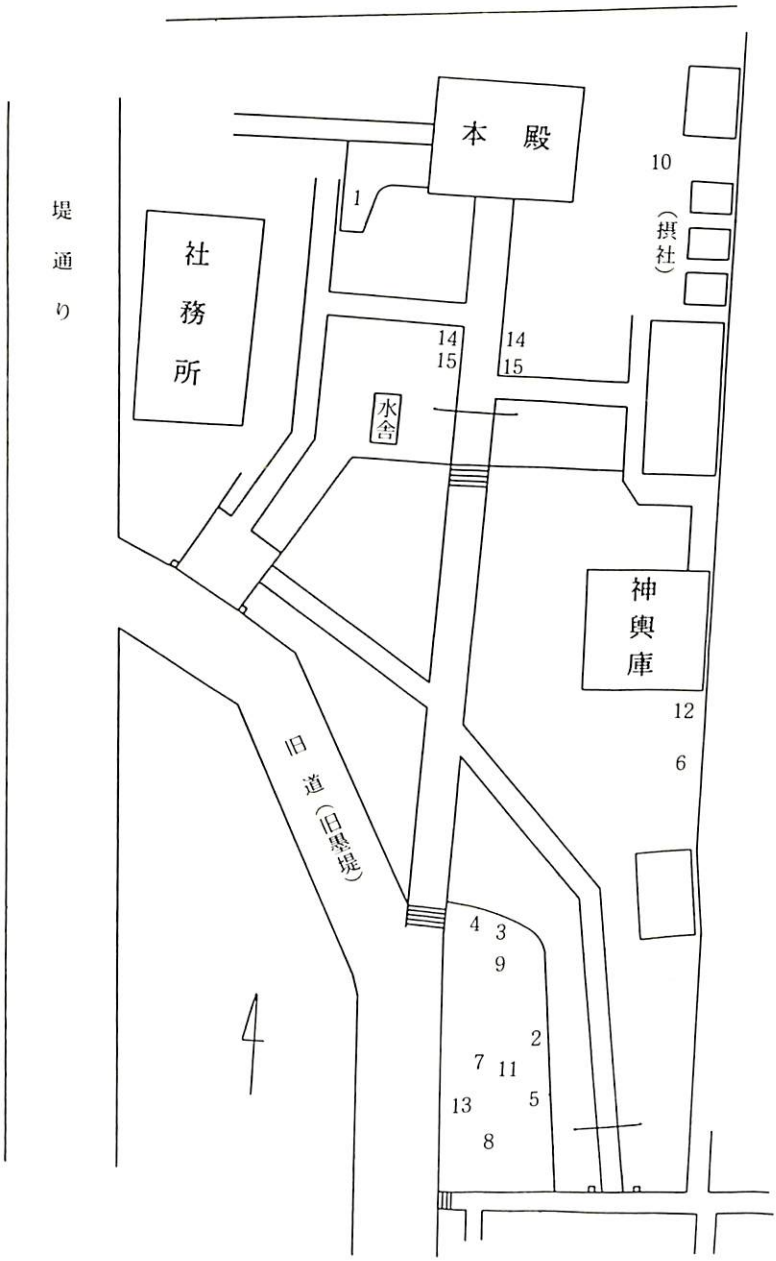
天広丸（一七五六～一八二八）は本名を磯崎広吉、号を酔亀亭と名のり、宝暦六年（一七五六）鎌倉市今泉に生まれ、文政一一年（一八二八）に没しています。

青石の自然石上部に酒を表わすとみられる標記（酒の印篆の一つか）をおき、次の狂歌を刻んでいます。

「くむ酒は是風流の眼なり　月を見るにも花を見るにも」

この狂歌は彼の出生地、鎌倉市今泉の白山神社参道入口にある自筆の狂歌碑（文化元年〈一八〇四〉銘）と全く同じ筆勢ですから、これも自筆であり、建碑も文化初年を下らないものと思われます。

彼は狂歌を唐衣橘洲に学び、生涯、酒ずきで、その著『狂歌酒百首』の巻頭（第一首）を飾るのが、この歌でもあります。


本殿
社務所
堤通り
水舎
神輿庫
旧道（旧堤）
（摂社）
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
14
15

4　**春秋庵白雄「人こいし」の句碑**

高さ一四〇㎝の四角柱の句碑ですが、損傷が大きく裏面はほとんど読めません。

「人こひし　火ともしころを　さくらちる」

春秋庵白雄（一七三八～一七九一）は本名を加舎白雄といい、信州（長野県）上田の生まれで、多年各地を放浪して後、江戸に春秋庵を開き、句作に励みました。

隠逸潔癖、純真多感、飾りのない作風を主張し、蕉風俳諧の作法を平易に説いたといいます。右の句も、その著『白雄句集』からの出典です。

なお碑陰は、「于時文化歳在癸酉（一八一三）春三月　拙堂創建之　補助居行」と補うことができます。

5　**中原耕張「つくづくし」の句碑**（「筆塚」）

高さ一二三㎝の四角柱正面に、「筆塚　中原耕張」として次の句を添えています。

「つくゝゝし　つめよ硯の　すみ田川」

筆塚は退筆塚とも言われて、使いふるした筆を地に埋めて塚としたものです。

この句の面白さは、ことばの言い懸けを多用しているところです。念入りにの意の「つくづく」と筆塚にちなんで「つくし（土筆）」、「つめ」の積む（蓄える・ためる・励む）と摘む（集む）、「硯のすみ（墨）」と「すみ（隅）田川」が、それです。

中原耕張は、この筆塚を建碑した二年後の冬に、近くの蓮花寺に「算子塚」をも建碑していますから、おそら

く筆（長雄流）とそろばん（最上流）で生計を立てていた、山谷（台東区）鳥越の人物と思われます。

6　**桑楊庵干則「久かたの」の歌碑**

「久かたの天津をとめもうらやまむ　人間界の華のしら雲」

桑楊庵干則は浅草干則のことでしょうか。初代桑楊庵（別号頭光。江戸後期の狂歌師で狂歌四天王の一人）は享和二年（一八〇二）に門人真砂庵干則に、その号を譲ったとのことです。

7　**佐羽淡斎「墨多三絶」の詩碑**

佐羽淡斎の三連の絶句（四句から成る）の漢詩に、巻菱湖の「墨多三絶」の篆額、大窪詩仏（行）の筆（草書）、裏面の讃を亀田鵬斎（興）になる名碑と言えましょう。

佐羽淡斎は上野（群馬県）桐生の出身で、富豪初代佐羽吉右衛門の実兄丑之丞の次子で、二世吉右衛門を継ぎました。名を芳、字は蘭卿、淡斎と号し、幼より学を好み、賦詩をよくしました。文政五年（一八一三）の建碑ですが、達筆な碑文は相当に難解です。

8　**「空谷等周先生衣幘之蔵」の碑**

下総（千葉県）出身の画家、川村等周（号空谷）の衣幘（衣と頭巾）を埋め、その彼と親交のあった清水武によって営まれた碑で、その子二人の書で、碑面を八歳の孝（孝蔵）の、碑陰を一二歳の姉美智の筆によるもので、

幼少の者が揮毫したという大変珍しい碑と言えましょう。文政一一年（一八二八）の建碑です。

撰文者の綾瀬亀田長梓は亀田鵬斎の義子（一説に長子）で亀田三蔵（綾瀬）のことです。

なお、この碑そのものに移動があったのか、表裏が反対となっており、碑面の下部は土に埋っている現況です。

### 9 「亡友蒼山衣剱之蔵」の碑

碑面の添え書きによれば、蒼山は本名を小野田大三郎といい、二四歳で没し、市谷善慶寺に葬られました。彼の衣と剱（刀）を埋めて塚としたものです。

碑陰の建碑者の中に、亀田三蔵（綾瀬）・清水美智・孝蔵（孝）姉弟の名が見られます。その点、前の「空谷等周先生衣幘之蔵」と何らかの関連があるのでしょうか。天保四年（一八三三）の建碑です。

### 10 三十六湾漁叟「隅田川観楓詩并序」の碑

隅田村から小梅村界の墨堤に楓を創植するのに、独力で成しとげた女性のけなげさにうたれて、絶句五連を得た三十六湾漁叟（越後人。館柳湾。雄次郎。）の漢詩の碑です。天保七年（一八三六）建碑。

女性の名は川口娜保（直）といい、もと吉原の名妓で大田南畝（蜀山人）作詩の「北州」に節付けした三味線の名手であったとも言われています。芸妓をやめ、日本橋薬研堀に「川口」という料亭を開き、のち橋場に移り、繁昌したとのことです。

11　**四世今日庵「こころほど」の句碑**

高さ一九〇㎝の自然石に「四世今日庵　元風」として次の句を刻んでいます。

「こころほど　こと葉のたらぬ　さくらかな」

元風は本名を松本伊助といい、師一蛾につき、天保年間（一八三〇～一八四四）に活躍した江戸の俳人のようです。息子、盛義（小蓑）による天保七年（一八三六）の建碑です。また、彼の手になる碑は区内に多くあります。

12　**「岩瀬鴎所君之碑」**

高さ二mを超える大碑です。幕末の外交家、岩瀬忠震（一八一八～一八六一）の一代記といってよく、若冠四四歳で不遇のうちに没したのを措しみ、現役時代の同輩、永井介堂の撰文・書・篆額による、没二三年後の顕彰碑です。岩瀬鴎所は、幕府の徒頭、設楽貞丈の第三子に生まれ、のち岩瀬忠正の嗣子になりました。安政元年（一八五四）、老中阿部正弘によって目付に抜擢され、黒船来航にあたり外国奉行・作事奉行として、井伊大老のもと条約締結の任に当たりました。後、将軍継嗣問題で左遷・譴責を受け、寺島の岐雲園に蟄居しました。文久元年（一八六一）七月岐雲園に没し、文京区白山蓮華寺に葬られました（後、雑司谷霊園に改葬）。

13　**「鷲津毅堂之碑」**

前の「岩瀬鴎所君之碑」を上まわる、高さ二五六㎝の大碑で、字数は区内一の多さでしょう。篆額は明治の元

勲三条実美、撰文を友人三島毅（二松学舎の建学者）、書は巌谷修（一六。小波（さざなみ）の父）の手に成るものです。

鷲津毅堂（一八二五～一八八二）は幕末・明治初期に活躍した漢学者・政治家で、明治政府に登用され、登米県（宮城県北部）権知事、権大法官五等判事・司法権大書記官となり、勲五等従五位に叙されました。

永井介堂（尚志）とは、混乱期の伏見（京都府）の地において知遇を得、また、同姓の永井久一郎に長女を嫁し、外孫、壮吉（荷風）をもうけています。

14　**石燈籠**（二基）

①「寛政一三年」銘**石燈籠**

立派な基壇の上に起立する宮前型の燈籠です。損傷・磨滅の少ない保存の行きとどいたものです。

銘は「寛政十三年（一八〇一）辛酉正月吉日　献燈両基　両替町田中氏」とあります。田中氏は寺島村出身で、名主中山氏の一族と思われます。

②「嘉永二年」銘**石燈籠**

形式は春日型です。銘に「嘉永二年（一八四九）次歳　法橋胡民斉　己酉五月吉日」とありますから、寺島村の中山胡民（祐吉）の奉納であることがわかります（法泉寺の項参照）。

15　「文化三年」銘**狛犬一対**〈区登録文化財〉

文化三年（一八〇六）に作られた、阿形・吽（うん）形一対の狛犬です。阿形の台座に損傷が見られますが、像そのも

のは磨滅は少ないと言えます。白鬚神社の「御宝前」に「奉納」されたものです。作者は神田今川町の石工、六兵衛明貴の手になるものです。

白鬚神社が墨堤という場所がらにあることと、祭神猿田彦命が商売繁昌の神として信仰を集めていたことにより、奉納（建立）者は、当時、通人として知られた人々、松葉屋半左衛門（吉原の遊女屋）、八百屋善四郎（浅草の料亭八百善）、駿河屋市兵衛が合力したものです。

## 16　岐雲園（きうんえん）の跡

岐雲園は寺島町七丁目二〇七番地（墨田一丁目四番）にあって、広さ約五〇〇坪（一、六五〇㎡）、隅田川の水を引き入れた汐入りの池のある別荘風の構えで、岩瀬忠震（鴎所）が自分の所有する画巻の筆者、明の魯岐雲（ろきうん）にちなんで名づけたものです。

彼は職を免ぜられた後、憂憤の退隠生活をここ岐雲園で退り、再び世に出ることもなく、風雅な生活を送りました。「鴎所（おうしょ）」の号も、隅田川にとぶ都鳥にちなんでつけたといいます。この地にあること二年にして、四四歳の若さで生涯を閉じました。

忠震没後、同僚でもあった永井介堂（尚志）も晩年を岐雲園で送り、ここで没しています。また、幸田露伴（幸田露伴旧居跡の項参照）の父成延、長兄成常もここに住み、露伴自身も一時期住んでいました。そして次兄の郡司成忠が北千島探検に出発の前夜、明治二六年三月一九日、別離の宴を催したのも、ここ岐雲園でした。

## 11　子育地蔵堂（こそだてじぞうどう）

東向島三丁目一番

伝承によると、文化年間（一八〇四～一八一八）に隅田川堤防改修中に石造りの地蔵尊を得、それを当地の植木屋平作が、この地蔵尊の霊験（れいげん）に感得して、庚申塔のある辻に祀ったのに始まると言います。以来、この地蔵尊は高名となって参詣者も多く、講中も結ばれ、四の日には縁日も開かれ露店も並んだと言われます。また、この堂に向って川堤に登る通りに「地蔵坂」の名をとどめています。

なお、上流の白鬚神社に至る三〇〇ｍほどの小径は、旧「墨堤の道」の名残です。

### 1　「子育地蔵尊御由来」碑

子育地蔵尊（堂）の由来を自然石に刻し、昭和八年に四代目萩原平作が建立したものです。長文ですが丹念に読み下していくと、その縁起・由来が判然としてきます。なお、この碑文と「子育地蔵尊御堂建立百年遠忌供養塔」（隷書体）は寺島生まれの西川寧（昭和六〇年度文化勲章受賞）の筆になるものです。

### 2　庚申諸像

#### ①「寛文三年」銘庚申塔

区内でも数少ない笠石塔婆型（宝珠欠）で、長命寺のものに次いで古い（一六六三）ものです。造作も丁寧・

立派で一〇か年庚申奉待のことが難解な漢文体で記されています。

② 「貞享三年」銘**庚申観音像**

境内の茂みの中にあって、観音像としては区内唯一の例でしょう。腐食・磨滅が進んでいますが、「貞享三寅年（一六八六）三月十八日　囗心禅定門」と読めます。

③ 「元禄三年」（一六九〇）銘**青面金剛像**　H一〇八cm

④ 「元禄七年」（一六九四）銘**青面金剛像**　H一二六cm

⑤ 「元禄一一年」（一六九八）銘**青面金剛像**　H一二五cm

この三体は水舎の近くにあって、参詣者自身の患部と同じ部位に水をかけて洗ったり、塩を盛ったりするために、いずれも腐食・磨滅が進んでいます。が、中でも、元禄七年銘のものは量感があります。

⑥ 「万延元年」（一八六〇）銘**庚申塔**

江戸最末期のもので、「庚申塔」とだけ彫ってあります。揮毫の「御手洗（みたらい）藤原正邦」は牛島神社の鳥居（西門）の「御手洗信七藤原正邦」と同一人物でしょう。

3 「濁らじと」の**御詠歌碑**

水舎の左手、高さ一一七cmの自然石に「奉納　御詠歌」として次の歌を刻ん

水かけ風景

であります。昭和一二年の建碑。

「濁らじとねがひをかけむ地蔵坂　しほのみちひにかはる時なく」

## 4　「唐楓」の碑

地蔵堂側にあります。伝承として、一一代将軍家斉が鷹狩の途中、寺島村の植木屋平作宅に立寄って休息したのを記念して、唐楓の苗木を拝受したとも、家斉が珍重した唐楓を田沼意次に賜り、それを出入りの平作に預けたとも言われています。

碑面には「御接木唐楓　御用木　永々御預り　大田下総守様　朝倉播磨守様　於御駕籠台被仰居」、裏面に「天保三壬辰年（一八三二）四月二十五日　植木や平作五十八歳　勝邨書」とあります。

この唐楓はカエデとは別種でフウと呼ばれるマンサク科の落葉高木です。地蔵堂南東隣地にあったもので、樹高一三m、幹廻り一m三〇あったとされていますが、今は切られて現存していません。

## 12 向島百花園（むこうじまひゃっかえん）

〈国指定名勝及び史跡〉　東向島三丁目一八番三号

百花園を造ったのは佐原鞠塢（きくう）で、文化元年（一八〇四）のことでした。鞠塢は宝暦一二年（一七四二）仙台に生まれました（一説に明和三年生まれ）。天明年間（一七八一～一七八八）江戸に出て、芝居茶屋に永年勤めたのち、日本橋住吉町で骨董店を開き北野屋平兵衛と改名し、諸大家に出入りして大いに繁昌しました。さらに長谷川町（中央区日本橋堀留）に転居するとますます賑（にぎ）わい、茶人や文人・墨客の著名人が集まるようになりました。世才はもとより文才にもたけ、当時の文化人である加藤千蔭・村田春海・亀田鵬斎・大窪詩仏・蜀山人（大田南畝）・酒井抱一等にことのほか愛顧を受けました。

その後、故あって隠居して本所中ノ郷にひそみ、菊屋宇兵衛と改め、剃髪して鞠塢と号し、寺島村の多賀屋敷跡三千坪（約一万㎡）を買い求めて百花園を開きました。この時、愛顧をうけた文人墨客に梅樹の寄付を求め、たちまち三六〇本余りを得たといいます。そして風流第一ということで凝（こ）った囲いなどはせず、荒縄を結んで囲いとしました。そしてその伝統は守られ、今でも素朴で自然なたたずまいを残しています。

百花園という名は「梅は百花のさきがけ」という意味で、酒井抱一（画家・俳人）が命名したといわれています。そのほか臥竜梅（がりゅうばい）で有名な亀戸の梅屋敷に対して新梅屋敷と呼ばれたり、花屋敷、七草園、鞠塢亭などとも呼ばれました。やがて宮城野萩や筑波萩等の秋草をはじめ、しだいに草木の種類をふやし、四季花の絶えぬ庭園になりました。

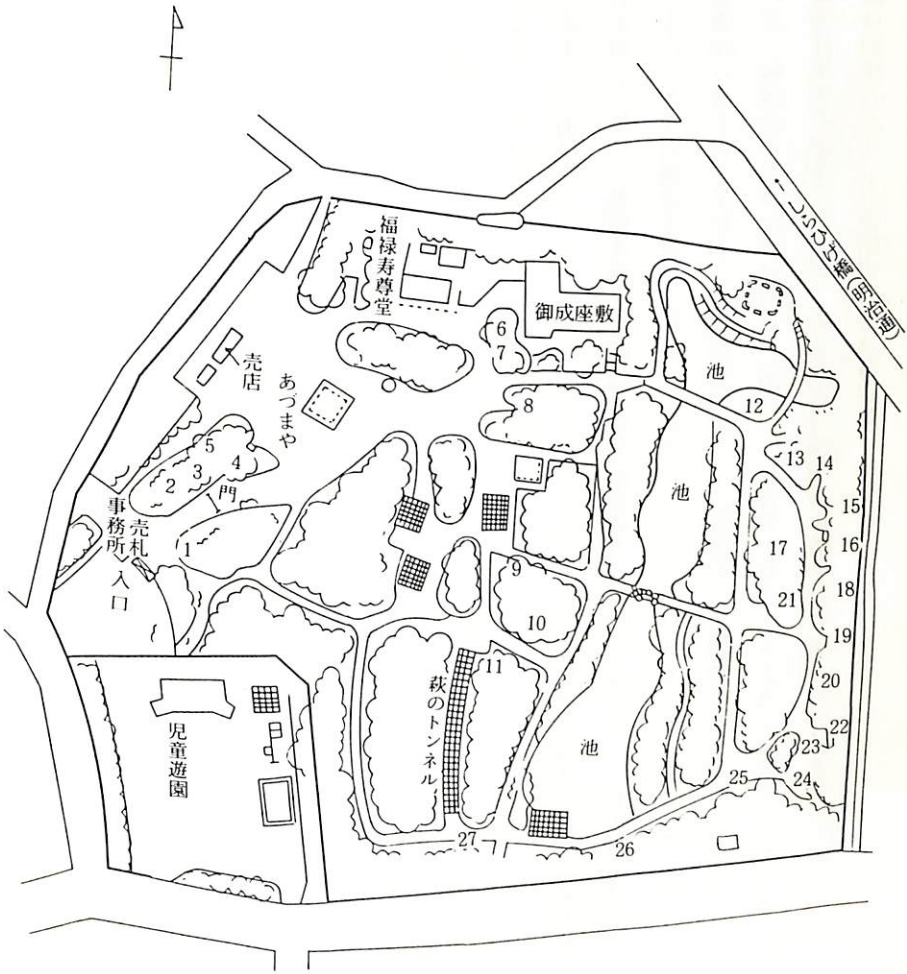
こうした百花園の開園を何よりも喜んだ文人墨客たちは、何かと口実を設けて来園し、茶を喫したり談笑したりしました。そして、蜀山人が「花屋敷」の扁額を掲げ、詩仏が、門の左右の柱に「春夏秋冬花不断」「東西南北客争来」の聯をかけ、千蔭は「お茶きこしめせ梅干もさむらふそ」の掛行燈を掲げる等して、百花園は江戸中にその名が知れわたり、庶民の行楽地にもなりました。なお、詩仏は「隅田川の土を以て製したる都鳥の香合云々」と角田川焼の看板を与え、園内で隅田川岸の土を使って楽焼きをし、香合のほか皿とか湯呑等素朴なものが作られました。

鞠塢は天保二年（一八三一）八月に亡くなりました。辞世の歌は「隅田川　梅のもとにてわれ死なば　春咲く花の肥料ともなれ」の一首です。墓は、近くの蓮花寺にあります。

この庶民の庭に、文政一二年（一八二九）三月に一一代将軍家斉が、弘化二年（一八四五）一月に一二代将軍家慶が来園したことは当時としては破格のことでした。

この名園も、明治以来しばしば災難にあい荒廃に瀕しました。当時寺島村に別荘を構えた小倉石油の小倉常吉氏はこれを措しく思い、私財を投じて園地を収め旧景の保存に努めました。そして後に公開の意図を持って亡くなられ、未亡人がその遺志を継いで昭和一三年すべてを東京市に寄贈されました。市は鋭意復旧に当たり一四年公開にこぎつけました。しかし、今次の大戦ですべて焼失し、現在の姿にまでなったのは同三三年頃以降のことです。ただ、福禄寿の尊像だけは残り、隅田川七福神の一尊として人々から厚く信仰されています。なお、ふだんは白鬚神社境内の小堂に祀られ、お正月だけ園内の福禄寿堂にお祀りします。

百花園は昭和五三年、〈国指定名勝及び史跡〉に指定されました。


福禄寿尊堂
御成座敷
売店
あづまや
門
売札
事務所
入口
児童遊園
萩のトンネル
池
池
池
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

1　「福禄寿尊」案内碑

碑の表に「隅田川七福之内福禄寿尊　正二位勲一等伯爵　土方久元」と刻まれ、碑陰に建立者名が連記されています。明治四一年の建碑。

2　松尾芭蕉「春もやや」の句碑

「春もやや　けしきととのふ　月と梅　はせを」と刻まれています。元禄六年（一六九三）の作で「梅月」と前書のある画賛の句です。天保七年（一八三六）の建碑。

3　千樹庵益賀「鳥の名の」の句碑

「鳥の名の　都となりぬ　梅やしき」

と刻まれ、碑陰に、抱一暉真書とあります。文化一一年（一八一四）の建碑です。抱一暉真は酒井抱一のことで、徳川末期の画家・俳人です。

4　亀田鵬斎「墨沱梅荘記」の碑

高さ一八七㎝の、さして大きくない碑ですが、亀田鵬斎の撰并書になるもので、名碑といわれています。「墨沱之瀕葛陂之傍荒圃鋤而新園成植之梅一百株」の書き出しで百花園の成り立ちを述べ、鵬斎が自分と百花園や鞠塢との関わりの中で、梅荘（百花園）の美しさや鞠塢の風流瀟洒を称えた美文が刻まれています。文化一一年

（一八一四）の建碑です。

5　**雲山先生看梅詩の碑**

宮沢雲山のこの詩碑は、それぞれ「金盤銀燭酔って郷たり」「林下の僊妹清浄の身」「清標高格百花の冠」で始まる三つの七言絶句が刻されています。文政一〇年（一八二七）の建碑です。

宮沢雲山、名は雉、字は神遊、雲山はその号です。詩人で小説も書いていました。

6　**茶筅塚**

「茶筅塚　おりたらん　草の錦や　花やしき　黙翁」

木石庵柘植黙翁の一周忌に門人達が師の遺志を継いで建てた碑で、漢学者大槻磐渓の長男大槻修の書です。碑陰に関東空也門中として大勢の門人の名前が記されています。関東空也門については詳らかではありません。しかし空也上人門徒が茶筅を作りこれらを商ったという話や、門人の号などから、茶道の一派ではないかと考えられます。

7　**松尾芭蕉「こにやくの」の句碑**

「こにやくの　さみしも些し　うめの花　はせを」

元禄六年（一六九三）の作で、芭蕉と去来との共通の知人の死を悼んで去来へ送った句です。梅の咲くころ、

せめて心ばかりでもと、梅を折り蒟蒻の刺身を供えて故人を祀ったとの意でしょう。金令舎鈴木道彦の書で、文化一一年（一八一四）の建碑です。

碑陰の「侊」という字は、「化」の字の中に「文」の字を入れたもので「文化」と読みます。この手法は割書といい昔の公文書などで、位勲、役職名、氏名などを一行に書かなくてはならない場合など、短く詰めるためによく使われました。

## 8　山上憶良「秋の野に」の歌碑

万葉歌二首の碑。憶良の和歌の碑というよりは、董堂敬義の絶筆となった「秋の七草の書」を残すために、門人達によって遺言通り百花園に建てられたものです。

董堂敬義は、本名中井敬義で、嘉右衛門と称しました。商家の番頭ながら書に巧みで、江戸の三右衛門の一人といわれました。狂歌でも活躍し、腹唐秋人と戯号しました。董堂が亡くなった文政四年（一八二一）の建碑です。読みは

「秋の野に　咲きたる花を　指折り　かき数うれば　七種の花」

「芽の花　乎花葛花　瞿麦の花　姫部志　又藤袴　朝貌の花」　「朝貌」はキキョウのことです。

## 9　大窪詩仏画竹の碑（「詩仏老人碑竹記」）

大窪詩仏の竹の画に、詩人佐羽淡斎が詩を題し、碑陰には、詩仏老人碑竹記として、硯学朝川善庵（常泉寺に

墓碑あり）の撰、巻菱湖の書という、文人四大家の合作です。文政五年（一八二二）の建碑です。

大窪詩仏（行）は徳川中期の漢詩人。草書と詩で名高く、また好んで墨竹を画き、気韻に富んでいたといいます。

10　**金令舎道彦「きょうの月」の句碑**

「けふの月　さてもをしまぬ　光かな　美知彦」

碑陰に「世中の　梅のさきけり　すみた川　文政一三年（一八三〇）九月　一桑庵野月建之」とあります。

道彦の一三回忌に、野月が道彦門の有志を語らって建てたものです。

道彦は鈴木氏、春秋庵白雄（白鬚神社の項参照）門の俳人であり医者でした。

11　**其角堂永機「朧夜や」の句碑**

「朧夜や　たれをあるしの　墨沱川　永機」と表に刻まれ、碑陰には、永機の略歴が記されています。

永機は、穂積氏、名は美之、老鼠肝の子で其角堂七世です。二八歳で受戒して無諍と名付けました。

明治三二年七七歳の時、友人等がこの碑を建てました。建碑者は魚河岸の人が多いのですが、俳優の五代目尾上菊五郎や書家の永井素岳の名も見えます。

12　**しのふつか**（忍ぶ塚）

二世河竹新七が、初代河竹新七の作った歌舞伎狂言「惹売」の正本をここに埋めて、その功績を遺すために建

てたものです。明治一三年の建碑。高林二峯書。

13　**きやうけん塚**（狂言塚）

二世河竹新七（古河黙阿弥）顕彰の碑。

娘と門弟達が明治二七年に建てたもので、高林二峯書。

古河黙阿弥は、幕末、明治の脚本作者で、「三人吉三」「鼠小僧」など三五〇余りの作品があります。本所南二葉町に没しています。なお現今では「河竹黙阿弥」が一般的な作者名となっています。

14　**「飯島光峨翁之碑銘」**

幕末江戸の画家飯島翁の顕彰碑。光峨は沖一峨の弟子で、東海、近畿、関東各地を巡って自然や風俗を師とし精進しました。門人達が翁の徳に報いるため、翁の知人の五峯高林寛（二峯の長男）に碑文を依頼し、明治三三年に建てたものです。

15　**井上和紫「紫の」の句碑**

「紫の　ゆかりやすみれ　江戸生れ　和紫」

碑陰には建碑者名と和紫の人となりが記されています。

和紫は永機の門弟で、魚河岸の鷲屋という魚問屋の主人です。明治三二年の建碑。

16 「哥沢芝金之碑」

哥沢芝金顕彰の碑で、榎本武揚が篆額を書いています。

芝金、本名は柴田金吉といい幕臣の子として江戸に生まれました。同好の士と共に、古くからの小唄節が野卑に流れているのを改めて一流を興し、盛んに行われるようになりました。のち、故あって「歌沢」を「哥沢」に改めました。哥沢節が歌舞伎の舞台に登るようになったのも、芝金の功績といえます。碑面の終わりに、次のような芝金作譜の名曲が記されています。

「ほととぎす　今一声のきかまほし　月はさゆれど姿は見えず
ヱヽぢれったい　何としよう　しんきくさいじゃないかいな」

明治三二年、三世芝金等の建碑です（妙緑寺・法恩寺の項参照）。

17 「矢田蕙哉翁之碑」

「鷺流狂言師　矢田蕙哉翁之碑」で、脇に、辞世の句、

「花暮れぬ　我も帰りを　急うずる」

が記されています。

鷺流は能狂言の一流（大蔵流・和泉流に対し）ですが、今は絶えています。蕙哉は、鷺流の最後を飾る名手でした。蕙哉が没した年（明治二六年）の七月に、蕙哉と縁のあった人々によって建てられました。表面の辞世の句以外の字は晋永機の筆になるものです。

18　**鶴久子「空蝉の」の歌碑**

「空蝉の　世のうきことはきこえこぬ　いはほの中も秋風のふく　久子」

とあり、左側面には、渋沢兼子等久子の教え子たちが、明治三五年、久子の三回忌に建碑した経緯と、久子を偲ぶ歌とを、御歌所歌人藤原粲が記しています。

久子は明治初中期の歌人で、和歌を以て宮内省に仕えました。また、本所松井町（千歳一・二丁目）の家宅で歌学を教えていました。

19　**二神の碑**

「くゝのちの神　かやのひめの神」

この二柱の神は、古事記にあるイザナギ・イザナミの両神から生まれた神で、『古事記』では「くくのちの神は木の神、鹿野のひめの神は野の神」としていますが、本居宣長は「かや」を「茅」として、野の神のほか草の祖神という解釈をしています。百花園の成り立ちから見ても、やはり、木の神、草の神としてここに並べて祀ったのでしょう。

20　**最中堂秋耳「限なき」の句碑**

「限なき　そらの要や　望の月　最中堂秋耳」

最中堂秋耳の履歴についてはほとんど分かっていません。「もなか屋」だったという説もありますが、真偽の

ほどは不明です。明治三三年の建碑。

21 「月岡芳年翁之碑」

二条基弘の題字、小杉榲邨の撰並びに書で、浮世絵師月岡芳年の伝記が刻まれています。

芳年は浮世絵を歌川国芳に学びましたが、画風は北斎の影響を多分に受けています。好んで奇嬌な姿態を写しましたがその筆は写実的で、明治時代の浮世絵に芳年風という一種の様式をもたらしました。明治中期の版画家として版画界の最後を飾った人といえましょう。門弟もすこぶる多く、建碑者の中に岡倉天心等の外、孫弟子の鏑木清方等門弟多数の名が見られます。明治三一年の建碑。

22 杉谷雪樵「芦雁図」の碑

表に雪樵の遺墨、「芦雁の図」が刻されている高さ一九〇㎝、幅一〇四㎝の大きな碑です。門弟の根本樵谷が明治三一年に建てたものです。

雪樵は雪谷流の画家で旧熊本藩士。明治二〇年上京し大いに名声を博し、しばしば宮内省の命で絵を描き、いつも褒賞にあずかりました。雪谷流掉尾の作家です。

23 螺舎秀民「芦の芽や」の句碑

「芦の芽や　田へ来水も　角田川」の秀民の句と共に三世螺舎孝節によって秀民の略歴が記されています。句

は晋永機の、略歴は市川三兼の書です。

碑陰には　「田へ引(ひい)た　あとの流れや　芦の花」

と孝節の句が刻まれています。

三世螺舎孝節が欽慕の意を表すため、明治一八年に建てたものです。

螺舎秀民は本姓片岡氏、江戸吉原の人で、其角の別号の一つである螺舎を継いで二世となりました。

24　**七十二峰十湖「何事も」の句碑**

「何事も　かゝる浮世か　月の雲　　七十二峰十湖」

『古今俳諧明治五百題』（明治一二年刊）に「十湖は、遠州豊田郡中善地　松島幸平」とあり、入集の句に、

「沫雪や　隣へはこぶ　膳のうへ(え)」

「茶畑に　裾はひらけて　春の山」などがあります。

碑の句の説教臭いのにくらべて平明自然な諷詠です。明治三四年の建碑です。

25　**雪中庵梅年「黄昏や」の句碑**

「黄昏(たそがれ)や　又ひとり行(ゆく)　雪の人　　雪中庵梅年」

雪中庵梅年は原田氏、通称を幸次郎といい、江戸四谷の人。雪中庵五世対山の門に入り、後、七世の鳳洲から譲られて八世雪中庵を継ぎました。明治二一年、雪中庵を門弟雀志に譲り、不白軒と号しました。

この碑は、雀志が明治一八年に建てたものです（要津寺の項参照）。

26 **北元居士「水や空」の句碑**

「水や空　あかり持あふ　夜の月　　北元居士」

北元は完来とまた午心の門下生で、江戸の人。初め都喜丸（月丸）、別号を橿の木・葎雪庵二世といいます。午心を追慕してその遺稿『玉田集』を上梓しています（完来は雪中庵四世、午心は雪中庵蓼太門で同門です）。天保九年（一八三八）旭惣連の建碑です（要津寺の項参照）。

27 **宝屋月彦「うつくしき」の句碑**

「うつくしき　ものは月日ぞ　年の花」

松本蔦斎書、明治二四年宝組の建碑です。

宝屋月彦については詳らかではありません。蔦斎は、明治大正の俳人で『古根草』『白がね草』その他数種の著書があります。

## 13　蓮花寺（れんげじ）

東向島三丁目二三番一七号

清滝山蓮花寺は、京都智積院末で真言宗に属し、本尊は空海自筆の弘法大師画像と伝えられています。

この寺の開山については諸説がありますが、一説は次の通りです。

最明寺入道時頼（鎌倉幕府第五代執権）が、兄の武蔵守経時追福のために、寛元四年（一二四六）鎌倉佐介谷（さすけがやつ）に巨刹を創建、蓮華寺と名付け、良弁法印審範（あきのり）を開祖として聖徳太子の御像を安置しました。その後京都禁裏から空海自筆の「女人済度厄除弘法大師」を請し、奉送を怠ってそのまま寺に安置しました。

経時の死後、子頼助は病身なので、執権職は叔父時頼に譲り、自ら剃髪して諸国を廻りました。その折、偶々今の寺島に来て一寺を建て、鎌倉の蓮華寺を遷し「女人済度厄除弘法大師」を本尊とし、右側に小さな堂を建て聖徳太子の御像を納め、佐々目大僧正頼助と号し、自ら開山となりました。時は弘安三年（一二八〇）八月二日でした。これが今の蓮花寺です（当寺も、昔は「蓮華寺」と書きました）。

この説には、宗派のこと、建立年月のこと、開祖のこと等から異論もあります。

1　「文政五年」「文化十五年」銘道標〈区登録文化財〉

文政五年（一八二二）銘のこの碑は、厄年の参詣人のために道標として門前に建てられたもののようです。とにかく霊験あらたかなお大師さまとして賑わいました。

なお、左側面には建立年月日が、右側には「西　白ひけ　はしはみち（白鬚　橋場道）」と刻まれています。もう一基の道標は、正面に「女人済度　御自筆　弘法大師」、左右両側面には、ともに「大しみち」とあり、裏面に、文化一五年（一八一八）の銘があります。これはもと、地蔵坂を上った墨堤に建てられたものです。

2　「天保三年」銘石燈籠

参道両側の赤御影石造りの大きな燈籠一対は、田中金六の寄進で、天保三年（一八三二）に建てられたものです。金六は江戸幕府の蝦夷地御用達をつとめ、その功により浅草新寺町（台東区菊屋橋付近）に屋敷を拝領して三人扶持を与えられ、天保三年八八歳で没しました。

なお、金六の父金左衛門は名主中山家の一族で、寺島村に住んでいました。

3　最上算子塚（さいじょうさんし）（「そろばん塚」）

最上流算術は会田安明が始めたものです。安明は出羽最上（山形県）の人で、はじめ鈴木安旦といいました。字は子貫、自在亭と号し、俗称は算左衛門です。

この塚は弟子と思われる中原耕張が文政三年（一八二〇）に建てたもので、上部に丸い穴があり、碑文は

「最上　算子塚　　山谷新鳥こへ　　中原耕張　　世中は何れの道もそろばんの　かけはしわたる士農工商」

とあります。

## 4　聖徳太子像

『江戸名所図絵』によると、太子堂の縁起は次の通りです。

「太子堂本堂の右にあり。本尊聖徳太子の像は一六歳の真影にして、太子自ら彫造ありしという。北条経時の念持仏にて、往古相州鎌倉、佐々目谷にありしを、弘安三年（一二八〇）秋、北条頼助、寺院並びに本尊と共にこの地へ引き移し、同年八月二日入仏供養を営みし故、今日に至るまで、この日をもって縁日とす。」

なお、現在の太子堂及び太子像は、戦後復興されたものです。

## 5　四国八八ケ所写しの石碑

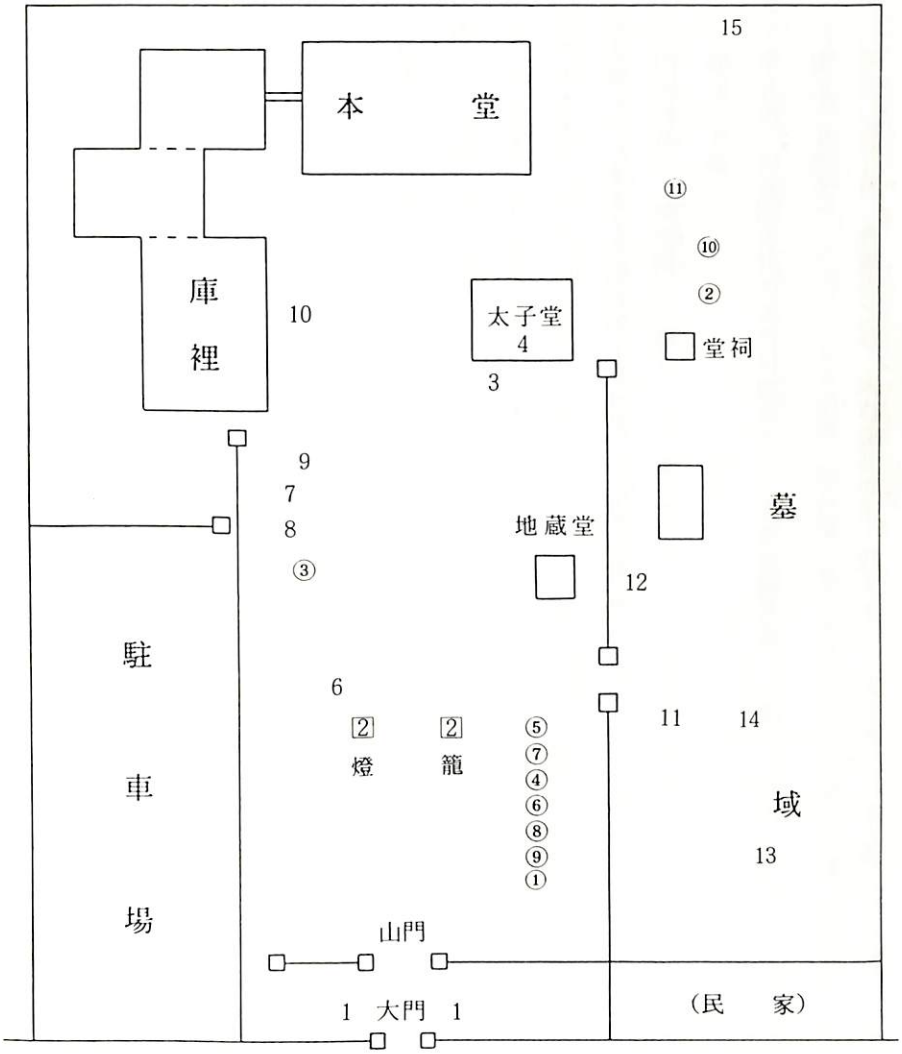
境内に、四国八八ケ所写しの石碑が一一基建てられています。年紀が慶応二年（一八六六）から明治三年までのものが一〇基、明治九年のものが一基です。最後の一基以外は二二世住職宥盛法印の時に建てられたものです。

これらを建てた人は、ほとんどが寺島村の住人ではなさそうで、浅草、下谷、上野、神田あたりの富裕な人々が「大師の寺」である当時に写し碑を建て、先祖の菩提を祈ったものと考えられます。

①「四国拾番写　阿波国　切播寺　天下泰平国土安全　五穀成就万民豊楽　子孫繁栄　為二世安楽」
「慶応二年建」

②「第五番　阿波国板野郡矢竹村地蔵寺写　本尊地蔵菩薩　六道（りくどう）の　能化（のうげ）の地蔵大井（ぼさつ）　みち引（びき）たまへ（え）此世後の世」
「慶応三年造立」

③「四国七拾五番　善通寺之写　本尊薬師如来　我すまば　よもきへ（え）はてじぜんつうじ　ふかきちかひ（い）の法の


15
本　　堂
⑪
⑩
②
庫
裡
10
太子堂
4
3
堂祠
9
7
8
③
地蔵堂
墓
12
駐
車
場
6
2
燈
2
籠
⑤
⑦
④
⑥
⑧
⑨
①
11
14
域
13
山門
1　大門　1
（民　　家）

（墨　田　川　高　等　学　校）

ともし火」

「慶応三年建之」

④「四国七拾三番　本尊釈迦如来　まよひぬる　六道衆生すくはんと　たつとき山にいづるしやかでら」

「讃岐国出釈迦寺写」

「慶応四年建」

⑤「四国七拾六番　まことにも　神仏僧をしらくれば　真言加持のふしぎなりけり」

「明治三年　讃岐国金倉寺写」

「しらくれば」は、原詠歌では「開くれば」です。

⑥「本尊大日如来　わづかにも　まんだらおがむ人はたゝ　ふたゝびみたびかゑらざらまし」

「七拾二番　四国八八ケ所之内　讃岐国曼荼羅寺之写」

「明治三年」

⑦「七拾四番　本尊薬師如来　十二神　みかたにもてるいくさには　おのれと心かぶと山かな」

「讃岐国甲山寺之写　明治三年建之」

⑧「観音の　大悲のちからつよければ　おもき罪をも引あげてたべ」

「六拾九番　讃岐国観音寺写」

「明治三年」

⑨「拾九番阿波国立江寺之写　本尊地蔵菩薩

いつくゝて　西の住居のわがたちへ　弘誓のふねにのりていたらん」

「明治三年建」

⑩「四国八十八箇所　第一番阿波国霊山寺写　本尊釈迦如来

霊山の　釈迦の御前に　巡来て　よろづの罪も消えうせにけり」

「明治三年」

⑪「第十七号　阿波国名東郡井戸邑　明照寺之写　本尊薬師如来

おもかげを　しばしもうつせ井戸の寺　心のあかをそゝぐところぞ」

「紀元二千五百三十六歳（明治九年）建之」

原詠歌は、「面影を写して見れば井戸の水　むすべば胸の垢やおちなん」です。

## 6　亀田則恒の碑

「老の身の　枯木にもまた死に花の　さきだつ妻の碑に向島　九十一歳翁亀田則恒」

「浦嶋の　亀田則恒齢さへ　つくことあらじ呉竹の杖　呉竹亭真直　俗姓金子勝五郎治喜」

この歌に、妻の七回忌に歌を手向けたこと、娘婿の金子勝五郎が歌を添えて彫らせたこと等が、歌同様懸詞をふんだんに使った技巧的な文で綴られています。

文政八年（一八二五）の建碑。

7 「題群盲評古之図」の碑

昔、鏡面王が群盲者に象を撫でさせ、それぞれ自分の思った象の形を述べさせた所、皆的外れの答えをしたという話がありますが、群盲者とは肉眼の盲者のことではなく、見性の無い衆生即ち衆愚のことである等、心眼の大切さについて述べています。

環中斎高独歩の撰並びに書で、その門人山中抜山が、天保五年（一八三四）に建てたものです。

8 宮内源之輔「先嬉し」の辞世句碑

「先嬉し　雪に明るき　西の空」　明治三年の建碑ですが、詠者・施主については不詳です。

9 「雪月雅望」の詩碑

「雪月雅望　山幽□離　春花秋葉　雲□鳥飛」

この碑は、石工の娘で一三歳の繁（号、春山）の筆になるもので、文政一一年（一八二八）の建碑です。世話人の下谷御成道白鼠屋は寺島村出身で、この碑の外、写し碑二基の世話人にもなっています。

10 永谷秀葉「常磐木の」の句碑

「新派芸術家月野喜代美の為　常磐木の　月かけ清し　秋の暮」と刻してあります。

亡くなった月野喜代美のために、浅草公園の常盤座関係の人達が建てたものです（「秋の暮」は晩秋のこと）。

## 11　六地蔵

六地蔵とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六つの迷界で苦しんでいる人々を救うという六種の地蔵菩薩を表したものです。

当寺の六地蔵は、小林惣吉氏によって明治三四年に安置されたものです。

この六地蔵の傍らに、地蔵真言を刻んだ木製の輪がありますが、これは転輪蔵を模したもので、これを回転させると真言を唱えた功徳があるといわれています（転輪蔵は経典を納めておく回転式書棚で、信者がこれを一回転させると、看経したのと同じ功徳があるといいます）。

## 12　植村蘆洲（ろしゅう）の墓

墓碑の「山東野老埋骨之処」は大沼沈山の書で、碑陰は沈山の撰文です（「野老」は田舎老人の意）。

蘆洲の生家は代々幕府の与力でしたが、若い時から文学に親しみ、わずか一九歳で大沼沈山の弟子となって漢詩を学びました。やがて家を弟に譲り文学に専念し、四〇年間も沈山に師事して一家を成しました。蘆洲は、師に深く愛され信頼されていましたが、明治一八年八月五六歳で師に先立ちました。『蘆洲詩鈔』『古詩註釈』等の著書があります。

なお、大山沈山は江戸下谷の生まれで、儒者で詩人。明治二四年没。

## 13　東条琴台の墓

琴台は寛政七年（一七九五）六月、江戸の芝宇田川町（港区浜松町）に生まれました。名は耕、字は子蔵といい、琴台はその号です。若い時から学問好きで博覧強記で知られ『儒林小史』（一〇巻）、『経籍通史』（二〇巻）等多くの著述があります。幕末に越後高田藩榊原氏に招かれて学問の師となりましたが、明治五年八月亀戸天神社の神官になりました。晩年に眼病で失明、明治一一年九月八四歳で没しました（木母寺の項参照）。

墓碑は「琴台東条先生之墓」となっていたものを昭和五一年「東条氏累世之墓」とし、側に墓誌を建てました。

## 14　大矢市次郎の墓

となりの北条秀司撰文の墓誌に次のように記されています。

「明治二十七年二月十一日、東京浅草に生まれ、昭和四十七年五月二十八日、七十八歳にて歿す。全生涯を新派演劇に捧げ芸格高厳、気骨稜稜、明治大正昭和を通じて最も偉秀なる大名優であった。その示した演技のすべては後進にとって永遠の経典である。」

## 15　佐原鞠塢の墓

百花園の佐原氏代々の墓で、「浄」の一字が記されているだけです。

昭和五二年、歓名寺（台東区元浅草三丁目）から当寺に遷（うつ）されたものです。

## 14 幸田露伴旧居跡（こうだろはんきゅうきょあと）

東向島一丁目七番一二号

露伴の向島での最初の家は、明治二六年に兄の郡司成忠大尉が千島探検に出発したので、その後に住むようになった家（寺島村字番場二五五）です。二番目の家は、露伴児童遊園の近くの雨宮酒店横の駐車場になっているところにありました。現在、明治村（愛知県犬山市）に移築されている蝸牛庵（かぎゅうあん）がそれで、作家幸田文さんはそこで生まれています。三番目の家となっていた、これまた蝸牛庵は、今露伴児童遊園になっている所にあって、明治四一年から、大正一三年に小石川（文京区）伝通院近辺に移るまで住んでいました。

幸田露伴

文豪幸田露伴は江戸下谷の生まれで、明治二一年、処女作『露団々』を発表して文学生活に入りました。翌年名作『風流伝』を刊行し、これより尾崎紅葉と並んで永く文壇の巨匠の地位を占めていました。博学宏聞で著述も頗（すこぶ）る多く、『枕頭山水』『五重塔』『風流微塵蔵』など広い分野ですぐれた作品を残しており、昭和一二年には第一回文化勲章を受賞しました。

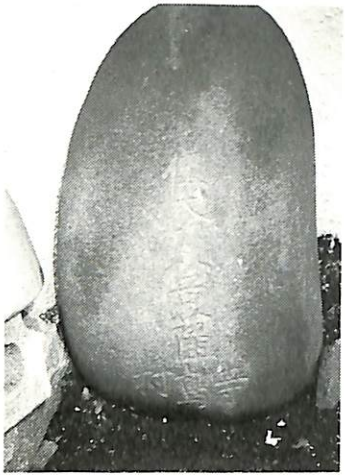
昭和二二年、八〇歳の高齢でその生涯を閉じました。

## 15 力石（ちからいし）（伍大力菩薩銘）

東向島二丁目四二番七号

現在、東向島二丁目会館前の植え込みに立てられています。正面には「四拾三貫目（約一六一・二五キログラム）」、「享保元歳（一七一六）」、左側面には「伍大力菩薩」、「寺嶌（島）村」と刻まれています。

力石とは、腕力や体力を鍛えるために重い石を持ち上げて、力比べや曲芸を行った石のことです。古代には占いとしても使用されていましたが、江戸時代には力自慢の人々が集まって競技化、娯楽化の傾向が強くなりました。当時は腕力のある者が一人前として扱われていたために、祭りの日などに神社の境内で力石を持ち上げて優勝できれば、とても名誉なことなのでした。優勝者は、神に感謝して力石を奉納したために、今でも神社の境内で力石を見ることができます。



力　　石

この江戸時代の力比べは深川（現江東区）から全国に広がって行ったといわれています。現在力石に刻まれた、年号の一番古いものは江東区内にある寛文四年（一六六四）銘のものですが、この伍大力菩薩銘の力石は隅田川沿岸では二番目に古く、また現在の東向島周辺がまだ「寺島村」と呼ばれていた頃に、村人が競技にうち興じていたことを表している、貴重な力石です。

## 16　長命寺（ちょうめいじ）

向島五丁目四番四号

天台宗延暦寺末で、古くは宝寿山常泉寺と号していたそうですが、創建年等は不明です。ただ寛永（一六二四～一六四三）のころ、三代将軍家光がこの辺りに鷹狩りに来た時、急に腹痛をおこしましたが、当時の住職が加持した庭の井の水で薬を服用したところ痛みが治まったので、長命寺の寺号を与えたといいます。一説では家光ではなく家康であるとしています。やがて井も長命水と名付けられました。

古くは境内に弁天堂や芭蕉堂がありました。芭蕉堂は宝暦年間（一七五一～一七六四）に俳人祇徳が建てた自在庵が始まりで、後に能阿によって再興され、長命寺の芭蕉堂と通称され、芭蕉の木像（現存）を安置していました。芭蕉堂は何回か火災にあい、大震災以後は復旧していません。

本堂に安置する弁財天は、隅田川七福神の一つに数えられ、本堂前に小池道子書の「弁財天」の碑があります。

1　**松尾芭蕉「いざさらば」の句碑**〈区登録文化財〉

芭蕉の句碑は全国で一、〇〇〇基以上もあるといわれていますが、その中でもこの句碑は、最も優れたものの一つといえます。

「いさゝらは　雪見にころふ所まで」

この句は、この地で詠まれたものではありませんが、雪見の名所向島にふさわしい句ではないでしょうか。

碑陰には、三世自在庵祇徳の文で、芭蕉や祇空、祇徳の略伝や、この碑の建立の経緯等が述べられています。それによると、我興（伊藤久兵衛）が発案し、寺島住の梅主が安政五年（一八五八）ころ建てたものです。

なお境内の「我興乃蘇鋏」の碑によると、我興が建てたことになっています。

また境内に「芭蕉雪見の旧地」の石標があります。表に「はせをゆき見の旧地」、左に「此おくに芭蕉堂あり」、裏に「自在庵祇□□」とあります。これを建てたのは蔵前の札差で俳人の祇徳ですが、芭蕉がここで雪見をしたという確証はありません。

## 2　十返舎一九「内損か」の狂歌碑

「なべて人のいかに異なりとおもふことも　常となりてはめずらしからねど　いつとてもあかぬものは　月の夜と米の飯　さては色と酒なるべし　内損か　腎虚とわれはねがふなり　そは百年も生き延しうへ」

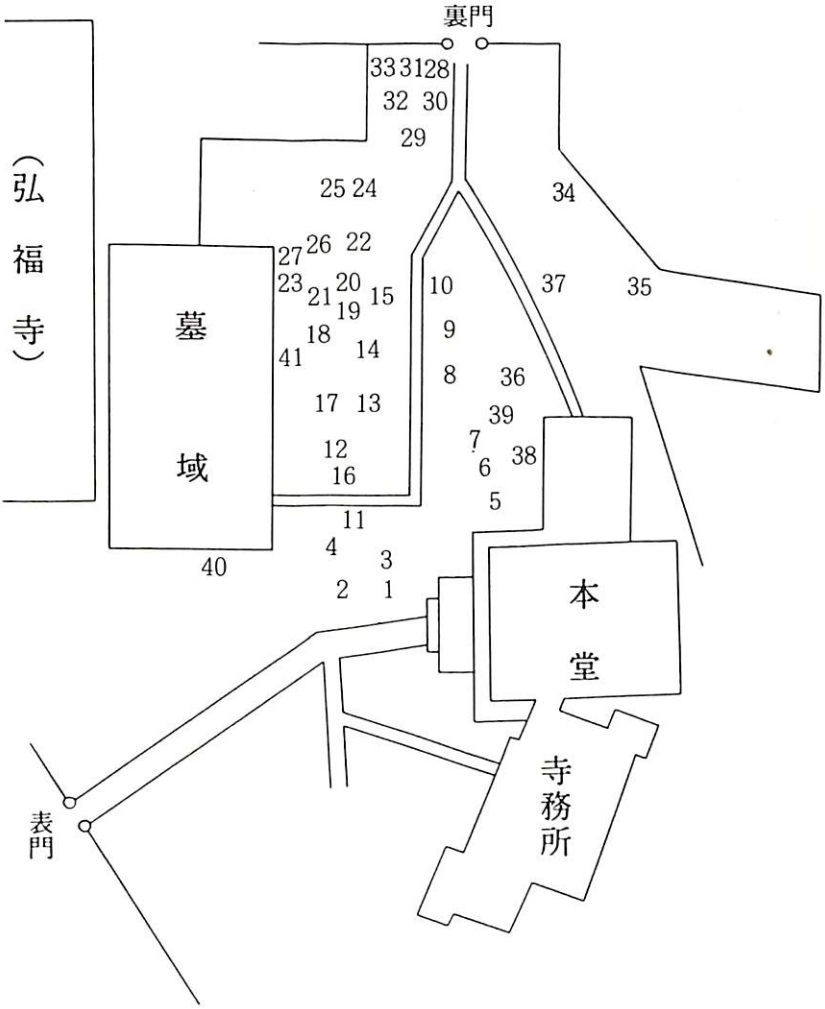
とあり、下部に熊手の絵が描かれています。

内損とは酒等で内臓を悪くすること、腎虚とは漢方の病名で、房事過多のためにおこる衰弱症のことです。

天保三年（一八三二）の建碑です。碑陰の人名の中の「十返舎一□」は、「十返舎一九」で、二世の号を継いだ弟子十字亭三九のことでしょう。

十返舎一九は、本名重田貞一といい、明和三年（一七六六）駿府（静岡県）の町同心の二男として生まれました。『東海道中膝栗毛』の作者として有名な江戸時代の戯作者です。

（隅　田　公　園）


裏門
33 31 28
32 30
29
25 24
34
27 26 22
23 21 20 19 15
10
37
35
18
14
41
9
8
36
39
17 13
7
38
12
16
6
5
11
4
3
40
2
1
（弘福寺）
墓域
本堂
寺務所
表門

### 3　橘東世「こころ行」の歌碑

「こころ行　果こそしらねすみた河　花の波たつ春の夕くれ」

碑陰に、この辺りの風情を愛した人（□木権作）が、幼い時の師橘東世に歌を乞い、それを石碑にしたということが記されています。

橘東世（子）は、橘守部の長男冬照の夫人で、女流歌人。歌学で一三代将軍家定の夫人天璋院に仕えました。

### 4　「長命水石文」の碑

この寺が長命の寺号を賜った経緯と井戸が長命水と名付けられたことを、時の住職最空が記しています。書は国学者の屋代弘賢で、天保三年（一八三二）の建碑です。

碑陰に、この寺に大久保主水が竹柏の苗を植えて石表を建てたこと、寺に長命の名水のあること、住職最空の人となり等が記されています。

なお、境内には、長命水の遺構もあります。

### 5　五狂歌師の狂歌碑

高さ一四三㎝ほどの石の表面に次の五首が刻まれ、裏面には「関儀兵衛」と刻まれているのみです。

「九十翁長者園　千代までも　爰に隅田の　長命寺　九十九までで　落葉かくとは
蜀山人　どのやふな　なん題目を　かけるとも　よむは妙法　連歌狂歌師

十返舎一九　辞世

八十三翁天霞道人

七十五翁雪廼屋富士丸　辞世

此世をば　どりやお暇に　せんこうの　煙りと供に　はひ左様なら

朝霞　引出す牛の　御前まへ　もふ草も芽を　さますた堤

寝ておきて　呑食ひの業　世苦の娑婆　けふは極楽　南無阿弥陀仏」

## 6　「江戸桜」の碑

明治二九年四月、歌舞伎座で九代目団十郎主演の「江戸桜」に出演した河東節連中の建てた記念碑です。

## 7　「孕山堂江雨燈影」の碑

「孕山堂江雨燈影」の題額の下に、扇を持った江雨の影絵を刻んだ異様な碑です。扇面に「辞世自書」として「身はされど　影のみここにすみだ川　月雪花のながめあかねば」とあり、裏面に、画家長野江雨の略歴が記されています。

慶応元年（一八六五）六三歳の時建てたものです。

## 8　「鼠取養犬　六助塚」

ねずみを捕るのが猫より上手だったという珍しい飼犬の塚です。台石の一部には、犬の頭部が彫り出されています。碑面には「名は六助、資性剛毅」と、人間を讃えるような銘文があります。北新川（中央区）の酒問屋の飼犬で、人々に愛されていましたが屠犬者に殺されたのを哀れんで建てた碑です。明治二一年の建碑。

9 **「我興乃蘇銕」の碑**

碑陰の文によると、我興は本名を伊藤久兵衛といい、たいそう俳句を好み、かつて芭蕉雪見の句碑を長命寺に建てました。その縁で、長女定子が父の五〇回忌に大蘇鉄を植えたということです。明治四一年の建碑。

10 **樹月「涼しさの」の句碑**

「洛陽に遊ぶことあり　意を加茂川にはずまして　寓居はや二とせに及びぬ　今とし甲辰水無月　ふと枕に伏して　涼しさの　ゆめは故郷へ　もとりけり　樹月」

とあり、弘化二年（一八四五）の建碑です。

11 **「密教正道応上綱遺詞」の碑**

表題の篆額の下に、非常に読み難い文字で、

「無生不生七十年神通遊化　任因縁無滅不滅即今夕去歟　来歟拙痴人認如生死看呵々

今になりて　猶あすありと思うかな　わかれはつらきものにそありける」と記されています。

この碑は倒して置かれていて、建碑の由来、年月等詳しいことは分かりません。

12 **「三代目橋市」の碑**

「三代目橋市」の下に奴髷が彫られ、左側面には、塗師としての技術・名声と奇行で有名な初代橋市（橋本市

蔵）を詠んだ狂歌

「いときれて　ひまのとれたる奴凧（やっこだこ）　あみたと友に光るすりこき」が刻まれています。明治二年の建碑です。

13　「遠湖先生墓碑」

司馬滕（遠湖）の墓碑で、撰と書とは清国駐日の初代副使で学者の張斯桂によるものです。清の光緒庚辰（明治一三年）の建碑です。

遠湖は唐津藩（佐賀県）の儒学者で博学多芸、画竹、挿花、点茶、建築、樹芸にすぐれ、砲術の外、洋銃の製作までできたといいます。また門人も多く、その数千余人に達したとのことです。

14　「山村一蔵先生碑」

山村一蔵は、岸和田藩（大阪府）医の子で、東京に出てお雇外国人のドイツ人ワグネルについて勉強しました。大学、外務省を歴任後、大学医学部教師となり、また本郷台町（文京区本郷五丁目）に自ら「独逸学校」を設立し、独逸学を教授しました。

この碑は、九鬼隆一の篆額で明治一三年の建碑です。

15　「奥田昌屏紀念」の碑

若くして亡くなった門弟の奥田昌屏を追福して、女流画家奥原晴湖が明治二一年に建てた記念碑です。

16 「帰囿伊東氏筆塚」

田中帰春に書を学んだ書家伊東帰囿は、暇さえあれば揮毫するのを娯しみにしていました。臨終に当たり筆硯を遺託された植松嘉重が、ここに埋めたことを表した碑です。天保一〇年（一八三九）の建碑。

17 「退鋒郎毛君瘞髮塚銘并序」の碑

二九歳で没した稲垣貞（子幹）という書家の筆塚です。「筆神佩阿君像」は酒井抱一の画で、銘と序とは亀田鵬斎の撰並びに書です。「退鋒郎毛君」とは禿筆のことで、ここでは筆を擬人化してその功を讃えています。

碑陰には、子幹の母静一尼が次のように記しています。

「愛子世にありしほど　常に持て慣らせし筆を埋めんとするに　今さら涙のとゞめがたくて
在しよに　かたらむ人とせしふでも　いまはなげきのはやこしとぞみる」

文化一〇年（一八一三）の建碑です。

18 「梅陰先生大黒君碑」

梅陰先生、氏は大黒、名は亀二郎といいます。父は幸大夫（光大夫）といい伊勢の人です。幸大夫は天明二年（一七八二）遠州灘で遭難して、北アメリカ州のロシア領アムチトカ島に漂着しました。いろいろな難儀を乗り越え女王エカテリーナ二世に拝謁し、一〇年後の寛政四年（一七九二）やっと帰国できました。将軍に報告の後、法によって御薬園に軟禁されますが、そこで生まれた長男が梅陰です。

梅陰は一四歳で商家に奉公し、仕事の合間に学問に励みました。父の没後、母を養うため学問を教え門弟数百人を数えました。忠孝の志が厚く、旧主の遺族のために献身的に尽くし、また母への孝養のため一生を独身で過ごし、母が没すると梅陰も後を追うように嘉永四年（一八五一）五五歳で没しました。

この碑は、妹の良吟比丘尼の名前で、門人達が嘉永五年（一八五二）に建てたもので、安井息軒の撰文です。

（回向院の項参照）

19 **「南無阿弥陀仏」の碑**

「南無阿弥陀仏」の右下に「願ひ居し先祖代々そ〔　　〕
われ今ともに苔の〔　　〕予か手をひらけ予か足〔　　〕」とあり、左に
「呉竹の　としのうちより鶯□　またかたことゝ人やと□□□」とあります。

父青山幸敬の遺言に従い、嗣子幸勧が妙解和尚に書を乞い、それを碑にしたものです。明治二年の建碑です。

20 **「筆つか」の碑**

碑陰に、「愚凝といふ　心に古くまとはれて　有無のわかれ□今そ知りける」と、七一歳の書家中川南山自書の辞世が刻まれています。

父のために、中川憲斎が文政八年（一八二五）に建てたものです。

21 「荷塘道人圭公伝碑」

遠山一圭荷塘道人は陸奥の人で、信濃に往き得度を受け寺門に入ります。内外の学問に通じ、特に音韻の学に優れ、長崎で金琴江から清楽を習得しました。その後江戸本所に住み清楽を伝えました。後出の鏑木渓庵も門弟の一人です。天保三年（一八三二）の建碑で、一圭の近くに住んでいた朝川善庵の撰です。

この碑の下部は、剥落と埋没とで完全には読み取れません。

22 「藤田呉江先生之碑」

藤田呉江の墓誌。呉江は富山藩先手足軽頭の子。江戸で学んだが藩に召喚され藩学の教授となり、戊辰の役には官軍側にあった自藩の参謀として戦い、戦傷を受けました。

廃藩後は絵画の道に入り、狩野派や南宗画を究めました。明治一七年、絵画共進会の審査官を命ぜられ、勅命によって「青緑山水」一幅を作り納めました。これより呉江の画は世に重んぜられました。

明治二二年の建碑で、明治天皇の書道師範長三州の書です。

23 好色院道楽宝梅居士「わか色は」の辞世句碑

男根の形をした碑石に

「わか色は　世のいろならす〔　　〕」とあり、戒名とともに生前の人柄をよく表しています。

下部は埋没しているので、「居士」は推測です。

24 「鏑木渓庵之碑」

上部が欠損していますが、碑文の中の「渓庵」などから鏑木徳胤の碑であると推定できます。徳胤は祖父梅渓、叔父市河米庵の扁号を取って渓庵と号しました。天質多能で諸芸に通じ、中でも清楽に勝れていました。初め遠山一圭について学び、その後声律に関わるあらゆるものを徴考して独自の流水調を完成し、また『清風雅譜』を著しています。

多くの入門者の中には、確堂（松平齊民）、容堂（山内豊信）、松堂（間部詮勝）の幕末三堂や、木戸松菊（孝允）、川勝蓬仙など名士の名も見られます。

松平確堂の篆額（「碑」の字の一部しか残っていません）、司馬遠湖の撰文、市河三兼（万庵）の書で、明治九年の建碑です。

25 「勝川春英翁略伝」の碑

文政八年（一八二五）、浮世絵師勝川春英の七回忌法会に、報恩の意味で門弟達が建てた碑で、その生涯、人柄、逸話などを記しています。文中、生年を記し誤っています。また、個性の強い写実的な手法が幕府の弾圧を招き、手鎖五〇日の処分を受けたので「世に聞こえたる絵師なることは人の知るところなれば言わず」として憚っています。

碑文は国学者で狂歌師の石川雅望が書いたものです。

26「**瘞雲山居士故帋碑**」

宮沢雲山が遺した故帋（紙）を埋めて建てた碑です。市河寛斎に詩を学び「詩才俊抜、尤も近体に長ず」と称されています。全国を周遊して多くの詩を作りました。

市河米庵が発起し、題額も書いています。

27 **好酒院杓盃猩々居士「我もまた」の辞世句碑**

盃の形の碑石に「我もまた　客となる身そ　魂（たま）まつり」とあり、

台石には「宝梅堂」と記されています。「好色院道楽宝梅居士」の碑と大層似ており、関連が考えられます。

28「**丹頂斎一声「斯はかり」の句碑**

「斯（かく）はかり　月は満つるに　かけ陶□」

丹頂斎一声については不詳ですが、裏面の建碑者名の中に「樹月」の句碑の建碑者と重複する人名が見られます。それにより樹月と同系統、または同地域の雑俳の点者であると推定できます。弘化四年（一八四七）の建碑。

29 **現在庵露心「人ありて」の辞世句碑**

「人ありて　ひとのすたらす　花盛（ざかり）」

碑陰に、「翁本姓青木氏、俳諧を以て市に隠る。人となり雅にあふれて滑稽。一章一句自ら新意を出し前人を

踏襲せず」とあります。明治七年の建碑。なお、露心の墓は当寺にあります。

30 **月双庵笑魚「花もやや」の句碑**

「笑斎居士はよろつの風流に〔　　〕其名諸国に　ひゝきあへり燃るにはやくし〔　　〕国へ旅立ちしを俳友の人々いたみの余りそのぬし〔　　〕言捨たることの葉をしるしの石にゑり〔　　〕わつかの手向となしぬ」

「花もやゝ　笑ひ尽して　五月雨るゝ　月双庵笑魚」　「世に有し時の約速に寿海老人白〔　〕」

笑魚は松塚幸衛門という札差で、財を散じて雑俳の点者になった人です。嘉永四年（一八五一）の建碑。

31 **「なみなみに」の句碑**

「なみなみに　散もつくさず　八重さくら」とだけ読める碑です。弘化三年（一八四六）の建碑。

32 **九十三翁田夫「紫陽花や」の句碑**

「紫陽花や　人も浅黄を　着て規式」

天保六年（一八三五）翁の一周忌の追福に、吾民が発起し「折句総連中」が建てた碑です。

## 33　出羽三山の碑

江戸期に盛んであった出羽三山信仰を伝える碑で、山名には、それぞれの本地仏の名号を示す梵字が刻まれています。羽黒山は観音（サ）、湯殿山は大日如来（アーンク）、月山は阿弥陀（キリーク）となっています。碑陰には請地、大畑、寺島等の向島の旧村別に信徒の名が刻まれています。当時の民間信仰の有様を伝えている点で価値ある石碑といえましょう。文政一一年（一八二八）の建碑です。

## 34　「柳北仙史之像」の碑

成島柳北は、天保八年（一八三七）江戸浅草に生まれました。名を弘、字を保民といいます。家が柳原の北にあるので柳北と号しました。幼い頃から賢く学問好きでした。一八歳で家督を継いで侍講に進み、将軍家定・家茂二代に仕えました。尊皇攘夷論の盛んな中で彼は漢学を修め、一方で洋学者柳河春之、福沢諭吉等と交友を重ねて、欧米の事情や学術を学ぶことに努めました。

慶応元年（一八六五）以来しだいに重用され、兵制に当たり、一方外国奉行から会計副総裁に進み、幕政に加わりました。

幕府が倒れると、明治新政府に仕えることを潔しとせず、向島の別荘海棠園（現言問小学校）に悠々自適の生活を送りました。しかし、明治四年、浅草本願寺（東京本願寺）に学舎を設けて子弟を導き、明治五年には本願寺光瑩の外遊に従ってヨーロッパを視察し、西欧の学芸の理解吸収に努めました。

明治七年九月、朝野新聞の社長となると、雑録欄を担当して軽妙洒脱の筆を揮って巧みに時事を風刺し、ある

いは花街の風流を叙して大いに読者を喜ばせました。この方面の著作として『柳橋新誌』も有名です。

また外遊の折習得した知識を生かして、日本の生命保険制度の草分けである「共済五百名社」（安田生命保険の前身）の創立に努力しています。明治一七年、四八歳で没しました。この碑は社創立の功績を永く伝えようと、共済五百名社によって明治一八年に建てられました。

35 **「重修大久保忠郷植竹栢之碑」**

元禄五年（一六九二）、大久保忠郷が竹柏の苗木を長命寺境内に植えたことを石文に表したが、古くなったので再びその故由を記した碑です。文政六年（一八二三）の建碑。

36 **守川周重（ちかしげ）「月をただ」の辞世句碑**

「守川周重之碑　豊原国周門人周重　辞世　月をたゝ　頼（たより）に消（きゆ）る　秋の雲」

守川周重は、国周門人の浮世絵師で、三世歌川豊国の孫弟子に当たります。明治三三年の建碑です。

37 **滑稽庵五音「安心の」の句碑**

「安心の　里と見えけり　桃の花　　八十四翁滑稽庵五音」の右上と右に

「古（いに）しへ（え）の姿か秋の　隅田河　　泰窓吾民」

「かたみにと　書（かき）のこしたる言のはは　いはほ（わお）とともに朽せさらまし　女　秀子

世を安くふるにつけても忍ぶかな　身に残したる親のひかりを　男　秋山」とあり、上の扇形の部分には次のように記されています。「五音ぬしは我久しき友にてみやび雄なりしを　ためしなく高きよはいにて身まかりめるを　其子たちの石ふみ立て世に残さまほしとておのれにかゝするも　なき世まで浅からぬ契有けりと筆とるまゝに

埋もれぬ　親の名のみか　かきとめし　こすゑの花も　世に匂うらむ　千浪」

千浪は、国学者・歌人の加藤千浪（牛島神社の項参照）であろうと思われます。折句総連の判者達が明治三年に建てたものです。

38　「（納）札塚」

頭部が欠けているので題字は「札塚」しか読めませんが、内容からみて「納札塚」と思われます。題字は万庵三兼（市河万庵）の書です。

「我が国納札の原…や、いとも畏き寛和の法皇、観音…百の刹を順礼し玉ひしより起こり、後ち…文化のはじめ大儒天愚孔平なる者、汎くおこないたり。」と納札の起源等について記されています（寛和の法皇とは花山天皇のこと）。

39　「万治二年」銘庚申塔〈区登録文化財〉

「奉供養庚申地蔵大菩薩二世安楽所」「万治二年（一六五九）十一月」の銘があり、地蔵像が彫られています。

区内では一番古い庚申塔です。

40　**橋守部の墓**〈区登録史跡〉

守部は江戸時代の国学者で、平田篤胤・伴信友・香川景樹らとならんで、天保の四大家といわれました。通称は北畠源助、号は池庵といい、天明元年（一七八一）伊勢に生まれ、一七歳の時江戸に出ました。一〇年余は芝新銭座、または京橋八丁堀に住み、その間に初めて国学に志しましたが、全く独学でした。二九歳の時武州幸手に移り、四〇歳すぎごろから民部と称しました。四八歳のころ浅草弁天山（浅草寺宝蔵門に向かって右あたり）に居を定めました。やがて『山彦冊子』を刊行して名声をあげ、以後続々と名著を出しました。守部の国学は本居宣長に対抗する意識をもって成立しているといわれています。

なお、守部は晩年に本所の法恩寺付近に住み、嘉永二年（一八四九）六五歳で没しました。

庚　申　塔

41　**春秋庵梅笠の墓**

俳諧師梅笠は春秋庵九世で、文久三年（一八六三）六月一一日、五五歳で没しました。墓石左側に

「紫陽花やかはりかはりて　もとの色　波平」

と刻まれています。

## 17 弘福寺（こうふくじ）

向島五丁目三番二号

弘　福　寺　山　門

かつて隅田村香盛島（こうもりじま）（高森島）にあった小庵を、延宝六年（一六七三）黄檗宗の寺として、江戸氏一族の牛島殿の城趾に寺地を受け、ここに移し現在に至っていると伝えています。開山は鉄牛道機禅師で、開基は小田原城主稲葉正則です。鉄牛は石見（島根県）の出身で、京都宇治万福寺の創建にも尽力し、大変行動力のあった禅僧と伝えられています。

現在の本尊釈迦如来像は、後世の松雲禅師の作といわれています。伽藍は関東大震災で焼失し、昭和八年に再建されました。黄檗宗特有の唐風の特徴を持ち、本堂両翼にある円窓、堂前の月台、柱にかかる聯額など、他の寺院にあまり見られないものです。

また、森鴎外は少年時代、この地域で過ごしてもいますが、津和野（島根県）藩主の菩提寺の関係から、没後ここに葬られています。しかし、震災後の隅田公園造成のため、三鷹禅林寺へ改葬されました。

黄檗宗の関係から鳥取藩池田家、津和野藩亀井家ゆかりの寺院として、多くの関係者の菩提寺となっています。なお、隅田川七福神のうち、禅宗にち

なみ「布袋尊」が安置されています。

1　**咳の爺婆尊**

寛永（一六二四～一六四三）年間、風外和尚は相州（神奈川県）真鶴の洞穴で求道生活をしていましたが、その地の岩石を使って自分で父母の像を刻み、朝夕の供養をしていました。当時の小田原城主稲葉正則は、その石像のやさしい姿、見事なでき、さらに和尚の心根に打たれて、この石像を請い受けて供養していました。その後、菩提寺の当寺に納められ祀られてきました。

風外和尚の名と徳から、人呼んで「咳の爺婆尊」として咳・風邪の病にご利益があると、煎豆や番茶をそなえて供養する習わしが伝わっています。

2　**池田冠山の墓碑**〈区登録史跡〉

明和四年（一七六七）江戸に生まれ、幼名を鉄之丞、恒次郎のちに定常といい、天明五年（一七八五）に本家筋の養家を継いで、鳥取藩支藩（西館）の藩主となりました。若い時から学問を好み、佐藤一斎等にも学び、古今和漢の書、地誌仏典にまで興味を示しています。

享和元年（一八〇一）若くして藩主の座を子に譲り、その後は、専ら著述を楽しみとし、晩年は「冠山道人」とも号しました。文政一二年（一八二九）に鉄砲洲の邸が焼けてからは小名木川筋砂村（江東区）に移り、園芸や庭造りの楽しみも加えています。当時の人々は佐伯侯毛利高標、仁正寺侯市橋長昭と並んで文学三侯とも称し

ています。天保四年（一八三三）六九歳で没し、鳥取藩ゆかりの当時に葬られました。編著書には『浅草寺志』『江戸黄檗禅刹記』『墨水源流』など数多くあります。

### 3　建部綾足の墓碑

建部綾足（たてべのあやたり）は弘前藩（青森県）の家老の次男として享保四年（一七一九）に生まれましたが、幼くして父を失い実兄のもとで成人しました。二〇歳の時弘前を出奔して江戸に出、俳人志田野披の門に入り俳諧などを学びました。四〇歳以後は絵画にも熱中し、また歌道では片歌の再興を唱道し、加茂真渕の門に入り国学を修めました。晩年には雅文調の読本『西山物語』を著したり、日本初の水滸伝の翻訳となった『本朝水滸伝』を出しています。その他、俳諧・絵画・国学・紀行・歌道など広い分野にわたって活躍しています。本姓は喜多村で、のち建部と名のっています。安永三年（一七七四）に没しました。

碑面には「吉野の山にてよめる」として「波とのみ　みふねの山の　山桜」とあり、下部に自画像が描かれています。碑陰には「法諡知院即心是空居士　安永三年三月十八日卒　享寿五十有六　建部凌岱建墓会　昭和十四年七月建之」とみえます。

### 4　「貞享五年」銘梵鐘

区内で鐘楼をもつ寺院は少ないのですが、当寺の梵鐘は井伊氏によって寄進された、貞享五年（一六八八）の「牛頭山弘福寺大鐘銘並序」として始まる銘文の記された、貴重なものです。

## 18 三囲神社（みめぐりじんじゃ）

向島二丁目五番一七号

三囲神社は、神楽殿の東側に建つ「三匝山祠碑（みめぐりさんしひ）」によると、現在地の北方、田圃の田にあって「田中稲荷」と呼ばれていました。文和年間（一三五三～一三五五）近江三井寺（滋賀県）の僧源慶が東国遍歴のとき、牛島のこのあたりに壊社をみとめ、弘法大師ゆかりのことを聞いて、社を改築しようとしたところ、土中より白狐にまたがる老翁の像を得ました。その時、白狐が現れ神像を三回まわったところから、「三囲」の名としたと伝えています。

神社の本殿は震災・戦災を免がれ、安政（一八五四～一八六〇）の建築と伝えています。元禄六年（一六九三）に、俳人宝井其角が村人に代って雨乞いのために句を詠じ、翌日雨ふったと『五元集』にみえています。このことが世上に広く伝えられ、『江戸砂子』や『江戸名所図会』にも載りました。

また三囲にあやかって、三井氏が江戸に進出したさい守護神と崇め、以来三井家一統の尊崇は続いてきました。

境内には隅田川七福神のうち恵比寿・大国天の二神が祀られ、その内殿は文久三年（一八六三）大工棟梁清水喜助が寄進した立派なものです。

三囲神社本殿

なお石造遺品としては、「寛延三年（一七五〇）」銘道標、「寛政一一年（一七九九）」銘常夜燈〈区登録文化財〉、「享和三年（一八〇三）」銘水鉢などがあります。

紹介の他に、漢文碑として「本松斎一得翁之碑」「第二世本松斎一得君碑」「一勇斎歌川先生墓表」「錦村青木先生之碑」「永田甚七君記念碑」「（大島尭田）寿蔵碑」「一菴小林先生之碑」、句歌碑として林甫「水音や」の句碑、本町軒青人「読み人の」の狂歌碑、対松館「達波や」の句碑、萩廼屋鳥兼「いまは唯」の狂歌碑、晋其角「山吹も」の句碑、二世歌沢虎右衛門「露の笹」の句碑、天明老人尽語楼内匠「むさし野の」の狂歌碑、五世・六世・九世川柳の句碑、百多楼団子「けふは身の」の辞世狂歌碑などがあります。

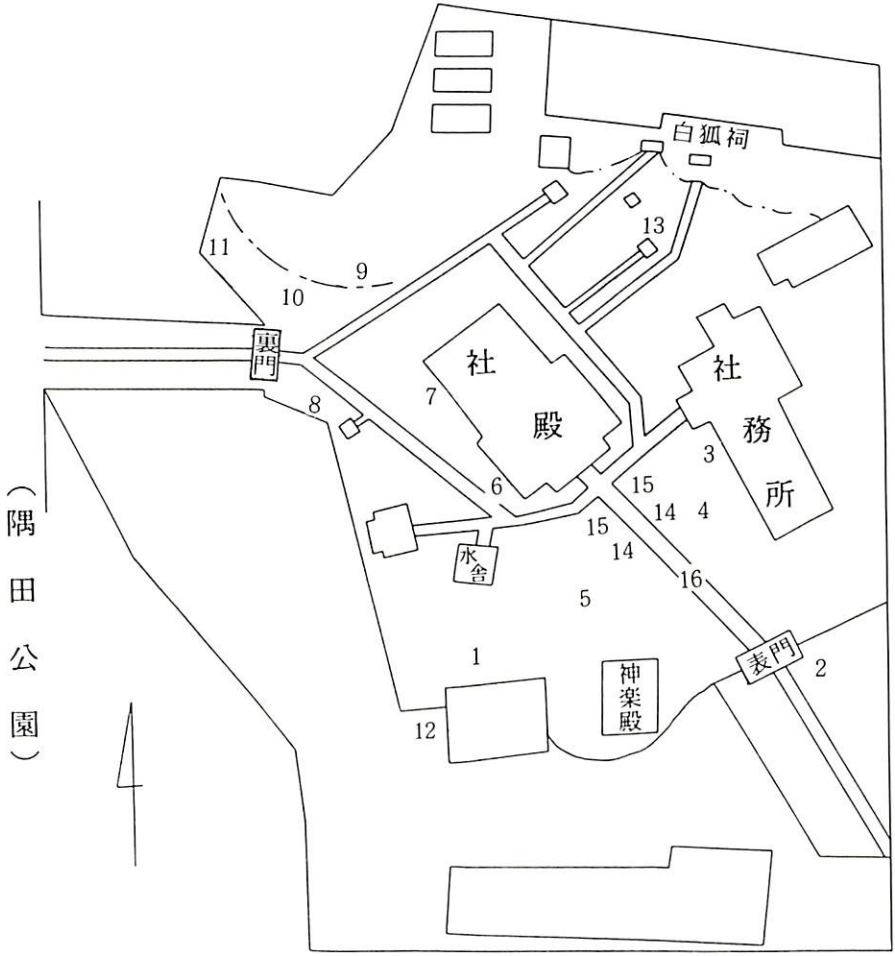
1　「菱湖先生之碑」

江戸後期の書家、巻菱湖（一七七七～一八四三）の顕彰碑と言えるもので、彼のあくなき研鑽のさまを朝川善庵（常泉寺の項参照）の撰文、門弟大竹培の書で詳しく述べられています。なお、篆額は日野資愛（すけなる）の筆です。

菱湖は幕末三筆の一人とされ、名を大任、字を致遠といい、越後（新潟）の人です。江戸に出て亀田鵬斎に学び、欧陽詢・李北海の書をよくして一家を成し、菱湖流とよばれました。弘化三年（一八四六）の建碑。

2　日比翁助「いしがきの」の歌碑

境内入口右側の石垣は、江戸城修復の際に不用となった石で築いたと伝えています。全体が碑とも言えるもので「いしがきの小石大石持合（ひ）ひて　御代はゆるがぬ松ケ枝の色」としています。


白狐祠
13
11
9
10
裏門
社殿
7
8
社務所
3
6
15
14
4
15
14
水舎
16
5
1
表門
2
神楽殿
12
（隅田公園）

三越の発展に貢献した日比翁助（美勲）の、三越店員への精神訓で、昭和一一年三越店員等が建立したものです。

### 3　萩廼屋裏住「楠の」の辞世狂歌碑

裏住は、姓を久須美、通称を白子屋孫左衛門といい、享保一九年（一七三四）に生まれました。日本橋坂本町二丁目（中央区）で更沙染を業としていましたが、大屋となっていたので狂名を大屋裏住と称しました。寛政年中（一七八九～一八〇一）に京都の公家から「萩廼屋」の号を贈られています。文化七年（一八一〇）に没しました。

「楠の　つよきも老のたのまれず　くちての後は　石となるもの」という辞世の狂歌を刻み、表と裏に杏花園大田氏（大田南畝）が裏住を偲んだ漢詩と伝記が刻まれています。

### 4　宝井其角「ゆふたちや」の句碑（雨乞の碑）＜区登録文化財＞

元禄六年（一六九三）は非常な日照りで、困り切った農民がこの三囲神社に集まり雨乞いをしていました。ちょうど俳人其角が門人の白雲と連れだって吉原へ行く途中、三囲神社に詣でて、このさまを見た其角は、能因法師が雨乞いの和歌を神に献じた故事にならって、「豊か」な実りの願いをこめて「ゆ・た・か」の三字を詠みこんで「ゆふだちや　田を見めぐりの　神ならば」の句を献じたといいます。

其角は寛文元年（一六六一）江戸に生まれ、姓を榎本、のち宝井と称した江戸中期の俳人で、芭蕉は嵐雪と共

に蕉門の双璧として重んじました。なお、自選句集『五元集』に「牛島三囲に雨乞をするものにかはりて、夕立や田をみめぐりの神ならばとうたえば、翌日雨降る」と記されています。

この句碑は六蔵庵宝井によって、安永六年（一七七七）に建てられましたが、現在のものは明治六年に三越店中の人々による再建のものです。

### 5　服部山蝶「きぬぎぬの」の句碑

山蝶は魚河岸鮮魚問屋を営むかたわら俳句を学びました。碑面には山蝶の句に市川三升が付句した「きぬぎぬの　浅黄桜と　見しや夢　山蝶　　蝶の羽　袖にのこる　草の香　三升」とあります。碑陰は九代目団十郎（市川三升）の撰文を河竹其水（三代目新七）が校し、梅素玄魚が書したものです。

### 6　西山宗因「白露や」の句碑

文化九年（一八一二）江戸で西山宗因の流れをくむ素外などが発起人となり、始祖宗因の俳句の中で秀句といわれる「白露や無分別なる置どころ」の句を刻んで建立したものです。

宗因は慶長一〇年（一六〇五）肥後（熊本県）に生まれました。そして、大阪天満宮の連歌界の重鎮となりました。俳諧を始めたのは晩年に近く、それも余技としてでした。句風は軽妙洒脱、急速に俳諧の人気を集め、談林俳諧勃興の起因となりました。芭蕉も「宗因なくんば我々が俳諧今以て貞徳の涎（よだれ）をねぶるべし　宗因は此道中興開山なり」と言いきるほどです。

7　朱楽菅江「執着の」の辞世狂歌碑

「執着の心や娑婆にのこるらむ　よしのの桜　さらしなの月」と「の」の字を特徴のある書体で刻み、碑陰には「先生　姓山崎　諱景貫　字道甫　朱楽菅江　其号也　生于元文戊午（一七三八）十月廿四日　終于寛政戊午（一七九八）十二月十二日　葬于青山青原寺」とあります。なお、菅江は幕臣で牛込（新宿区）に住み、大田南畝とも親しく交わっていました。狂歌師として世評の高い人でした。

8　「秦蒙将軍之象」の碑

建碑発願者は日本橋通り旅篭町に筆問屋を経営し、江戸第一の筆商と呼ばれた高木寿頴で、明治一六年四月一六日、蒙恬の忌日に合わせて除幕式が行われました。

寿頴は蒙恬を敬慕し、四〇年の歳月をかけて円山応挙筆の蒙恬の画像を探しあて、その喜びを碑石に残そうとしました。しかし、不幸にも実現しないうちに不帰の客となったので、友人知人が彼の宿志を果たしたものです。蒙恬は秦の始皇帝に仕えた勇将で、秦の蒙将軍としてきこえ、万里の長城を築いたりもしましたが、文人としてもその名が高く、とりわけ動物の毛を使って今のような筆を完成したことで、筆祖と仰がれています。

9　富田木歩「夢に見れば」の句碑

本殿の真後に建っている小さな句碑で、「夢に見れば　死もなつかしや　冬木風」といかにも木歩らしい句が刻まれ、その薄幸の生涯が偲ばれます。

なお、木歩の師である臼田亜浪の書により、友人・知人たちによって、彼の一周忌にあたる大正一三年九月に追悼の意をこめて建碑されたことが、碑陰の短いことばでわかります（隅田公園の項参照）。

10 **「助高屋小伝次之碑」**

大きな碑で「大日本少年俳優長　助高屋小伝次之碑」と刻まれています。裏面に「よにてりし沢の小草の露のたま　哀つねなき風にちりけり　明治三十三年五月　梅庵居士書」等がみられます。小伝次は神童とよばれるほどの演技を示しましたが、惜しくも一六歳で没しました。

この碑は、もと木母寺の少し手前の千鳥ケ岡にあったものを移転したものです。

11 **「表功碑」**（普国警察大尉ヘーン君表功碑）

日本の警察の指導に来日した、プロシアの警察大尉ヘーンの功績をたたえた碑で、明治二七年に建立されたものです。

12 **木遣音頭の碑**（木遣塚の碑）・**力石**

三基の碑が財団法人江戸消防記念会のつくった柵でかこまれています。**木遣音頭の碑**は、円柱状の抗打の型をしたものです。**木遣連名碑**には、いろは四八組の江戸火消の組名と旧町名、それに鳶頭の名がみえ、町火消の参考資料ともいえるものです。建立は明治八年です。

また、音頭碑の周囲に安永二年（一七七三）などの四個の**力石**がみえます。

13　**老翁老嫗（ろうおうろうう）の石像**

元禄（一六八八～一七〇四）のころ、この三囲稲荷の白狐を守る老夫婦がいて、祈願しようとする人が老夫婦に頼み、田圃に向かって呼んでもらうと、どこからともなく狐が現れて願いごとを聞き、またいずれかへ姿を消してしまいます。しかし、他の人がどんなに呼んでも決して現れなかったということです。俳人其角もそのありさまを「早稲（わせ）酒や狐呼び出す姥（うば）が許（もと）」と詠んでいます。

老夫婦の没後、里人や信仰者がその徳を慕って老夫婦の石像を建てたと伝えられています。

老翁像には「元禄十四年（一七〇一）辛巳五月十八日　四野宮大和時永　生国上州安中　居住武州小梅町」、老嫗像には「大徳芳感」とだけ刻まれています。

14　**狛犬**（一対）〈区登録文化財〉

本殿前の狛犬で、小松石で造られた総高一八六㎝のものです。奉納者一二一名の姓が陰刻され、信仰の広さが分かります。

なお、吽形狛犬台座裏面に「延享二年（一七四五）乙丑年五月二十二日　石工和泉屋太郎介」とみえ、どっしりとした立派な造りといえます。

15　**神狐**（一対）〈区登録文化財〉

本殿正面に並ぶ神狐で、小松石で造られた総高一六二㎝のものです。台座側面に「向店（むこうだな）」と刻まれていますので、越後屋（三越の前身）の奉納と思われます。彫成のすっきりした柔和な優れた神狐といえましょう。

16　**鳥居**（四基）

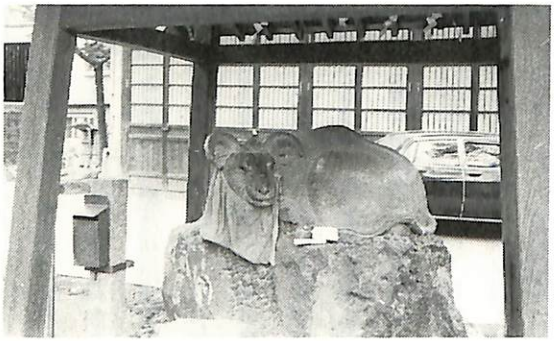
当社にはたくさんの石造鳥居がありますが、本殿前の二の鳥居は、高三四〇㎝、左柱に「**慶応二丙寅年**（一八六六）」、右柱に「大阪屋銀蔵」と刻まれています。

また、本殿土手寄りの恵比寿・大国天を合祀する摂社の鳥居は、高さ二七五㎝、左柱に「明和元甲申年（一七六四）建立　**文化三年**（一八六三）癸亥正月再建」右柱に「三井家督中　世話役　山口武兵衛」とあります。本殿裏の鳥居は、高さ三一五㎝、右柱に「願主惣中　世話役　井田弥兵衛　山口武兵衛　八丁堀石工太郎助」左柱に「**明和元甲申歳**（一七六四）十一月吉日　建立」とあり、かなり痛んでいます。

土手側の石造大**鳥居**は、よく江戸川柳や錦絵にも描かれているもので、銘こそみえませんが名物といえましょう。

## 19 牛島神社（うしじまじんじゃ）

向島一丁目四番五号



撫牛

関東大震災で焼失する被害を蒙りましたが、かつては少し北の墨堤常夜灯の東にあり、隅田公園の開設にあたり昭和七年に現在地に移りました。旧地には記念標石が建っています。

縁起によると、貞観（八五九～八七九）のころ慈覚大覚が一草庵で素盞之雄命（すさのおのみこと）の権現である老翁に会い、「師わがために一宇の社を建立せよ、若（も）し国土に騒乱あらば、首に牛頭（ごず）を戴き、悪魔降伏の形相を現わし、天下安全の守護たらん」との託宣により建立したと伝え、牛御前社と呼ぶようになったとも伝えます。また、『江戸名所図会』では、牛島の出崎に位置するところから、牛島の御崎と称えたのを、御前と転称したものであろうと説明しています。本所総鎮守の社として知られています。

また、由緒によると、治承四年（一一八〇）伊豆に旗上げした頼朝が、敗れて房州に逃がれ、再挙して隅田川を渡る際には、千葉介常胤が当社に祈願してことなきを得たといいます。以後千葉氏の崇敬が厚く、宝物として月輪の紋をつけた千葉家の旗が伝わり、箱書に、「此指物自先祖　持来候　然而

牛御前宮者　先祖千葉家被再興候　慶長十八丑歳（一六一三）九月十五日　国分宗兵衛正勝敬白　牛御前御別当最勝寺」とあります。

また当社には、後刻と思われる貞観一七年（八七五）銘をもつ**板碑**が所蔵されていましたが、震災時に損壊して現物は実見することができません。なお、その拓本が所蔵されています。

紹介の他に、「**船茂竹松君紀念碑**」（明治二三年）、九個の**力石**〈区登録文化財〉等もあります。

1　**談洲楼烏亭焉馬**（うていえんば）「いそがずば　濡まじ物と　夕立の　あとよりはるる　堪忍（かんにん）の虹　文化七歳（一八一〇）庚午三月吉日」と刻まれています。焉馬は本所竪川の大工の棟梁で、文化人としてきこえ、五代目市川団十郎と義兄弟を結ぶほどで、団十郎をもじって談洲楼と号しました。また竪川に住むことから、立川とも号しています。

天明四年（一七八四）に仲間の狂歌師、戯作者連を向島の料亭武蔵屋に集めて、自作自演の落し噺しの会を催したことは、江戸落語の始まりといわれています。なお、この碑は焉馬本人が建てたものです。

2　「**殲蒙古仇碑記**」（「北条時宗偉功碑」）

文永一一年（一二七四）・弘安四年（一二八一）の、元寇の役として知られる蒙古軍を撃退した北条時宗の功績をたたえた碑です。明治一八年、仮名垣魯文・肝付兼武等によって建てられています。

3　「荻園加藤先生之碑」

幕末明治の国学者であり、歌人でもあった加藤千浪（弥三郎）の碑です。漢文碑と和文碑とがあります。荻園とも号し、国学を浅田由豆流（岸本由豆流）について学び、歌道、書法にも秀でていました。漢文碑は明治一〇年一二月門人等によって建立されました。平山省斎篆額・服部謙撰文・巻菱潭書です。和文碑は篆額・年紀が剥落していますが、漢文碑と同期と思われ、彼の縁者・教え子たちによって建立されたものです。

4　奉納「撫牛」

これは仏寺の御賓頭盧様と同じように、自分の悪い部分と撫牛の同じ部分をなでると、病気がなおるという信仰で、肉体だけでなく心もなおるという心身回癒の祈願物です。また、子どもが生まれた時、涎掛を奉納し、後にこれを子どもにかけると健康で成長するとも伝えられています。

文政八年（一八二五）ころ奉納されたと伝えます。明治初年の向島に住んでいた淡島寒月の句に「なで牛の石は涼しき青葉かな」と詠まれています。また、牛島小学校出身の堀辰雄の作品の中にも、「メランコリックな目ざしをした牛」とも描かれています。

5　神牛・狛犬〈共に区登録文化財〉

牛島神社には左右一対の神牛が奉納されています。奉納願主は、本所仲之郷村の大工中と大工久次郎で、安政

六年（一八五九）の奉納です。石工は本所小梅村角次郎となっています。

また、境内玉垣内にある一番奥の狛犬は、享保一四年（一七二九）本所中之郷・横川町若者中が奉納したもので、形体も装飾の少ない素朴な民芸を感じる造りのものです。

### 6　大田南畝詩碑

正面に「奉献　世話人　須崎村　小梅村　中ノ郷村　押上村　惣若者中」、右側面に「貞観緑字歸然存　牛渚残碑墨水村　神化長留玄牝跡　蘋蘩不絶素鵞尊　文化辛未秋　南畝覃書」とあります。

文化八年（一八一一）に、氏子中の若者達が世話人となって、南畝をわずらわし、牛島神社の由緒をうたってもらい、碑として建立したものでしょう。

### 7　「文久二年」銘鳥居〈区登録文化財〉

隅田川に面した西門の鳥居は、高さ三七五cmの明神型で、材質は花崗岩です。

銘を左柱に「文久二壬戌年（一八六二）正月」、右柱に「奉献　御手洗信七藤原正邦」としています。この人物については明らかではありませんが、近くの子育地蔵堂の傍らに奉献されている万延元年（一八六〇）銘の庚申塔に筆をふるっていることから、これらの地域に関わりの深かった人物と思われます。

## 20 堀辰雄旧居跡（ほりたつおきゅうきょあと）

向島一丁目七番六号

堀辰雄は、明治三七年一二月二八日麹町区（千代田区）平河町に生まれました。父の浜之助は広島藩士で、維新後上京し裁判所に勤めていました。三九年、母志気（しげ）は辰雄を連れて、向島小梅町の妹の家を頼って平河町の家を出ました。そして四一年、志気は向島須崎町の彫金師上条松吉に嫁しました。

地元の牛島小学校から、芥川竜之介も学んだ両国の府立第三中学校（両国高等学校）に入学し、大正一〇年には中学校四年で第一高等学校理科乙類に入学しています。関東大震災で父母と三人で隅田川に避難しましたが、母を失いました。翌年四月に向島新小梅町の新築の家に移りました。それが隅田公園隣のこの場所でした。

昭和一三年四月結婚と同時に軽井沢に行き、愛宕山の近くに新居を定めています。しかし一九年喀血し、以来病状が思わしくなく、二八年五月二八日、四九歳の若さで永眠しました。墓所は多磨霊園にあります。

辰雄は室生犀星・芥川竜之介の二人を師と仰いでいますが、フランス文学を咀嚼（そしゃく）した「聖家族」「美しい村」「風立ちぬ」など多くの名作を残しています。とりわけ、「花を持てる女」「幼年時代」「水のほとり」などの作品には、向島界隈が多く描かれています。

また、牛島小学校では一時、後に作家となる佐多稲子と同級でした。

## 21 隅田公園（すみだこうえん）

向島一・二・五丁目

関東大震災の災害の反省として、東京市内に数カ所の火除地を設置する計画が、当時の復興院で取上げられた際、名勝史跡の墨堤を復興整備させるため、隅田公園設置案が帝都復興計画に基づいて実地に移されました。

大正一四年六月着工、昭和六年三月に完成という五カ年余をかけた大工事でした。隅田川を中にはさんで、本所、下谷両区にまたがる河岸公園で、総面積一八万七、〇〇〇㎡、内本区側が九万六、七七四㎡です。

その結果、本区側には、美しい日本庭園をもつ旧水戸藩下屋敷を含み、桜並木も整然とした近代公園の装いをみせ、新名所として復活しました。しかし、戦災や、高速道路六号線の建設によって様相も大変貌をとげましたが、昭和五二年、区政三〇周年記念事業として墨田区側の公園の整備を旧水戸邸跡を中心に大々的に行い、再び隅田公園の面目を一新しました。

また、昭和六〇年墨田区・台東区の隅田公園を結ぶ歩行者専用X字型の「桜橋」が架設され、橋自体にも公園

常夜灯

としての機能を持たせました。嵩上げされた護岸から水辺まで降り、水と親しめる親水テラスも整備されました。

1 「墨堤植桜之碑」

墨堤の植桜の由来を述べた碑です。篆額は榎本武揚、撰文と書は浜村大澥です。

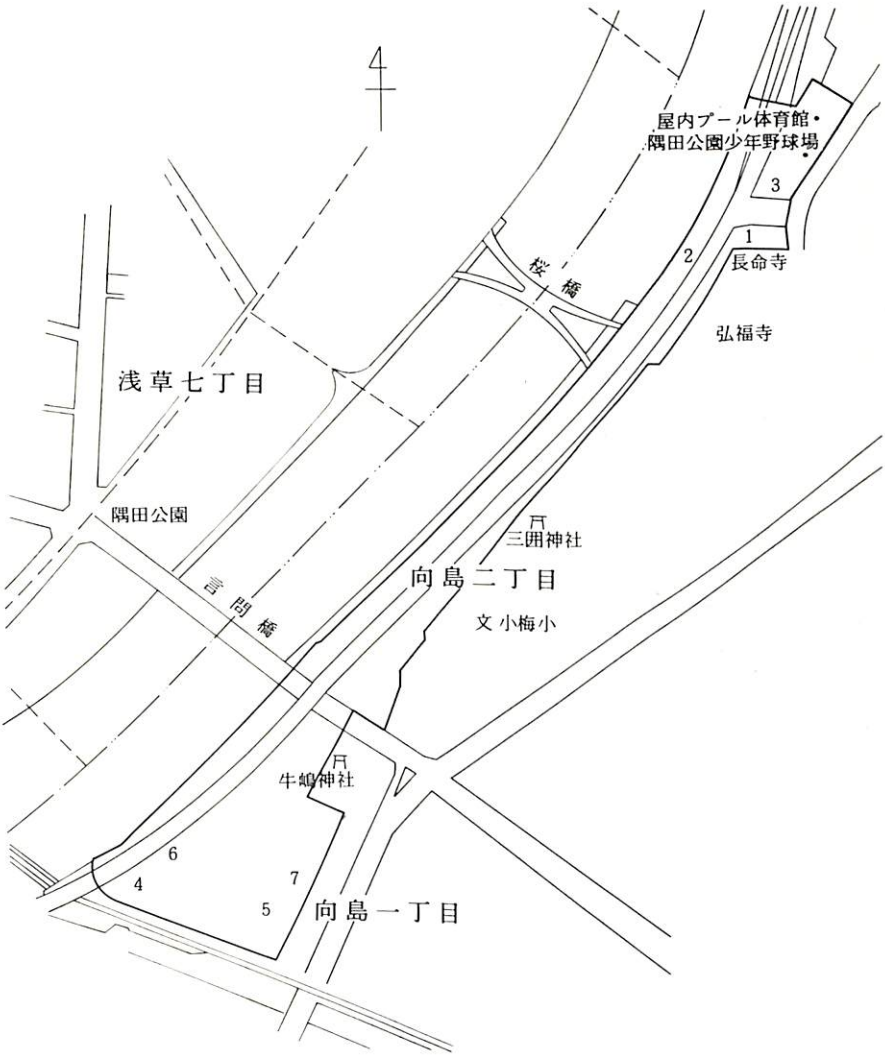
墨堤の桜は四代将軍家綱の時に始まりますが、本格的に植栽されたのは、享保一〇年（一七二五）八代将軍吉宗の命によるものです。尓来数次にわたり、多くの人々の努力でこの事業はうけ継がれ、寺島村境・木母寺から三囲・牛島両社を経て、徳川水戸藩邸前・枕橋まで連らなったものです。

明治二〇年、大倉喜八郎・安田善次郎・川崎八郎右衛門などがはかって、故人成島柳北の遺志をついで建碑したものです。そして同二九年、洪水のおそれを避けるため、川岸地から現在地に移されています。

2 伝「明治四年」常夜燈〈区登録文化財〉

牛島神社がまだこのあたりにあった明治四年、土手から神社へ下る坂のとば口に建立されたといいます。隅田川を往来する川船のための灯台としてその安全を祈るとともに、墨堤の灯明も兼ねていました。常夜燈を目印に花見客が集まり、ここで一息いれて散策を続けた明治の風情を回想させるなつかしい遺品の一つです。

本所一円の鎮守神である牛島神社を示す「本所総鎮守」と刻んであり、台石には、本所にゆかりの幕末、明治に生きた多数の奉納者の氏名が刻まれていることも、貴重な資料となっています。墨堤の幾度かの盛土のため移転も繰り返され、現在の場所に落ち着いたわけです。


屋内プール体育館・
隅田公園少年野球場
3
1
2
長命寺
弘福寺
桜橋
浅草七丁目
隅田公園
三囲神社
向島二丁目
言問橋
文 小梅小
牛嶋神社
6
4
7
5
向島一丁目

### 3 「流鐙会之碑」

言問亭主人外山新七が、明治一一年隅田川とゆかりの深い左近衛権中将在原業平の一千年忌を記念し、都鳥に擬した流燈を隅田川に流し、修法会を催しました。そして、一二年中将を言問の岡に祀り、そのことを墨堤のほとりに住む成島柳北に撰文を願い、この碑を建立しました。

震災の被害により碑文は大部破損していますが、前田斎泰の篆額の文字も残り、言問団子舗東側軒下に大切に保管されています。

また、この碑と並んで**外山佐吉**「都囮囮　捨て気安し　ほとゝきす」**の句碑**があります。

### 4 富田木歩終焉の地

富田木歩は明治三〇年、向島小梅町（向島三丁目）に生まれました。本名は一といいます。幼くして両足の自由を失い、小学校にも入学できませんでした。木歩の家は竹屋の渡しや「大和田」という鰻屋を営んでいました。しかし木歩の生まれるころから家運が傾きはじめていました。一七歳のころ俳句誌「ホトトギス」を知り、俳句に親しんでゆきます。「犬猫と同じ姿や冬座敷」、「死装束縫ひ寄る燈下秋めきぬ」、こんな句を吟じさせています。女工となった妹も、奉公に出た弟も結核でなくなり、母も脳溢血で失い、こんな句も残しました。「母のみとりに仏燈忘る宵の冬」。木で義足をこしらえ歩くことを工夫しますが、歩けるわけがありません。その願いが「木歩」の号に表されています。

そして、大正一二年の大地震に、枕橋の土手まで助けられて避難しましたが、橋はすでに焼け落ち、避難者の

荷物も火を吹き、やがて猛火に包まれてしまいます。木歩二七歳の若さで、ここ隅田公園枕橋のたもとは、その悲しい終焉の地となってしまいました。翌年、句碑が三囲神社境内に建てられました。

**5　明治天皇「花くはし」の句碑**

明治天皇が明治八年、当時の水戸徳川邸に臨御された時によまれた歌「花くはし　桜もあれど此やどの　よよのこころを我はとひけり」を刻んでいます。邸跡が震災後に公園になったことを記念して、昭和五年三月に建立されたものです。

また川沿いには、明治天皇が海軍のカッター競漕天覧を示す「明治天皇　海軍漕艇天覧　玉座阯」の**標石**もあります。

**6　藤田東湖「天地正大気」の詩碑**

「天地正大の気粋然として神州に鍾る。秀でては富士の嶽となり、巍々として千秋に聳ゆ。」と日本古来の国体を賛美した「正気之歌」は、尊皇攘夷論者の水戸藩士、藤田東湖が弘化二年（一八四五）から三年間、小梅の水戸屋敷に幽閉されている時に作られたものです。

東湖は文化三年（一八〇六）水戸に生まれ、安政二年（一八五五）の大地震の時、五〇歳で小石川の藩邸内に圧死しました。

この詩は、当時の尊皇攘夷論者・志士の間に愛唱され士気を鼓舞したものです。なお、この碑は昭和一九年六

月東湖会が建碑したもので、当時の国情の一端を物語っています。

7　「二峯先生之碑」

書家高林二峯の卒するのを偲んで、息子で同じ書家の五峯高林寛等が、二峯の墓所のある円通寺の門前に建てた碑です。高さ四五〇㎝に及ぶ大きなものですから安定も悪くなり、平成元年隅田公園に移築されました。

高林二峯は文政二年（一八一九）、榛名と妙義の山間、上野国（群馬県）碓氷郡下後間に生まれました。よって、二峯と号しました。諱は信好、字は子述、多四郎といい、鵞翁とも号しました。明治三〇年、齢七九で没しました。

篆額は勝海舟で、碑陰には関係者名が数多く記され、酒類販売店の金看板の文字にも気易く手を染めていた彼の、交流範囲の広さがうかがえる碑です。

## 22 常泉寺（じょうせんじ）

向島三丁目一二番一五号

慶長元年（一五九六）の創建で、開山は仙樹院日是上人、開基は高橋新右衛門と伝えます。延宝七年（一六七九）御水尾天皇第一皇女が徳川家宣へ降嫁するに従った、日顕上人が常泉寺に入ったり、家宣の養女政姫を常泉寺に葬るなど、徳川家の信仰を得ました。寺料三〇石を給され、境内も源森川から続き、本行坊・本種坊・本住坊の三塔頭（たっちゅう）もありました。現在は日蓮正宗富士大石寺（静岡県）の末寺になっています。

### 1　朝川善庵の墓〈都指定旧跡〉

天明元年（一七八一）片山兼山の末子として江戸に生まれました。諱は鼎、字は五鼎、善庵または学古塾と号しました。父兼山が早く没し、母は遺児を連れて医家朝川黙翁に再嫁しました。黙翁は遺児たちをかわいがり、わけても善庵を愛し、自ら句読を授け、長じては山本北山に学ばせもしました。

善庵も兼山のあとをうけて、本所小泉町（両国二丁目）に住み、儒者・医者として知られ、嘉永二年（一八四九）没しました。松浦熙の「善庵朝川翁墓碑銘」（嘉永三年建立）もありましたが、惜しくも関東大震災で損壊してしまいました。墓碑は昭和三年に改修されています。

2 「医聖漢張仲景先生之碑」

漢の長沙地方長官でもあり、医聖と仰がれ『傷寒論』等を著した張仲景の功績をたたえて、漢方医滝清（たききよし）が大井鮫洲（大田区）の別業に文政一〇年（一八二七）建碑したものです。朝川善庵の斡旋でしょうか弘化元年（一八八四）、常泉寺に移築されたものです。立派な見ごたえのあるものです。

3 「従三位勲二等薬学博士下山君碑」

近代日本の薬学に貢献した下山順一郎（忠興）は尾張犬山藩（愛知県）士で明治三年一八歳の時、藩貢進生として大学南校（後の東京大学）に学び、東大医学部を経てドイツ留学の後、東大助教授、陸軍薬剤官などを歴任し、さらに諸外国で研究を重ねて、日本最初の薬学博士の学位を取得しました。

その後も内外の大学や薬学界の要職にある傍ら私費を投じて薬草園を開き、海外の薬草を移植するなど、多くの功績を残しています。明治四五年、六〇歳で病没しました。

篆額は旧犬山藩主の子である成瀬正雄です。大正二年七月建立。

4 加藤たき「花に鳥」の句碑

「花に鳥　春十分の　寝ざめかな」とあり、「明治十七年、江戸橋北畔堀江町加藤門生中建之」とみえます。

## 23 森鴎外旧居跡（もりおうがいきゅうきょあと）

向島三丁目三七番二五号

森鴎外（林太郎・一八六二～一九二二）は明治五年一一歳の時に、津和野藩（島根県）亀井家の侍医であった父に伴われて、向島小梅村の当時本邸であった屋敷内（本所高等学校西隣り）に初めて上京しました。その後屋敷近くの小梅村八七番地に住みますが、同六年には家族全員も上京したので、現在の本所高等学校のグランドの一部にかかる小梅村二三七番地の家を購入し移り住んでいます。弟篤次郎・妹きみ（小金井喜美子）も、この地の牛島小学校に学んでいます。明治一二年一家が千住に転居するまで、鴎外にとっても多感な少・青年期の一時をここで過ごしたわけです。

長じてのち軍医総監・帝室博物館長、とりわけ小説家として一時代を画す足跡を残しています。

鴎外最初の墓所は、同郷石見国出身鉄牛禅師開山であり、亀井家の菩提寺でもあった向島弘福寺にありましたが、震災後の隅田公園建設の区域にかかり、墓所は同宗の三鷹の禅林寺に移転されました。

また、鴎外最初の号は曳舟川からとった牽舟居士を名のり、鴎外の号もこの地の隅田川の都鳥に因むかと思われます。

## 24 秋葉神社

向島四丁目九番一三号

このあたりは請地といい、古くから千代世稲荷として祀られていましたが、後に遠江国（静岡県）秋葉権現を分け祀って相殿としています。元禄一五年（一七〇二）一二月に別当千葉葉栄が苦心して立派な社殿を造営し、墨東でも著名な神社となったと伝えています。江戸時代は火伏の神として諸大名やその夫人達の信仰を集め、社勢すこぶる高い時もありました。多くは燈籠にその名残りをとどめています。

灯籠

『葛西誌』によると、社地六、九五二坪（約二万二、九四〇㎡）、年貢地六、八〇五坪となっています。また、『江戸名所図会』には、「境内林泉幽邃にして四時遊覧の地なり。門前酒肆食店多く各生洲を構へて鯉魚をかふ」と書かれています。さらに安藤広重の「江戸名所百景」にも紅葉の名所として描かれています。

時代が降り関東大震災・太平洋戦争による災害によって、昔の面影はすっかり消えてしまいました。

1　石燈籠（七基）

宝永元年（一七〇四）銘の上州沼田城主藤原正永（本多正永）が

奉納した石燈籠一対（両基）〈区登録文化財〉、また、**宝永二年**（一七〇五）銘の左近衛少将源（酒井）忠挙（ただたか）（前橋城主）奉納の石燈籠一基と、**宝暦八年**（一七五八）銘の伊奈源忠宥（ただおき）奉納の石燈籠一基が、あたかも一対のように並んでいます。さらに、**宝永二年**（一七〇五）銘の前橋城主源（酒井）忠挙奉納の燈籠〈区登録文化財〉一基と、**寛保元年**（一七四一）の郡山城主柳沢吉里の室源頼子（忠挙の女）奉納の燈籠一対両基があります。吉里といえば、将軍綱吉の寵臣として絶大な権力をふるった柳沢吉保の子息です。こうした奉献燈籠の数々を見ると、かつての当社の繁栄の一端がうかがえます。

2 **「秋葉神社文書」**〈区登録文化財〉

当社に伝存されている古文書・古記録は一〇四点に達し、「秋葉・稲荷両社来由記」、『千葉社記』など縁起及び別当寺である満願寺の山号・寺号呼称に関する「達書」などの創建資料を中心に、醍醐寺（京都府）三宝院末としての本末関係や大峰山（奈良県）入山に関する一紙文書、明治初年における満願寺の廃寺・飛木稲荷移管文書から成り立っています。

また、京都吉田家から秋葉・稲荷両社に下りた正一位の「宗源宣旨」、そのほか公家・徳川御三家・大名・大奥などの各家からの寄進・祈願に関する書簡・記録など豊富な内容となっております。

## 25　高木神社（たかぎじんじゃ）

押上二丁目三七番九号

社伝によると、応仁二年（一四六八）創建と伝えています。祭神は高皇産霊神（たかみむすび）で、古くは第六天社と呼ばれていましたが、明治初期に高木神社と改称したといいます。かつては大きな臥竜（がりゅう）の松があり、曳舟川を上下する舟の目印にもなったと伝えています。

1　「安政四年」銘水鉢

方形の平面の円くほりくぼめて貯水部とし、側面は長方形で、その正面に「奉納」、左側面に「安政四丁巳年（一八五七）九月吉日　氏子中」と刻まれています。

2　「弘化二年」銘狛犬

乱石積みの上に安置され、左右同形で阿・吽の区別がありません。左側の狛犬の銘文から、外神田平永町代地の白鼠屋藤七等が奉献したことがわかります。右側の狛犬の銘文には「海福山正円寺現住　順静代」とみえ、隣の正円寺が当社の別当寺であったようです。

## 26　正円寺（しょうえんじ）

押上二丁目三七番四号

応仁二年（一四六八）に常照法印が開山したと伝えられています。天台宗に属し海福山医王院といい、本尊は釈迦如来です。

1　「寛文二年」銘地蔵像

覆堂（さやどう）に安置されているので保存はきわめて良好です。

江戸初期の雰囲気を伝えるもので、舟形光背を細身にし、尊像に比べて不似合なほど大きく、上端に反りを持たせています。

光背の銘を四行に分けて「奉造立地蔵大菩　薩念仏結衆為現　当成就殊者為法界　衆生同利倶益也」とし、年紀を「于時寛文二年（一六六二）□（モ）寅二月七日」としています。また、袖の銘に「武州寺嶋新田　念仏同行」として元右衛門ほか三三名を刻んでいることから、地蔵念仏講による建立であることがわかります。

2　「宝永二年」銘地蔵像

これもまた覆堂に納められた地蔵像です。左右に「奉造立地蔵菩薩尊像　地蔵講供養二世安楽也」の銘があり、宝永二年（一七〇五）の造立です。地蔵講中四九名が結衆して、現当二世の安楽を願っての造立でしょう。

3　「正徳三年」銘庚申像

三眼六臂（さんがんろっぴ）の像は天邪鬼（あまのじゃく）を踏まえています。保存は良好ですが、銘の一部に磨滅がみられます。年紀銘などを左右二行に分けて「奉納庚申供養　正徳三癸巳年（一七一三）十月十日」とし、「講中寺嶋　新田村」の山崎清八良等一七名（台座銘）を刻んでいます。

4　「享保一九年」銘庚申像

正徳三年銘のものと並んでいます。

定形の庚申像で、左右に「享保十九年甲寅年（一七三四）二月十四日」とし、「寺嶋新田村　講中拾五人」としていますが、権兵衛（台座銘）等九名の連記で終っています。

5　光明真言百万遍塔

後補も含めて三重の基壇に立っています。

正面に「奉納大乗妙典六十六部日本回国供養塔」、右側面に「奉念誦光明真言百万遍成就」、左側面に「文化十四丁□歳（一八一七）十一月日　武州葛飾郡寺嶋村　行者　仁兵衛」とし、台座に「世話人　武州　万吉」等八名を掲げています。

## 27 飛木稲荷神社

押上二丁目三九番六号

創建は不詳ですが、言い伝えによりますと鎌倉幕府の滅亡後、北条氏の一門が逃がれてこの地に転住し、稲荷大明神を奉祀したのに始まるとされています。

また別の言い伝えでは、ある時、暴風雨の際いちょうの枝が飛んできてこの地に刺さり、いつの間にか亭々とそびえたので、時の人が瑞兆であるとして稲荷神社を祀ったとも言われています。

当社は古来「請地の七竈」といわれて、この地の開拓者七戸の氏神であったと伝えられています。明治二年の「神社明細帳」には、応仁二年（一四六八）の創建とされています。

本殿前には、氏子中によって建てられた寛政九年（一七九七）銘の鳥居があります。本殿左の旧殿前には、天保七年（一八三六）名の燈籠も見られます。

また、社名の由来となった御神木のいちょう〈区指定保護樹木〉は目通り約三・五mもあり、樹齢も五、六〇〇年は下らない大木で、戦火で一部が燃えたものの、近年、樹勢を盛り返えして樹形も整ってきました。

大いちょう

## 28 円通寺（えんつうじ）

押上二丁目三九番六号

飛木山普門院といい、かつて浅草寺（台東区）末の天台宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来です。良秀法印を開山として、応仁元年（一四六七）に創建されたと伝えられています。

なお、庫裡裏の合祀墓域には、高さ六〇cmの石柱に笠をいただいた享保一四年（一七二九）銘「庚申尊　石燈□」があります。

1　「明暦二年」銘**地蔵像**〈区登録文化財〉

雄大で反りの強い舟形光背を持つ一七四cmの地蔵像で、左手に宝珠、右手に錫杖（しゃくじょう）を持ちますが、錫杖の一部に損傷はあるものの、ほぼ原形の姿を保っています。尊像の顔容は童顔に満ちており、造形的に引きしまっており、江戸初期の佳作にふさわしいものです。

種子（字）をいただき、銘を二行に分けて「奉造立地像大菩薩為寒念仏供養也　殊者当村血縁衆善□（根）也」とし、年紀を「于時明暦二年（一六五六）丙申二月吉日」としています。

この地蔵像もやはり、地蔵講の「結縁衆（けちえんしゅう）」によって縁日の二月二四日に寒念仏を修しての奉納でしょう。また、区内で確認されている近世石仏の最古の例として、非常に貴重なものです。

2　「元文五年」銘庚申像

これも合祀墓域にあり、台座はなく顔面の一部に破損が見られます。年紀は「元文五（一七四〇）庚申　極月廿四日」とし、請地村の滝沢弥五郎兵衛等八名によって造立されたものであることがわかります。

なお、「極月」は一二月を意味します。

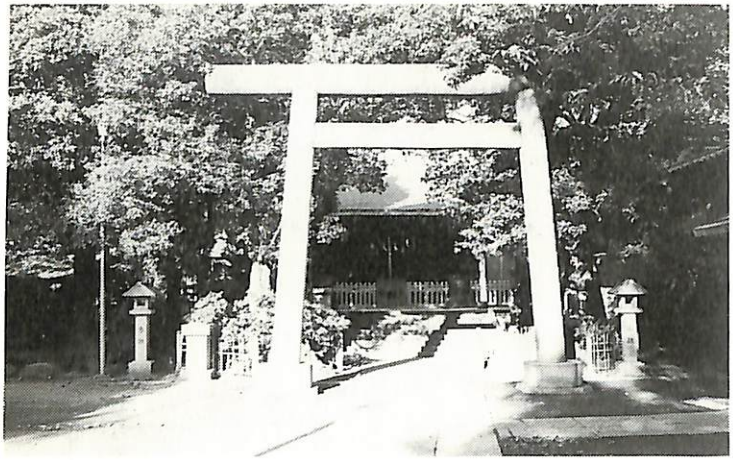
3　北向脚気地蔵尊

当寺が祀る北向脚気地蔵尊は、明治初年に曳舟川の川浚（ざら）いを行ったとき土地の者が掘り出したものと伝えられ、当時脚気で苦しんでいた深川の材木商が、北東の地蔵尊が霊験があるという夢のお告によって、この地蔵尊を信仰したところ全快したので、以来、北向脚気地蔵尊と称されて多くの人々の信仰を集めるようになったといいます。

毎年八月四日に「ほおずき祭り」を行って、ほおずきの護符を授けています。

## 29 香取神社（かとりじんじゃ）

文花二丁目五番八号



香取神社正面

当社のある土地一帯は小村井（おむらい）と呼ばれ、応永五年（一三九八）の「葛西御厨（みくりや）注文」によると、葛西三八郷の一つとして「小村江（おむらえ）一五町」と見え、この土地の開拓の古さがわかります。

香取神社はこの開拓者の氏神として永万元年（一一六五）に創建され、以来、村の鎮守として崇められてきたと言われています。祭神は経津主神（ふつぬしのかみ）で、武神であると同時に産業開発、開拓の神であることから、これら開拓者に祀られたものでしょう。もちろん香取神宮（千葉県）の分社です。

1 「文政一一年」銘**水鉢**「禊盥」〈区登録文化財〉

境内の摂社諏訪神社前にあるこの水鉢は、文政一一年（一八二八）の銘があり、かなり大型のものです。この水鉢は、もと当社本殿にすえられていたものです。

銘を拾うと、

「禊盥（けいかん）　文政十一年戊六月吉祥日　氏子中　星塢秦鐘　書」とあります。

水鉢には一般に「奉納」「奉献」と刻まれますが、とくに「禊盥」としたところに、この石造物の役目を端的に物語っています。造作も丁寧で刻字も闊達で優品と言っていいでしょう。

2　**玉垣**「獅子」

本殿玉垣の石組にはめ込まれて、左右に安置されていますが、本来は玉垣の一部として奉納されたものと思われます。左が阿形（あぎょう）、右が吽形（うんぎょう）ですが、両者とも頭部を左に、尾部を右にした非対称的な図柄になっています。慶応四辰年（一八六八）正月の銘があり、旧小村井村の氏子中が奉納したものと考えられます。

3　「文政一三年」銘**石燈籠**

摂社三峯神社前にあり、「文政十三年（一八三〇）寅八（以下欠）」の銘を持ち、当社の石燈籠では最も古いものですが、風化による剥落が激しく、銘文も十分読みとれないのが惜しまれます。

春日型の石燈籠であって、火袋（ほぶくろ）は雄大であり、竿の部分と等しいことは、ある種の落ち着きを見せます。

なお、近年隣地にあった「小村井梅園」にちなみ、境内に「香梅園」を開いています。

## 30 福神橋橋台地（ふくじんばしきょうだいち）

文化二丁目一番

明治通りと浅草通りの交差する福神橋々畔に銅像と一碑があります。

### 1 「築道碑」

明治中期から、かつての吾嬬町にも都市化の波が打ち寄せ、純農村地帯の道路の拡幅・新設が問題となり、町長大沢梅次郎はじめ地主・町民の協力によって成った道路整備事業を記念して建碑（大正一四年）したものです。「人類相愛の情理と人類群居の態様と物質生産の現状と文化進展の帰趨（きすう）とは」で始まる、高さ二mのこの碑は、初め旧吾嬬町役場（現向島警察署）前の宮田橋々畔にあったものを、のち昭和三七年に移設したものです。

なお、この碑と軌を一つにするものに、原公園（京島三丁目）に「新薬師道之碑」（大正六年建碑）があります。

### 2 大沢梅次郎銅像

氏は明治二二年、この地の旧家小山家に生まれ、大正六年二八歳で町会議員となり、ついで同一三年から昭和二年まで吾嬬町長におされ、同三年東京府会議員となり、以来、市会・都議会議員として同三四年九月に没するまで、地方政治に徹した人物です。昭和三八年一一月建立。

## 31　吾嬬神社（あづまじんじゃ）

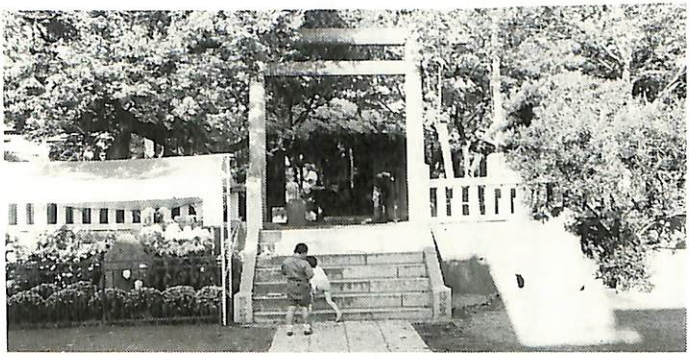
立花一丁目一番一五号

この地は江戸時代のころ「吾嬬の森」、また「浮州（うきす）の森」と呼ばれ、こんもりと茂った微高地で、その中に祀があり、後「吾嬬の社（やしろ）」と呼ばれたとも言われています。この微高地（築山）は古代の古墳ではないかという説もあります。

吾嬬神社の祭神は弟橘媛命（おとたちばなひめのみこと）を主神とし、相殿に日本武尊（やまとたけるのみこと）を祀っています。当社の縁起については諸説がありますが、「縁起」の碑によりますと、昔、日本武尊が東征の折、相模国から上総国へ渡ろうとして海上に出た時、にわかに暴風が起こり乗船も危くなったのを、弟橘媛命が海神の心を鎮めるために海中に身を投じると、海上が穏やかになって船は無事を得、尊は上陸されて「吾嬬恋し」と悲しんだという。

のち、命の御召物がこの地の磯辺に漂い着いたので、これを築山に納めて吾嬬大権現として崇めたのが始まりだと言われています。

降って、正治元年（一一九九）に北条泰時が幕下の葛西領主遠山丹波守に命じて、神領として三〇〇貫を寄進し社殿を造営しています。さらに、嘉元



吾嬬神社本殿

元年（一三〇三）に鎌倉から真言宗の宝蓮寺を移して別当寺としています。これらによっても、当社の創建は相当古いものと考えられます。

なお、奥宮と称される本殿の裏手には**狛犬**〈区登録文化財〉が奉納されています。樹木の下にあって磨滅は少なく、安永二巳年（一七七三）の銘を持ち、築地小田原町（中央区築地六・七丁目）・本船町地引河岸（中央区日本橋本町）の関係者の奉納であることがわかります。かつてはこの森が海上からの好目標であったこともうかがわせます。

### 1 「吾嬬森碑」

明和三年（一七六六）の夏、藤原博古（山県大弐）の撰文になるもので、柱状の三面に「下総国葛飾郡吾嬬森碑」として、日本武尊の東征と弟橘媛命の入水のこと、碓日嶺（碓氷峠）に登って「吾嬬はや」と歎かれたこと、吾嬬の森が命の墓であることなどを述べて、命の貞烈を顕彰しています。

なお、碑文中には敬意を示した五字分もの闕字の手法が見られます。

山県大弐で知られる藤原博古は江戸中期の兵学者・勤皇家で、柳荘と号し、『柳子新論』を著すなどして、幕政を批判して忌諱に触れ、明和事件で捕らわれて処刑されています。

### 2 「縁起」の碑

当社の御神木であり、吾嬬の森の「相生の楠」として有名な楠について、そのいわれ及び霊験を記し、合わせ

て、吾嬬神社の縁起・日本武尊の東征の事跡などを述べています。楠は現在枯れて、その根だけが境内に保存されています。

裏面には、「天下泰平国家安全」と大書し天明三年（一七八三）の年紀を掲げて、田所町（日本橋堀留）の住吉屋庄兵衛の母そゑの発願で建立されたものです。

3　紀真顔「高麗剱」の歌碑

「高麗剱　わざこそ歌の　一風流を　我たましひと　いよよ磨かし

文政十二年（一八二九）六月六日　　俳諧歌場　紀　真顔」とし、裏に「昭和四十年九月破損に付再建之」としています。

紀真顔は狂歌堂と号し、また鹿津部真顔ともいい、狂歌を蜀山人に学び宗匠となった人ですが、俳諧歌とも称え一派を作ったりしていました（隅田川神社の項参照）。

4　「文化一四年」銘水鉢

銘「奉納　文化十四年（一八一七）丑十月吉日　　白木屋清兵衛」としています。

大柄に属するものであり、正福寺・天祥寺、とくに香取神社のものと共通しています。脚部の造り出しと、その曲線は萎縮することなく、刻字も太くのびやかです。また、現に使用に供されている点でも極めて数少ない例と言えます。

### 5　源延平「皇国は」の歌碑

自然石に円を隈どりして「皇国は　かみ代のままの　道しあれば　ことなる文の　をしへ何せむ　源　延平」と刻みますが、年紀はとくに見当たりません。

### 6　「天保九年」銘鳥居

境内の福神稲荷社前に建つ鳥居で、銘を「天保九戊戌歳（一八三八）二月初午　願主　信濃屋筆女」と刻んでいます。女性によって奉納された点、区内でもこの一点かと思われ、大変貴重です。

「初午」は二月の初の午の日で、京都の伏見稲荷神社の神が降りた日とされ、全国的にはこの日、蚕や牛馬の祭日とする風習の中で、この信濃屋のおふでは何を願かけたものでしょうか。

### 7　「磨而不磷」の碑

前の「吾嬬森碑」撰文者、藤原博古すなわち山県大弐の顕彰碑とも言えるもので、高さ四五〇cmの大碑で、一部に欠けるところがあるものの、読み下すのに不便はありません。

昭和七年、徳富猪一郎（蘇峰・一八六三～一九五七）の撰文になるものです。前碑と共に、国粋・国家主義の高揚期を背景にした建碑であることがわかります。なお、篆額の「磨而不磷」は『論語』からの出典で、本当に硬いものは削っても薄くならないという意味で、他の悪い感化を受けないたとえにしています。大弐の忠節を形容したものでしょう。

## 32　慈光院（じこういん）

立花一丁目二九番三号

亀命山と号し、曹洞宗橋場総泉寺（板橋区に移転）末で、永正一一年（一五一四）の創建と伝えられています。聖観世音菩薩を本尊としています。

1　「元禄六年」銘庚申像

本堂の左側に多くの石碑と共に安置されています。

特徴のある三重の笠を持ち、精巧な造りの台座に乗る庚申像は規格正しいものと言えます。尊像の右の銘に「奉待庚申供艱塔」、右面に「元禄六癸酉天（一六九三）」、左側面に「五月中旬　施主　谷口氏」と刻んでいます。

なお、銘文中の「艱」は金石文に時として見られる手法で、「養」の俗字です。また、「年」に代えて「天」を用いるのは室町、とくに江戸期に多くなります。

## 33 東漸寺（とうぜんじ）

立花六丁目一七番四号

もとは浅草寺（台東区）末の天台宗の寺院で、金林山明了院と号し、文安元年（一四四四）に秀尊法印が創建したと伝えています。また、宝永年間（一七〇四～一七一〇）円挙法印によって中興されました。しかし、明治期に無住の時代があり、古い記録は失われてしまいました。

本尊は阿弥陀如来で、葛西三十三観音参りの一に数えられた十一面観世音菩薩像が安置されています。

また、後年、同じく浅草寺末の東昌寺を合併し、いくつかの石造物を移設させてもいます。

1 **「板坂如春先生」の墓碑**

高さ一二〇cm・幅三七cmの四角柱状墓石表面に「板坂如春先生」、裏面に「明暦元乙未年（一六五五）十一月十二日」とする、簡素でありながらボリュームのある墓碑です。

板坂如春、卜斎は天正六年（一五七八）板坂卜斎宗商の子として甲府（山梨県）に生まれ、幼名を長太郎、如春と号し、また東赤ともいいました。父の没後一四歳で徳川二代目将軍秀忠の小姓

塔
申
庚

となり、吉田意安・施薬院宗伯について医術を修めました。長じて卜斎を襲名、駿府（静岡県）に隠居の家康に仕えました。のち紀州（和歌山県）藩祖徳川頼宣の侍医となって数年滞在しましたが、その後また江戸に帰りました。四代将軍家綱が幼弱の時、度々診療に当たり、名医の評が高くなりました。晩年は浅草医王院に閑居し、医書を集め「浅草文庫」と称して縦覧もゆるしました。明暦元年、七八歳で没しました。

2 「板坂卜斎如春叟碑銘」

高さ一〇〇㎝の四角柱（幅三七㎝）の石碑ながら、一種の風格があり、重厚さが感じられます。四面にわたって、如春の経歴と建碑の事情とを明らかにしています。一種の墓誌であり、追悼碑と言えるでしょう。なお、所どころ徳川諸侯に厥字の手法をとっています。

銘の前半は板坂家の来歴（宗頓―宗徳―維順―備後入道―宗慶―宗商（卜斎）―卜斎（如春））を記し、後半を卜斎如春の経歴に充てています。

翁の二五回忌辰に当たり、欽慕の念やみがたい門下の安田春皐が碑銘を林春斎（弘文院学士、羅山の第三子）に依頼しましたが、その死没により果たせず、春斎の子鳳岡（ほうこう）（整宇主人）がその前約を、翌延宝八年（一六八〇）に果たした旨を述べています。

3 「元文元年」銘阿弥陀像と六地蔵

主尊の形をとる阿弥陀像をひときわ大きく造立し、その光背に左右二行に分けて次の銘があります。

「通蓮社覚誉了休　大徳」「心蓮社法誉妙林　法尼　　元文元辰天（一七三六）十月十日」

阿弥陀像の左右に三体ずつの地蔵像が配置されていますが、これは初めからの配置ではなく、移設後に整理されて現在の形になったと思われます。

4　「宝暦一三年」銘**庚申塔**〈区登録文化財〉

門を入ってすぐ右手に安置されています。もとは中川の土手道にあったものを境内に移したものと思われます。正面に青面金剛像を浮彫りにし、右側面に「右市川道　宝暦十三（一七六三）癸未十一月吉日」、左側面に「左やくし道」と道標を兼ねた庚申塔は、区内でこの一基のみで貴重なものです。茂ェ門、七左衛門等二一名を刻んでいます。

5　「安永九年」銘**地蔵座像**

基壇上の台座に座する柔和な表情の地蔵尊像です。

正面中央に「法華読誦塔」として、その左右に振り分けて「安永九子年（一七八〇）　回向諸精霊　法華菩提果　五月二十五日」、右側面に「当寺光住清霊成等正覚医王山法流第一世法院祐誓　諸壇那精霊皆共成仏道」、左側面に「見聞覚智道俗□□　諸精霊等皆成仏道」と刻まれています。

「医王山」とありますから、これもまた医王院、東昌寺、東漸寺の道をたどったものでしょう。

## 34 白髭神社（しらひげじんじゃ）

立花六丁目一九番一七号

旧葛西村の鎮守として、天和二年（一六八二）に創建したと言われていますが、文安元年（一四四四）創建という伝えもあってはっきりしません。

祭神は猿田彦命で、俗に葛西川の白髭神社と呼ばれていました。

1 「安永九年」銘鳥居〈区登録文化財〉

参道の明神型鳥居で、左に「安永九年（一七八〇）庚子年六月吉日」、右に「当村氏子中」の銘があります。三囲神社の二基に次ぐ古さのものです。現在は保存のため、本殿西側に移築されています。

2 「元禄四年」銘庚申塔

不動明王の種字をいただいた庚申塔で、区内では数少ない例です。

銘を左右に分けて「庚申供養二世安楽□　元禄四（一六九一）辛未二月二日講中」と刻んでいます。なお、台座は別物で、「□延（一七五一）四辛未念仏講中　廿五人　正月吉日」とあり、干支だけが一致しているものです。

白髭神社　鳥居（移築前）

## 35　白髭神社（しらひげじんじゃ）

東墨田三丁目一三番二四号

嘉暦（かりゃく）二年（一三三七）以前の創建と伝えられていますが、その由来、年代は共に不明です。社地は荒川の開削によって移されたもので、もとは木下川薬師の守護神であったという伝えもあります。祭神は猿田彦命です。

境内には「百度石」の標石があります。

### 1　高橋信盛「さまざまの」の歌碑

登山講の先達（富士東口開山）として活躍した高橋信盛（行年八三歳）の没したのを悼んで、明治四〇年に建碑されたものです。辞世の歌とみていいでしょう。

「さま〳〵の苦労は仮の夢のうち　覚（さむ）れば楽な身とはなりけり」

## 36 万福寺（まんぷくじ）

東墨田三丁目一二番一九号

庚申塔群

光明山蓮池院と号し、真言宗豊山派に属しています。大永七年（一五二七）東福坊が創建したと伝えられています。本尊は阿弥陀如来です。

荒川開削前は、現在地よりやや東にありました。

参道の小堂には石造の子安・子育観音が祀られています。その**標石**（文化一五年〈一八一八〉銘）と、近くにある**水鉢**（文化一五年銘）の「花講中」は興味をひきます。

1 「寛文二年」銘**地蔵像**（二体）

同じような寸法・彫法の地蔵像が二基並んでおり、右の方は年号が欠けていますが、干支から同年と推定できますし、共に江戸初期のものとして貴重なものです。

① 「寛文二年」銘**地蔵像**

種字を弥陀とし、像の光背の左右に

「奉供艱弥陀宝号二世安楽処　寛文二天（一六六二）壬寅八月廿日」として、

藤衛門はじめ九名の造立者を刻んでいます。

② 「□□二年」銘**地蔵像**

種字はとくに見当たりません。光背は左右二行に分けて、「奉供艱弥陀宝号二世安楽処　□□（寛文）二天□（壬）寅八月廿八日」とし、三九郎・宗兵衛ら八名の造立者を刻んでいます。

これら二体の地蔵像は、造立・奉納した日も八日の差でしかないところを見ると、あるいは村毎に建てたものかと思われます。

2 「寛文一二年」銘**観音座像**

光背頭部に観音の種字を有する観音座像です。光背の左右二行に分けて

「念仏講供養　同行三十一人　于時寛文十二（一六七二）壬子初冬十五日　木下川村」としているのみですが、地名の「木下川村」がある点で貴重です。

観音講々中によって造立されたものです。「初冬」は一〇月を指しています。

3 「天和二年」銘**庚申像**

青面金剛六臂の像左右に

「奉供養庚待男□結集□菩提也　于時天和二壬戌天（一六八二）九月十六日　法主盛宝　敬白」

とし、日月・一鬼・二鶏・三猿を備え、邪鬼を踏まえています。僧籍にある盛宝によって造立されたものです。

江戸初期に属する、しかもこの形式では区内初出のものとして貴重です。なお、銘中「庚申」の「申」が脱落しているのもほほえましい限りです。

4　「元禄三年」銘**阿弥陀像**

種字を弥陀とした立像で、柔和な顔と安定した立体感を与えています。

素朴な光背の左右に銘を分けて

「当寺本尊阿弥陀如来　行基菩薩御作　　浄意近住　　元禄三（一六九〇）庚午九月十九日」としています。

## 37 三輪里稲荷社

八広三丁目六番一三号

慶長一九年（一六一四）に出羽国（山形県）湯殿山の修験者大日坊が、羽黒大神の分霊を大畑村（現在地）の鎮守として勧請し、三輪里稲荷大明神と称したのが始まりと伝えられています。

初午の日に、湯殿山秘法のこんにゃくの護符を授けることから、俗に「こんにゃく稲荷」と呼ばれて、人々の篤い信仰に支えられてきました。当日のこんにゃくを煎んじて服用すれば、喉や声の病に霊験あらたかと言われています。

三輪里稲荷社本殿

## 38 八広の道標

八広四丁目一二番三号

木下川薬師への道標で、高さ一m余のものです。八広中央通りの植込の中にあるものですから、全体像は容易にわかりません。

（右面）「左ゑとみち」

（正面）「右や久しみち」

（左面）「大畠村講中」

言い伝えでは、享保年間（一七一六～一七三五）に将軍吉宗の薬師参詣に当って、大畑村の人々に建てさせたものとされています。また、この道標もまた、しかるべき位置にあったものが移されて、現在地（八広四－12－3）に起立するものです。

木下川薬師は、荒川開削のため、現在は葛飾区四つ木一丁目五番地に移転しています。正式には、青竜山薬王院浄光寺という天台宗の寺院です。寺伝によれば、嘉祥二年（八四九）僧広智の草庵に始まり、貞観二年（八六〇）その弟子慶寛によって一寺となし、浄光寺と名づけたとされています。

道　　標

# 39 八広庚申堂（やひろこうしんどう）

八広五丁目三二番一〇号

八広五丁目の京成電鉄線路の近くにある小堂です。『新編武蔵風土記稿』の大畠村の項に「庚申堂　村持」と見え、元禄期（一六八八～一七〇四）に大畑新田村が生まれたころから、講中によって大切にされてきたものと思われます。

現在でも、近くの宇田川家は庚申講の講元とのことであり、戦前は、毎月の五の日・一一の日の縁日が賑（にぎ）やかであったといいます。

庚申塔

1　**庚申像**等（三体）

「庚申堂　村持」の表現から、元禄二年（一六八九）銘の庚申像のためのお堂であって、後に地蔵・菩薩像を合祀したものであろうと思われます。

①「元禄二年」銘**庚申像**

中央の石像で、あたかも主尊の形をとっています。

銘を六臂の尊像の左右二行に分けて

「奉造立青面金剛庚申供養現当安楽所

元禄二己巳年正月吉日　大畠村」とし、一石でできた台座は幅広くして宇田川彦兵衛等一一名を刻んでいます。

② 「享保五年」銘**地蔵像**

三体中の右にある像で、やや損傷が見られますが、彫法は至って精巧です。

銘を光背左右に分けて「地蔵尊講中　上大畑村　享保五子天（一七二〇）九月吉日」としていますから、上大畑村の地蔵講中の造立であることがわかります。

③ **観音菩薩像**

左の石像で、保存は良好なのですが、光背は失われたとみえて、銘文・年紀を知る手がかりは得られません。

左手に持つ蓮華に蓮葉まで表現している点は、珍らしいと言えます。

## 40　如意輪寺（にょいりんじ）

吾妻橋一丁目二二番一四号

如意輪寺は山号を宝珠山といい、嘉祥二年（八四九）に慈覚大師の創建と伝えられる天台宗の古刹です。中之郷竹町の成就寺（江戸川区に移転）末で、境内に聖徳太子像（寺伝によれば大師の作とも太子自作ともいう）を安置した御堂があったことから、「牛島太子堂」とか「中之郷太子堂」の名で広く知られていましたが、現在はありません。

水戸徳川家臣、雪斎の書になる「牛島聖徳太子」の石製扁額は、太子堂に掲げられていたもので、関東大震災後現在のように地上に置かれるようになりました。

六面地蔵塔

### 1　六面地蔵塔〈区登録文化財〉

延宝六年（一六七八）四月一三日、信心深かった両親「慈父」某と「慈母函意禅定尼」の菩提を弔い、合わせて「法界平等利益（りやく）」を願って、その子が造立、奉納した六地蔵塔です。

六地蔵は六道能化（りくどうのうげ）の本願を表すといわれ、多くは仏寺の門前に建立されます。この六面地蔵は経典にとらわれ

ず、自在に彫られています。

今は失われている宝珠、蓮弁状に削ぎおとされた笠、各尊像を半肉彫りにした塔身、線刻にした蓮華座、荒たたきにして蓮池に見たてた基壇の五石から成ったものでしょう（塔身六五cm、総高一三〇cm）。

震災による損傷がありますが、江戸初期の、柔和で造形的にも優れた石仏として区内随一といえましょう。

銘を拾ってつなぐと、次のようになります。

「為奉造立地蔵二親芔也

為慈父□□□□　□悲母圖意禅定尼芔也

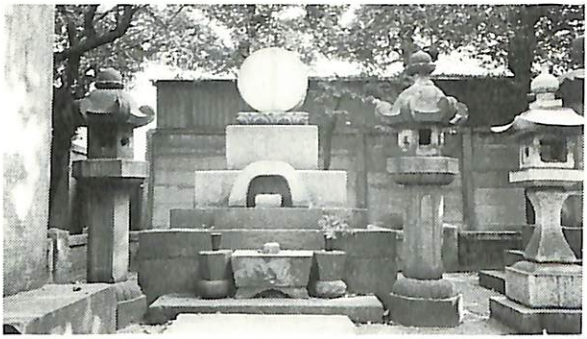
〔　　〕　在於地蔵後□□人　〔　　〕法界平等利益　〔　　〕

延宝六戊午天　四月十三日　」

なお、「芔」は金石文によく用いられ、「菩提（ぼだい）（ぼてい）」と読みます。

# 41 天祥寺（てんしょうじ）

吾妻橋二丁目六番五号



松浦家墓所

寛永元年（一六二四）の創建で、初め嶺松院（れいしょういん）と称して臨済宗浅草海禅寺が兼帯する寺院でしたが、元禄六年（一六九三）本所中之郷の下屋敷に隠居していた肥前（佐賀県）平戸藩主松浦鎮信（まつらしげのぶ）が譲り受け、深く帰依した盤珪（ばんけい）国師を中興開山とし、臨済宗京都妙心寺派に属しました。

さらに享保元年（一七一六）、近隣に松嶺（しょうれい）寺があってまぎらわしいという理由から、天祥寺と改めました。この寺号は、鎮信の法名「天祥院殿慶厳徳祐大居士」に由来します。また山号の向東山は、鎮信の茶室「向東庵」の庵号を継いだものといいます。

## 1　盤珪国師の墓

高さ一九〇cmの五重塔型式（頭部欠）です。盤珪国師（一六二二～一六九三）は、盤珪永琢大法正眼国師と称された禅宗の名僧で、播磨国（兵庫県）浜田郷に生まれ、諸国を遊歴し、郷里に竜門寺を建立、のち京都妙心寺に住します。

## 2　松浦鎮信の墓〈区登録史跡〉

当寺開基の鎮信は、元和八年（一六二二）三月出生、元禄一六年（一七〇三）一〇月没で、その墓は区内には数少ない大名墓です。墓前の**石燈籠**は元禄一六年銘〈区登録文化財〉で一対のようにみえますが、銘は左方は「壱基」とし、右方は「両基」としていますから、本来別個のものを寄せたものでしょう。

肥前平戸藩六万二、〇〇〇石、松浦肥前守の下屋敷跡は明治八年開校の明徳小学校の校地となりました（現墨田区立本所中学校）。

## 3　「祭贈従三位静山公詩碑」

松浦静山は、宝暦一〇年（一七六〇）、肥前平戸の城主松浦政の子として生まれ幼名栄三郎、長じて清といいます。安永三年（一七七四）従五位下壱岐守に叙任。翌年祖父誠信の譲りを受けて家を継ぎ、文化三年（一八〇六）一一月、総髪して静山と号し、別に雪洲の号もありました。幼少より読書を好み、和漢の学に精通、また、心形刀流の奥旨を取得し、文武両道に優れ、『甲子夜話』の著者として高名です。天保一二年（一八四一）六月、八二歳にて没し、ここ天祥寺に葬られました。

「嵯峨源流三十四　宝暦吾公蓬萊に降る」に始まるこの詩碑は、静山公の事蹟、右文左武（文武両道）に優れ、人徳を讃え、「噫　公は国の大器也　千載の英姿颯爽たる哉」に終る、高さ一七六㎝、幅八三㎝のものです。

昭和四年五月二八日、子孫の従二位伯爵松浦厚が賦し書き、祭贈して建立した碑です。また、厚は昭和九年五月七日、七一歳にて没しました。

### 4　生月鯨太左衛門の墓

生月鯨太左衛門は、松浦侯のお抱え力士で、相撲史上まれにみる長身力士として知られています。

墓の台石には体重二八〇余斤（一六七kg）、身長七尺五寸（二二七cm）、肥前平戸生月島の人で、嘉永四年（一八五一）五月二三日、二四歳で没したと刻しています。

### 5　養老泉の碑

養老泉というのは、境内にあった掘抜井戸の名で、妙縁寺の夜窪井と共に本所では清水の湧き出る数少ない井戸でした。井戸は現在は使用できる状態にはなく、完成時のいきさつを記した碑文も読みとれません。

### 6　水鉢（二基）

二基とも「水鉢」と銘している点で、区内には他に見当たりません。一基は、正面に「奉寄進　水鉢」裏面には寄進者の氏名と「延宝六戊午年（一六七八）十二月十五日」の紀年銘が刻まれています。年代的には嶺松院当時のものと考えられます。

他の一基は、正面に「奉献　御水鉢　元禄十六年癸未（一七〇三）十月六日」、右と左の側面に寄進者一二名の氏名が刻まれています。紀年銘から推して、平戸藩士が主君の墓前に献納したものと考えられますが、現在は墓域外に整理されています。他にも損傷が甚しい元文二丁巳歳（一七三七）仲冬銘で、松浦家の家紋である菊の二つ重ね紋の刻まれた水鉢もあります。

## 42 清雄寺（せいおうじ）

吾妻橋二丁目一四番六号

覚英山清雄寺は本門仏立宗京都妙蓮寺末で、寛文二年（一六六二）、老中酒井忠勝が下屋敷内に建立し、自身が開基となって日崇上人に寄進した寺です。

墓地には酒井氏の他、六世竹本土佐大夫（義太夫）、名力士二所ノ関、横綱玉錦、大関九州山、玉の海、海光山などの墓があります。

## 43 本久寺（ほんきゅうじ）

東駒形二丁目二一番一二号

照法山本久寺は日蓮宗に属する名刹で、天正三年（一五七五）の創立で開山は清眼院日有上人です。当寺に安置する宗祖像は日朗が御首を、日法が御体を彫り、胎中に首題札が納められており、日朗・日法の真蹟と伝えられています。

天正（一五七三～一五九二）の創建以来四二〇年、寺地を替えていません。

他に、落語家の初世及び二世古今亭志ん生、春風亭柳橋の墓もあります。

### 1　平岡熙（ひろし）の墓

本久寺の墓地に平岡熙の墓があります。明治四年森有礼に随行してアメリカに渡り、六年帰国に際し一本のバットと三個のボールを持ち帰って、日本に初めて野球を紹介した恩人です。東京ドームの野球殿堂入りしています。

また、平岡熙は日本で初めて錦糸町に汽車製造会社を創り、吟舟と号し長唄や清元などの邦楽に通じた粋人でした。昭和九年五月六日、七七歳で没しました。なお、木琴奏者として有名な平岡養一は甥で、墓も並んでいます。

## 44 妙縁寺（みょうえんじ）

吾妻橋二丁目二番一〇号

正栄山妙縁寺は日蓮正宗に属し、富士大石寺（静岡県）の末です。京都要法寺の開山日尊上人によって創建されたと伝えられますが年代は不明で、寛永六年（一六二九）に日舜上人が中興しました。浅草阿部川町（台東区）から本所の地に移転しましたが、その年代も明らかでありません。

### 1 「夜雀井（やかくい）銘」の碑

妙縁寺の境内に夜雀井と称する名泉ありと、「寺社書上」『葛西志』などに記されていますが、現在は碑石だけが残されているのみです。

夜雀井碑

銘文に続いて、「宝暦二年（一七五二）六月　蘭台通熙撰、宝暦十二年（一七六二）壬午十二月五日　郎川滕包貫建並書」とあります。

天祥寺の養老泉に名泉といわれました。

## 2　歌沢寅右衛門の墓

嘉永（一八四八～一八五三）のころ、端唄の同好者が集まって研究を重ね、端唄から一定の曲節に音調を創案して歌沢節と称し、本所南割下水に住んでいた笹丸（笹本彦太郎）が家元になりました。江戸日本橋生まれの平田虎右衛門は、美声で評判となり、歌沢寅右衛門を名のり笹丸から家元を譲り受け、安政四年（一八五七）七月に嵯峨御所から歌沢能登の名を受けました。文久二年（一八六三）歌沢は、寅右衛門の寅派と哥沢芝金の芝派に別れ、寅派では笹丸を初世とし、寅右衛門は二世を名乗ります。

なお、寅右衛門は明治八年に病没し、ここ妙縁寺に葬られました。

## 45 福厳寺（ふくごんじ）

東駒形三丁目二一番三号

曹洞宗で駒込吉祥寺（文京区）末で山号を牛島山といいます。天文一〇年（一五四一）吉祥寺の二世大洲安充の創建としていますが、「寺社書上」では延徳三年（一四九一）の起立としています。いずれにしても江戸開府以前からある古刹で、草創から四〇〇年間寺地を替えていません。

本尊釈迦如来木像、十一面観世音、無尽地蔵菩薩、大般若経六〇〇巻などが有名でした。

当寺は、朱塗りの寺門があるので江戸時代から「赤門寺（あかもんでら）」と通称されていました。この赤門は三代将軍家光が、父秀忠の追福のため寄進したものでしたが、関東大震災で焼失した後は、紀尾井町（千代田区）にあった旧紀州家中屋敷の門をもらい受け、これを朱塗りにして寺門としていました。これも戦災で焼失し、現在はコンクリート製で復興されています。

十一面観世音は、文化一四年（一八一七）七月森本尹之助・俊蔵の兄弟が鉄砲州の浜へ釣りに行き、その時流れついた像を引き上げて持ち帰り、後に当寺に安置したと伝えられる木像です。

福厳寺山門

無尽地蔵菩薩は身の丈一二㎝の小石像で、文政元年（一八一八）六月に浅草蔵前の隅田川で（今の蔵前橋あたりか）貝をとっていた者が発見し、水中から引き上げ持ち帰って自宅に安置しておいたところ、無尽のくじに幾度となく当ったので、無尽地蔵と称して信仰し、後に当寺に安置したものと言われています。

## 1　大石三平の墓

大石三平（良穀）は四国高松藩（香川県）松平家の江戸家老でした。本所横網に住み、付近の地理に詳しく、そして当寺の住職を禅の師として親交がありました。三平は大石良雄の縁者であったことから、赤穂義士の江戸入りには種々の便宜を与え、当寺で参禅聴法の集会と称して義士の密談を行わせたり、討入りの手引きなどもしたと伝えられています。墓には、

「玄忠院寺山一路居士　大石三平藤原良穀　寛延二己巳歳（一七四九）十一月七日」

と刻しています。七五歳で没しています。

## 46 桃青寺（とうせいじ）

東駒形三丁目一五番一〇号

臨済宗妙心寺（京都市）末で、寛永三年（一六二六）の創建です。開山は法光明幢（めいとう）禅師、二世は黙宗和尚とされていますが、事実は黙宗和尚の創建で、後に師の明幢禅師を招いて開山としたものと言われています。

江戸時代には寺内の芭蕉堂によって著名な寺院でした。はじめ定林院と号していたのを延享二年（一七四五）に芭蕉山桃青寺と変えたのも松尾芭蕉の俳号桃青の二字によったもので、芭蕉は当寺に寄宿すること数年に及んだといい、その時期については定かではありませんが、芭蕉が出府したころであろうと考えられます。なお、宝暦二年（一七五二）六月、さらに白牛山東盛寺と改めましたが、明治二五年六月に再び芭蕉山桃青寺にかえり、現在に及んでいます。

### 1　長谷川馬光の墓

貞享四年（一六八七）に生まれた江戸中期の俳人。父は津軽越中守の藩医須田宗人盛直で、幼名を孫太郎のちに半左衛門と改め、藤原直行と称しました。長谷川直隆に養われ、元禄七年（一六九四）、八歳で直隆の後を継ぎ、享保一一年（一七二六）には西丸の御刀番に列しました。

俳諧を其日庵山口素堂に学び、師の其日庵を継ぎ二世となりましたが、点者となって門戸を張ることをせず、交友は各派にわたっていました。

享保一〇年（一七二五）に中川宗端、松本珪林、大場寥和、佐久間柳居と相謀って「五色墨運動」を起こし、俳壇の革新に尽したことは有名です。寛保三年（一七四三）芭蕉五〇回忌に当り、当寺に芭蕉堂を作りました。著書には『湯山紀行』『藪鶯』『かさね笠』等があります。

寛延四年（一七五一）「振りかえる谷の戸もなし郭公」の一句を残して六五歳で世を去りました。

享保期（一七一六～一七三六）の江戸俳壇は、其角の末流と沾徳一派の人々が最も勢力をふるい、宗匠はしきりに点料をむさぼり、作者はただ点者である宗匠の好みに投じようとして俳風は乱れ、宗匠による門閥の弊害も強くなりました。この状態を憂えて、相携えて弊風革新のため起ったのが五色墨運動だと言われています。

## 47 源光寺（げんこうじ）

本所二丁目一三番一四号

中郷山源光寺は浄土真宗大谷派に属し、東本願寺（京都）末の名刹です。慶長三年（一五九八）本所中之郷原庭町、里俗に言う蛇山の地に創建されましたが、延享四年（一七七四）にいたり本所荒井町に移転しました。

開山は源頼光八代の子孫浅野四郎光俊で、権大僧正光円法印と称した人です。本尊釈迦如来像が安置されています。なお、今は埋められた北割下水は、源光寺の辺りから東進して横十間川に到っていました。

### 1　川尻清潭（せいたん）の墓

清潭（武野家）の墓は源光寺の墓域にあります。昭和三〇年の清潭一周忌に築地（中央区）歌舞伎座によって建立された記念碑は、高さ三五㎝ほどの小さなものですが、それには清潭の句「秋風やまはり舞台の裏おもて」が刻まれ、また、その右側面には、久保田万太郎がこの機会に詠んだ句が独得の細かい字で「ひっきょうは老ひの気弱の小春かな」が刻まれています。

さらにこの記念碑には清潭について「明治九年下谷二長町（台東区）に生まれ、武野家より川尻宝岑（ほうしん）氏（明治の劇通・劇作家）の養子となる。若くして劇界に入り、後に松竹株式会社の嘱託となり、多年歌舞伎の演出に従事し、昭和二十九年十二月十四日に老寿七十九歳にて歿す（下略）」と彫られています。なお、清潭は江東（えひがし）小学校（現両国小学校）に学んでいます。

## 48 横網町公園（東京都慰霊堂）

よこあみちょうこうえん

横網二丁目三番

東京都慰霊堂

この地は旧陸軍被服本廠跡で、全体で約二万四〇〇坪（六万七、四〇〇㎡）ありました。大正一一年三月にこの地を逓信省用地、東京市電気局用地、東京市の社会事業用地、同公園用地等に分割して譲渡されました。大正一二年七月、まず横網町公園の造成に着手しましたが、九月一日関東大震災が突発、広大な空地であったここの安全性を信じて多くの人々が避難して来ました。ところが人々は多くの荷物を運びこんだために、これに火が付いて、ついに四万四、〇〇〇人という焼死者を出す大惨事となりました。これらの犠牲者と、市内各地で犠牲となった人々の遺骨とを合わせて五万五、〇〇〇人の霊をこの地に安置することにして、一〇月に仮納骨堂を建設しました。

東京都慰霊堂は伊東忠太・佐野利器・塚本靖・佐藤功一の四工学博士によって設計され、昭和二年二月着工、同五年九月二日に完成しました。慰霊堂内の供養塔に遺骨を安置する変則の五層塔で、高さ四一mあり、堂の総建坪は一、四一三㎡あります。はじめ「震災記念堂」と称していましたが、太平洋戦争による都内戦災犠牲者約一〇万五、四〇〇人（一般都民のみ）の遺骨を

合わせ安置しましたので、昭和二六年九月一日「東京都慰霊堂」と改称しました。三月一〇日、九月一日の両記念日には法要が盛大に行われ、多くの人々がそれぞれの思いをこめて参詣します。

隣の復興記念館は関東大震災の状況を永く後世に伝えるため、当時の被災品や遺品、写真などを保存陳列すべく、昭和六年に建設されたものです。猛火により熔けて形を変えた機器や硬貨、ビールびん、尋ね人の旗などが陳列され、当時の惨状忘れがたいことを教えています。もちろん、今次大戦の写真や被災の資料も追加陳列されています。

### 1　幽冥鐘

堂の東南にあるこの梵鐘は関東大震災による遭難者の霊を追悼するため、当時の中華民国仏教徒会から大正一四年一〇月、日本仏教連合会をへて東京市に寄贈されたものです。

鐘楼の設計は工学博士伊東忠太、着工昭和五年六月二日、完成同年八月三一日、一〇月一日に始撞式を盛大に挙行しました。梵鐘は高さ一六〇㎝、口径一二〇㎝、重さ一・五tです。

### 2　「大正大震災遭難児童弔魂群像」

大震災では約五、〇〇〇人の児童が遭難死しました。昭和五年東京市校長会が、難を免れた児童たちの手によって弔魂碑を建立することを発起すると、たちまち一八万二、〇〇〇人余の賛同を得、一万四、〇〇〇円余が醵金されました。公園課技師上野真友氏の図案を基礎として彫刻家小倉右一郎氏によって、当日、児童たちが難にあ

い、相寄り、相助けている群像を翌六年五月に竣工させました。

この群像は昭和一八年に戦時資材として供出され、戦後、前作者の高弟津上昌平、山畑阿利一両氏に都が依嘱し、昭和三六年に復興したものです。

### 3 「追悼関東大震災朝鮮人犠牲者」の碑

正面に「追悼関東大震災朝鮮人犠牲者」、前面の石に「この歴史永遠に忘れず　在日朝鮮人と固く手を握り、日朝親善アジア平和を打ちたてん　藤森成吉」と刻まれ、左横の別の碑には由来を詳しく刻した碑があり、その最後に「一九七三年九月　関東大震災朝鮮人犠牲者追悼行事実行委員会」とあります。誤った策動と流言蜚語のために、六、〇〇〇余名の朝鮮人の尊い人命が失われたことは、何とも痛ましいことです。

### 4 永田秀次郎「焼けて直ぐ」の句碑

「焼けて直ぐ芽ぐむちからや　棕梠の露　青嵐」

堂の北側植込地に、震災当時東京市長として被災者の救護や、復興事業に日夜精魂を傾けた青嵐、永田秀次郎氏を追悼する碑です。この句は焼土の中から復興に奮い立つ市民に感激し、復興と題して詠まれたものです。

永田秀次郎（俳名青嵐）、明治九年兵庫県淡路島に生まれ、昭和五年、再び東京市長。昭和一八年没。

## 49 葛飾北斎生誕の地（かつしかほくさいせいたんのち）

亀沢一～四丁目

江戸後期の浮世絵師の巨匠、また日本風景版画の創始者とされる北斎は宝暦一〇年（一七六〇）九月二三日、本所割下水（亀沢一～四丁目）に生まれました。本姓を川村といい、大成して後、この地が下総国葛飾領であったことから葛飾北斎と名のりました。彼は終生、本所榛馬場・達磨横丁などの界隈を九三回も転居を繰り返したと同様、三〇余りの多くの画号を名のりました。

幼時、叔父の幕府御用鏡師中島伊勢の養子となり、幼名を時太郎、のち鉄蔵と改めました。一九歳の時、勝川春章の門に入り、春朗の号で役者絵と黄表紙を描き、のち勝川派と決別して諸派の筆法を学び、西洋画にも興味を示しました。この間、俵屋宗理、百琳宗理・北斎・可候などの号を用いました。

その後、彼の画業の集大成ともいうべき「北斎漫画」を文化一一年（一八一四）に発表、続いての「富嶽三十六景」は、彼の名を不朽のものとしました。そして、高齢になるにしたがい肉筆画を多く描き、八〇歳を越して後もますます画境深まり、芸道の鬼と化した如く「画狂人」と自称・署名し、嘉永二年（一八四九）四月一八日、九〇歳の天寿を全うしてなお、生への激しい執着を持ちつつ、浅草においてこの世を去りました。台東区浅草浄土宗誓教寺に葬られました。法名、南牕院奇誉北斎居士。

## 50 旧安田庭園（きゅうやすだていえん）〈都指定名勝〉

横網一丁目一二番一〇号

両国公会堂と庭園

本園は、もと常陸国（茨城県）笠間藩主本庄因幡守宗資により元禄年間（一六八八～一七〇三）に築造されたと伝えられ、隅田川の水を導いた汐入回遊式庭園で、規模は大きくありませんが、江戸名園の一つでした。明治維新後は、旧備前岡山藩主池田侯の邸となり、次いで安田善次郎氏の所有となりました。氏の没後、大正一一年東京市に寄附されましたが、翌年の大震災によりほとんど旧態を失うほどの被害を受けました。その後、東京市が復旧に努力、昭和二年七月、市民の庭園として開園されました。

戦後の四二年四月、東京都から墨田区に移管されましたが、隅田川の汚濁により池の水は濁り、公害等のため樹木は立ち枯れてしまうなど、名園の面影は失われました。そこで区では汐入の池の再現、樹木の植栽、施設の手入れなど、全面的改修をして同四六年五月、名園といわれた往時の姿を復元しました。なお、汐入りの池復活のために地下貯水槽を設けて、そこから浄化した水を送るなどの工夫をしています。

なお、園内には、三代将軍家光治下の寛永八年（一六三一）秋の台風によ

る隅田川出水の折、阿部豊後守が本所下町の状況探査のため渡河した後、騎馬をつなぎ止めたとする**駒止石**（**駒止銀杏**・**駒止井戸**）があります。平成八年、〈都指定名勝〉に指定されました。

1　「元禄四年」銘**水鉢**

園内の駒止稲荷社は、当時横網町に住む郷士加藤善右衛門が阿部豊後守の徳に感じて、京都伏見稲荷大社の霊を勧請して祀ったのに始まったと言います。起立は元禄四年（一六九一）五月二六日です。

正面の銘に「奉納　元禄四辛未年九月吉日　加藤善□」、右側面に「寛政十二庚申年（一八〇〇）二月　高木□□」の追刻銘があります。

2　**晋堂雲南「水も亦」の句碑**

碑の正面に「水も亦器によらず草の露」と「わが影にさへ別れけり秋の暮」の二句が並べて刻まれており、その左に「晋堂雲南」、さらに小さく「廣瀬群鶴刻」とあり、江戸末期の建碑と思われます。

3　**松尾芭蕉「みの虫の」の句碑**

「みの虫の音を　きゝにこよ草の庵　　芭蕉」

この句は芭蕉が貞享四年（一六七八）、深川芭蕉庵で詠んだもので、実際は鳴かない簑虫の閑寂にして哀れなる生涯をいとおしんだものです。この碑は本来、走湯山円秀坊の某が享和三年（一八〇三）に建立したものです。

## 51 舟橋聖一生誕の地

横網一丁目二番

舟橋聖一は明治三七年一二月二五日、本所区横網二丁目二番地に生まれました。クリスマスでしたので聖一と名付けられました。父了助は東京帝国大学工科助教授、母さわ子は古河合名会社理事近藤陸三郎の長女です。生後間もなく百日咳にかかり、以後喘息性疾患が持病になりました。家の前には友網部屋がありました。

同四四年に転地療養先の神奈川県腰越小学校に入学、翌年、一家は本郷区（文京区）弥生町三番地に移り、誠之小学校に転校、翌々年には東京府豊多摩郡落合村大字下落合四三五（新宿区下落合三丁目）に転居、ここに落着きます。

大正一一年旧制水戸高校入学、同一四年に東京帝国大学文科に入学、同一五年七月佐藤百寿と結婚、昭和三年、二四歳で帝大卒業、明治大学予科講師となります。同五年、小説「海のほくろ」を「文学時代」に発表、川端康成に認められます。

聖一は旺盛な文学、懇曲等の創作活動と共に、実に多方面にわたって活躍しました。

まず、同一〇年にペンクラブ会員になったのを皮切りに、日本文芸家協会設立委員となり、同一三年同会初代

舟橋聖一

理事長となりました。さらに芥川賞復活選考委員から横綱審議会委員（後に委員長）、国語審議会委員、野間賞復活選考委員、国語問題協議会理事、近代文学館常務理事、谷崎賞選考委員と続き、また、競馬運営審議会委員、社会開発懇談会委員、長唄青楓会長となりました。

同三九年には彦根市名誉市民に推され、「花の生涯」記念碑が井伊直弼ゆかりの彦根城内に建てられました。翌年には日本芸術会員となりました。多方面に活動し、貢献したことの一端を物語っているといえましょう。

同五一年一月一三日逝去しました。

# 52 斎藤緑雨終焉の地

両国二丁目一三番

緑雨は慶応三年（一八六七）一二月三一日、伊勢国（三重県）神戸に斎藤利光、のぶの長男として出生。本名は賢。父は津の人で謙堂といい、和歌俳諧をたしなむ医師、母は江戸京橋の人でした。一一歳の時、両親と上京、数年後父が藤堂家（伊勢久居藩）の侍医となったため、本所緑町三丁目の藤堂邸に住みました。緑雨の号も本所を心から愛する彼の気持ちの表れです。

土浦藩主土屋侯設立の土屋小学校に入学、以来転校をくりかえし、最後は明治法律学校を中途で終っています。

斎藤緑雨

一八歳、父と親交のあった其角堂永機について俳諧を学び、その紹介で仮名垣魯文を訪ね、彼が主筆となった「今日新聞」の校正係を務めました。

二〇歳、「善悪押絵羽子板」などを江東みどりの筆名で今日新聞に発表。それ以後、緑雨醒客、正直正大夫の筆名で次々と小説や評論を発表します。

二八歳の八月に父を、九月に母を失い、本所を去って本郷駒込に移り下宿生活を始めました。翌年「時論日報」の発刊にあたり主幹となりました。

三〇歳の一〇月に樋口一葉の病状が悪化すると、鴎外に依頼して青山胤道（明治天皇の診療もしている名医）の診察を乞いました。一葉の死去にあたっては、葬儀費用の支払その他の始末に尽力し、遺稿の出版を計画しました。

三二歳、万朝報入社。幸徳秋水と親交。このころから体調をくずし、二年後の暮、神奈川県鵠沼に転地します。

三六歳の一〇月、終焉の地となる横網町一丁目一五番地（両国二―一三）に転居して来ます。

三八歳、明治三七年四月一日永眠しました。

翌日の万朝報にのった死去広告「僕　本日を以て目出度死去仕候間　此段広告仕候也　斎藤緑雨賢」は、緑雨がかねて親交のあった馬場孤蝶に口述筆記させたものです。戒名は「春暁院緑雨醒客」と幸田露伴がつけました。

緑雨の作品には、戯作小説あり、下町情緒に少年少女の思慕をからませた小説がある一方、辛辣な風刺的文壇批評に長じてもいます。

彼は一生妻帯せず、蓬髪・垢面で人力車を乗り廻すなど奇行の多い人生を送りました。

## 53 両国橋界隈（両国橋児童公園）　両国一丁目

明暦大火（一六五七）の大災害の教訓を生かして幕府がそれまでの政策を大きく変え、両国橋を架けたのが万治二年（一六五九）。本所開拓事業の進展につれて交通の要衝として両国橋界隈は大繁昌でした。橋の西は両国広小路といわれ、大衆演劇・大道講釈・落語・娘義太夫等が軒を並べ、腰掛け茶屋が数多くありました。一方、東両国――墨田区側は、別に「向う両国」といわれ、俗に「垢離場」とも呼ばれました。当時盛んだった大山（神奈川県）詣りの者たちが、橋東袂で水垢離を取ってから出かけたからです。ここには見世物小屋が軒を並べ、それにつれて食べ物の屋台が並び、料理屋も繁昌しました。山くじら、もゝんじゃの豊田屋、坊主軍鶏がいまだにその面影を残しています。

### 1　握り寿司発祥の地

この賑いを背景に生まれたのが握り寿司「与兵衛ずし」です。与兵衛は、はじめは蔵前の札差板倉屋の手代でした。やがてお店風の風流が身にしみて、それがこうじて不相応なぜいたくをして身代をつぶし、いろいろ商売替えしてもうまくいかず、本所横網の裏店に身をひそめていました。しかし、道楽中に覚えた味から握りのこはだ寿司を考案しました。それを岡持に入れて夜の繁華街を売り歩きましたが、こはだにわさびを抱かせた握り寿司の味が受けて飛ぶように売れました。やがて屋台を出し、当時ぜいたくといわれた山本山の茶を添えて鮨を

売ったので、またたくうちに評判になり、ついに「与兵衛寿司」という店を持つまでになりました。

また、当時の狂歌に「鯛(たい)ひらめ　いつも風味は与兵衛ずし　買い手は店に待って折詰」といったのもあります。

今も日本の味とされている握り寿司が、本所を発祥の地とすることを知る人は、意外に少ないようです。なお、「与兵衛寿司」は昭和五年に廃業、今はその跡を偲(しの)ぶよすがもありません。

## 2　伝大高源吾「日の恩や」の句碑

両国橋の東詰めに両国橋児童遊園があります。そこに大高源吾の俳句といわれる「日の恩や忽(たちま)ちくだく厚氷」を刻んだ石碑が昭和三年に建てられています。赤穂浪士たちが本懐を遂げた後の心境を詠んだと伝えられています。源吾は水間沾徳の弟子といわれ、俳名は子葉です。また、芝居や講談等に出てくる源吾と其角との年の瀬の両国橋上での出合いは、史実はともかく世上によく知られた話です。

## 54　回向院（えこういん）

両国二丁目八番一〇号

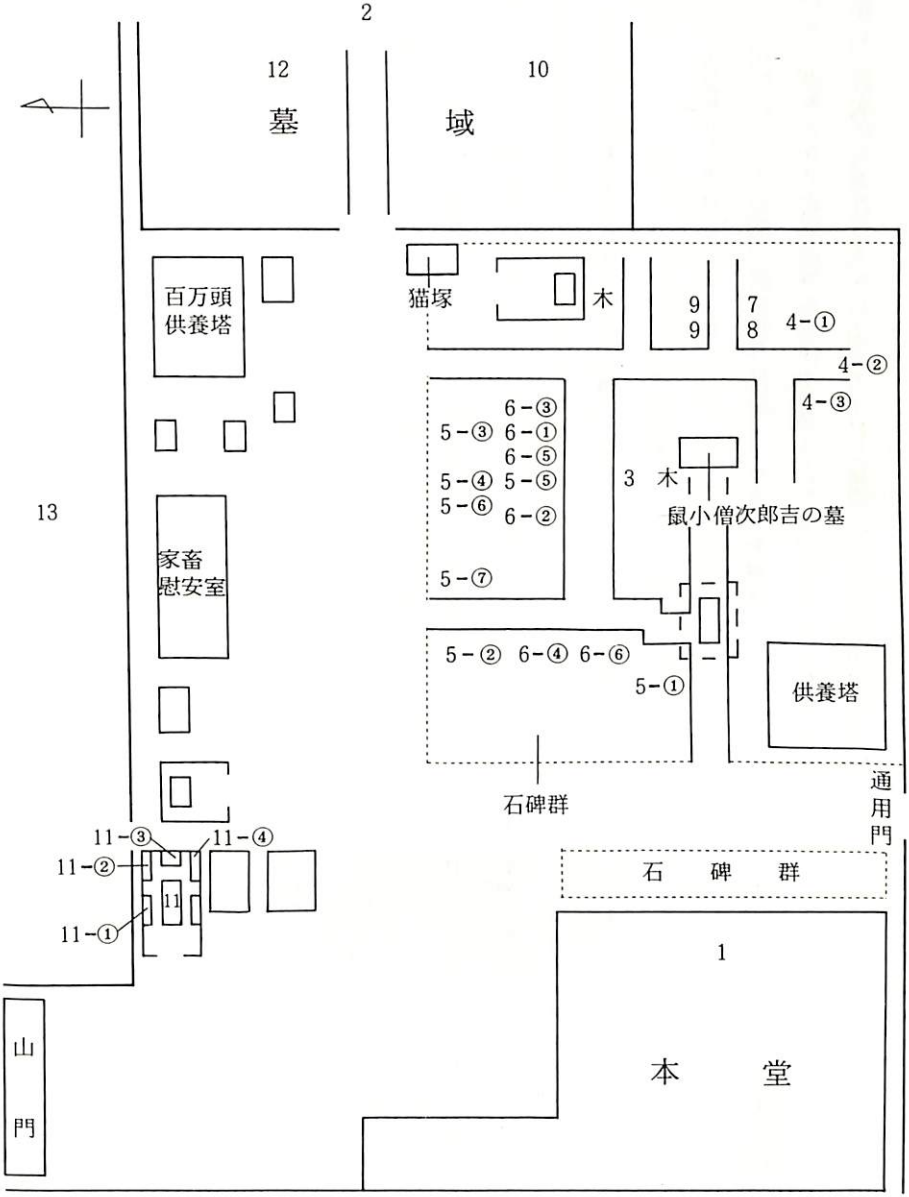
江戸の町五〇〇余町を焼失し、一〇万人を越える死者を出したという明暦三年（一六五七）正月の大火、俗にいう「振袖火事」の後、その月の二四日に芝増上寺に会津少将保科正之の将軍代参がありました。その結果、本所牛島新田の地、六〇間四方（約二、九〇〇㎡）が下付され、貴賤の別なく死者を埋葬しました。これが今の諸宗山無縁寺回向院の始まりです。

幕府は安藤右京進、松平出雲守の両人を奉行とし、増上寺の遵誉（じゅんよ）上人に命じて追善の法要を行わせ、さらに念仏堂や庫裡などを建立して、常念仏勧行が行われました。

森蓮社遵誉貴屋（きおく）上人はこれを回向院と号し、また小石川智光寺の楽蓮社信誉貞存上人を移住させたので、以後堂舎もしだいに建立されて、寺院としての形を整えるようになりました。

回向院には、その間、幕府及び江戸市民が全ての無縁仏を埋葬するようになり、洪水のために隅田川を漂流する水死者を両国橋あたりで引き上げて埋葬し、数次に及ぶ江戸大火によって生じた無縁の焼死者も埋葬されたほか、

回　向　院　山　門


2
12
墓
10
域
百万頭
供養塔
猫塚
木
9
9
7
8
4-①
4-②
4-③
6-③
5-③ 6-①
6-⑤
5-④ 5-⑤
5-⑥ 6-②
5-⑦
3 木
鼠小僧次郎吉の墓
13
家畜
慰安室
5-② 6-④ 6-⑥
5-①
供養塔
石碑群
通
用
門
11-③
11-④
11-②
11
11-①
石 碑 群
1
本 堂
山
門

牢病死の者もここに葬る習わしでした。なお、関東大震災による焼死者の分骨も一部納骨されています。

大震災以前の回向院は、表門は素木造りで西に向っており、山号を記した金字の扁額が掲げられ、門内の北側には相撲茶屋が建ち並び、正面には瓦葺、素木造りの本堂のほか土蔵造りの観音堂、小銅仏、小祠堂等がありました。

なお、境内には「天保二年八月十八日　俗名中村次郎吉之墓　教覚速善居士」とした**鼠小僧次郎吉の墓**（明治九年市川団升の建立）や「**猫塚**」があります。

1　「宝永二年」銘**阿弥陀如来座像**〈都指定文化財〉

本尊の阿弥陀如来座像は、無縁塚に安置されていましたが、元禄一六年（一七〇三）の火災で溶解したため、回向院四世の観誉上人祐鑑和尚が金銅仏として再び鋳造したものです。作者は有名な仏師、原田左京定宅、鋳物師は俗弥釜屋堀の釜屋六右衛門こと大田近江大椽正次で、江戸時代の優品です。高さ二八〇㎝、宝永二年（一七〇五）四月一日の銘があります。もとは露座の仏像でしたが、現在は本堂奥深く安置されています。

2　**阿弥陀如来座像**

墓域正面の無縁塔仏で、蓮弁に乗る像高一〇〇㎝の露座の銅造仏です。それまで深川富岡八幡宮にあったものを廃仏棄釈の折の明治三年、当地に安置されたということです。銘を拾うと、この間の事情がよくわかります。

「此釈尊者　従往昔　深川富賀岡之社地安置所　去七巳脱秋廃仏之時　願主有信之輩　乞助力購求　而為各

家運長久（下略）」

3　「寛文四年」銘**阿弥陀三尊像**〈区登録文化財〉

高さ二六三㎝に及ぶ大きな石塔で、正面に阿弥陀像、右面に観音像、左面に勢至像を配した阿弥陀三尊形式をとるものです。

正面の銘に「為三界万霊六親眷属菩提」、裏面に「寛文四甲辰年（一六六四）八月十五日　南新堀大川端町念仏講中」として一二一名の構成員を掲げています。

江戸初期の唐破風笠塔婆石塔として、区内でも数少ない大変貴重なものです。

4　**地蔵像**（三基）

回向院にはいくつかの石仏があって地蔵像は三基が確認されています。

①　「宝暦七年」銘**地蔵半跏像**

台座正面と右面に「三界万霊　南無地蔵菩薩　有無両縁」「宝暦七年（一七五七）丁丑九月吉日　安置於武州本所回向院境内」としていますが、「寛政二□（一七九〇）」の追刻銘があります。

②　「寛政五年」銘**地蔵像**（水子塚）

江戸時代には経済的な苦しさから、堕胎や間引きが広く行われました。こうした幼い魂を供養するために、老中松平定信が寛政五年（一七九三）に建てさせたと伝えられるものです。

端正な地蔵座像が浮き彫りにされ、その下に「水子像」と太く大書しています。右側面には造塔主旨を、左側面には「寛政五癸丑年五月廿八日」として第一二世見蓮社在誉巌竜の建立者名を刻んでいます。なお、塔身前面の囲りを念珠玉で飾るなどの技巧をこらしています。

③「安政四年」銘**六地蔵塔**〈区登録文化財〉

三段の台座に乗る六面地蔵塔で、総高一三二㎝のものです。これは、安政二年（一八五五）の大地震と翌三年の風水害による死者の霊を弔ったものです。

銘の「安政二年卯歳十月二日夜四時大地震（中略）圧死焼亡幾千万人不量又翌三丙辰歳八月廿五日従夜五時（中略）圧亡溺死数千万人（下略）」は、誇張があるものの両当日の惨状を伝えて余りあります。

願主は八丁堀金六町の横山同明で、その忰（せがれ）たちとの合力によるものです。

5　**供養塔**（七基）

回向院には、その起立のいきさつから多くの供養塔があります。江戸時代の災害を知る上で貴重な手がかりとなっています。

①「寛文七年」銘**供養塔**

正面に「繋囚牢獄病患死亡諸精霊等　捨市殃罰殺害前後衆霊魂等」と二行

に刻み、裏面に寛文七年（一六六七）の年紀を掲げています。獄死者や行倒の者たちの供養に建てられたものです。

② 「延宝三年」銘**供養塔**〈都指定文化財〉

俗に「明暦大火横死者等供養塔」と言われるもので、高さ三mをこえる大きな唐破風笠のある供養塔です。願主は回向院第二世信誉貞存です。延宝三年（一六七五）の建碑。

③ 「天明五年（一七八五）」銘**供養塔**

「信州上州地変横死之諸霊魂等」

④ 「天明八年（一七八八）」銘**供養塔**

「浅間嶽大火震死者供養」

右の二基は天明三年（一八七三）七月の浅間山噴火による大規模な被災・死者の、それぞれ三回忌・七回忌の菩提を供養したものです。

⑤ 「文政一二年」銘**供養塔**

文政一二年（一八二九）三月、神田から出火し下町の繁華街を全焼する大火（俗に「己丑の大火」）がありました。その死者の霊を供養したものです。銘に「文政十二年三月二十一日　焼死無縁塔」と刻んでいます。

⑥ 「安政三年」銘**供養塔**

安政二年（一八五五）一〇月、江戸市中を激震・津波が襲い（俗に「安政大地震」）、各所に大きな爪跡を残しました。その時の圧死者への供養塔です。

⑦「慶応三年（一八六七）」銘供養塔

安政大地震における焼死者の十三回忌の菩提を弔ったものです。銘を「地震焼亡横死諸群霊塔」としています。

6　**海難供養碑**（六基）〈区登録文化財〉

境内にある六基の海難供養碑群は、江戸期海難史の貴重な資料となっています。

①「勢州白子三州高浜船溺死一切精霊」

帆掛船型にした珍しいもので、背面に大黒屋幸太夫の名も見えます。寛政元年（一七八九）建立。

②「勢州白子参州平坂溺死供養塔」

高さ九二㎝のこの供養塔の名号は、江戸庶民の尊崇を集めた徳本上人の筆になるものです。文化一一年（一八一四）に江戸大伝馬町の太物（綿・麻織の反物）問屋仲間が溺死者供養のため建立したものです。台座には、南無仏庵の撰並びに書による、天明二年（一七八二）大黒屋幸太夫からの、海難小史が刻まれています。

③「勢州白子戎屋専吉船溺死者等供養塔」

文政八年（一八二五）太物店が建立したこの供養塔は、伊豆神津島で溺死した戎屋専吉外二二名と、天保・寛政の遭難者を追刻して供養しています。

④「海上溺死者群生追福之塔」

高さ一一二㎝のこの塔は、文政一〇年（一八二七）に菱垣廻船十組が建てたもので、安政大地震で倒れたのを同三年（一八五六）に再建したものです。正面名号は増上寺第六世冠誉慧厳大僧正の筆になるものです。

⑤「紀州本宮徳福丸富蔵船溺死人之墓」

高さ八五㎝のこの墓碑は、安政四年（一八五七）に樽廻船問屋井上重次郎と酒店・荒荷方等積合中が建立したものです。

⑥「溺死四十七人墓」

高さ一八五㎝のこの墓碑は、明治二年、上総川津村（千葉県勝浦市）海岸で沈没した肥後（熊本）軍艦の溺死者供養碑で、山鹿屋富岡文吉等が建立したものです。

## 7　加藤千蔭の墓〈都指定旧跡〉

大岡越前守配下の与力、加藤枝直の子で幼名佐芳（すけよし）、字は徳与丸、通称は常太郎、のち又左衛門と名のり、祖先が橘諸兄であることから本姓は橘を称えました。号は萩園（はぎぞの）・朮園（うけらぞの）等。父は歌人としても知られ、江戸に出た賀茂真渕の保護者であり門人でもありました。

千蔭は幼時から真渕に師事して国学を学び、村田春海とともに門下の双璧と称せられました。とくに和歌は古今・新古今調に優れたもので、江戸派として称せられました。父の跡を継いで与力となりましたが、病に托して公職を辞し、国学に専念貴重な著述を発表する一方で、書道においても抜群で、千蔭流と称して世上に広く行われました。また建部綾足（弘福寺の項参照）に絵を学び、一方では橘八街（やちまた）の狂名で狂歌をつくるなど巾広い活躍をしました。著書『万葉集略解』『うけらが花』等すぐれたものが数多くあります。文化五年（一八〇八）九月二日、七四歳で死去。墓碑の文字は自筆であるという説があります。

8 「朮園橘翁墓碣銘」の碑

この墓碣銘は、加藤千蔭の墓の隣に建てられています。高さ一七五㎝、幅八九㎝。大学頭林衡の撰文、日向守巨勢利和の書によるもので、千蔭の経歴や業績などが刻まれています。碑文を撰した林衡は、松平定信に見出され林家中興の儒学者として有名なだけに、この撰文は格調の高いものですが、残念ながら彫りが浅いので、読みにくいのが惜しまれます。文化一一年（一八一四）銘。

9 岩瀬醒・岩瀬百樹の墓〈都指定旧跡〉

加藤千蔭の墓の反対側に三つの墓が並んでいます。そのうちの左が山東京伝の墓です。姓は岩瀬、幼名は甚太郎、のちに伝蔵、名は醒、字は酉星と改めました。紅葉山（江戸城内）の東に住んでいたので山東と名のりました。京伝という号は、京橋に住む伝蔵ということで友人が略して呼んだのを、そのまま使ったといいます。

若いころから長唄・絵画を学び、吉原にはしばしば出入りし、家にいるのは月に五、六日といったありさま。一八歳で黄表紙『開帳利益札遊会』を発表、その後洒落本・滑稽本等を次つぎ出しました。

父伝左衛門の没後は家業の袋物商を継ぎ、新意匠を考案して繁昌、後には奇応丸・読書丸等の売薬も扱い、商売も上手でした。文化一三年（一八一六）九月七日、五六歳で没しました。

山東京山、本名は百樹、京伝の弟です。京山は京伝の墓銘を撰文し、自分の墓銘も五三回の誕生日に自撰、自書しました。安政五年（一八五八）九月二四日、九二歳の長寿で没しました。

## 10　平田禿木（とくぼく）の墓

墓は墓地の右側、奥の方右端にあります。本名喜一、禿木は雅号です。経歴は墓石の左側面に刻まれています。明治六年二月一〇日、日本橋区伊勢町（中央区本町一丁目）に出生、星野天地を助けて雑誌『文学界』を発刊し、近代文芸の興隆に寄与しました。三六年オックスフォード大に留学、帰朝後、高師・女子学習院・三高の教授を歴任しましたが、いずれも短期間でした。その後は東京で著述翻訳に専念、『エマアソン全集』等、多くの著書があります。

晩年は請われて法政大学で英文学を講じ、昭和一八年三月一三日病没、七一歳。学典院文誉明秀禿木居士。

## 11　力塚

高さ四七〇㎝もある巨碑で、昭和一一年一月に相撲協会が歴代相撲・年寄慰霊のため建立したものです。碑陰には「然ルニ力士行司ニシテ名声ヲ天下ニ馳（は）セ斯道興隆ノ為ニ貢献シタル者モ時ニ名跡其ノ後ヲ欠クニ至レバ後世空シク無縁トナリ祭祀ノ典礼ヲ絶ツ憾（うら）ミナシトセズ」とあり、その後、力士の断髪した髻（もとどり）や、物故力士・行司の分骨を納めて供養するようになりました。

また新弟子たちが力を授かるように祈願の対象にもなっています。力塚の玉垣内に四基の碑があります。

①「東京相撲記者碑」

物故相撲担当記者慰霊のため「角力記」の後を受けて、昭和三八年九月に日本相撲協会が建立。

②「角力記」

相撲記者慰霊のため、大正五年五月に初代梅ケ谷の建立。

③「回向院相撲記」

江戸勧進相撲が、記録で判明した貞享元年（一六八四）深川八幡宮境内に始まり、以後の推移を述べ、さらに天保四年（一八三三）一〇月から明治四二年六月国技館が建設されるまで七六年にわたる回向院との関係を記しています。昭和三八年九月二四日日本相撲協会の建立。

④「法界万霊塔」

大正五年五月初代梅ケ谷の建立。

12　太鼓塚

「呼出先祖代々之墓　呼出し連」とし、墓域の左側奥の方にあります。旧墓碑は昭和六年五月建立されましたが、戦災のため昭和三四年九月呼出し組合により再建されました。なお呼出塚と呼ばれていたようですが、昭和五八年に建てられた、墓の左の「歴代呼出し各々之霊位」の裏面には太鼓塚と記されています。

13　旧国技館

昭和五八年、旧国技館はついに解体され、墨田のシンボルが一つ消えました。

この建物は、明治四二年辰野金吾、葛西万治両博士の設計監督、三年の年月をかけて完成したものです。穹窿（きゅうりゅう）円壔形（えんちょうけい）と呼ばれる建築形式で、三二個の弓状鉄骨が中央に集まり、建物の内径約六〇m、中央高さ二四m、

屋上塔頂は約三四m、収容人員一万六、〇〇〇人という当時としては目を見張るような壮大なものでした。

相撲は明治維新により一時衰退しましたが、明治一七年の天覧相撲を契機に再び隆盛となり、さらにこの近代的建築の国技館では、常設館として多くの名力士が現れ、名勝負が展開されました。しかし、この建物もいくたの苦難曲折を経てきました。大正六年一一月二九日全焼、同一二年大震災で再び焼失、そのつど復旧されましたが、昭和二〇年、敗戦のため進駐軍に接収され、戦後の興行は昭和二〇年秋、二一年秋の二回だけでした。そして三三年に日本大学の講堂となりました。

## 55　両国国技館（りょうごくこくぎかん）

横網一丁目三番

戦後、旧両国国技館が進駐軍に接収されたこともあって、昭和二九年国技館が蔵前（台東区）に建設されました。いわゆる蔵前国技館です。栃若、柏鵬時代などの思い出を残していますが、建物の老朽化も進み、昭和六〇年伝統ある両国の地に、新国技館として帰って来たわけです。

ＪＲ両国駅の北側にそびえる、緑の銅板葺きの大屋根がそれで、地上三階地下三階の延べ面積三万五、〇〇〇㎡、収容人員一万一、〇〇〇人を誇るものです。外観はクラッシックですが、内部は最新技術を駆使した新鉄傘造りで、土俵も電動式で奈落に沈み、神明造りの土俵の屋根も昇降式になっており、多角活用のできるものになっています。

相撲博物館、相撲教習所も大屋根の下に収まっています。

国　技　館

## 56 芥川竜之介生育の地

両国三丁目二一番一四号

竜之介は明治二五年三月一日、東京市京橋区入船町八丁目一番地（中央区明石町）に牛乳搾取販売業耕牧舎を営む新原敏三・ふくの長男として生まれました。辰年辰の日辰の刻の生まれにより竜之介と命名されたといいます。生後七ヵ月で生母ふくの神経衰弱のため、当時本所区小泉町一五番地（両国三丁目）に住んでいたふくの長兄、芥川道章に引き取られ、後一三歳の時、芥川家の養子となりました。

芥川家は江戸時代からの旧家で、道章は東京府の役人をし、文学・美術を好み、俳句や南画をたしなみ、盆栽に親しみ、一家をあげて一中節を習い歌舞伎を見物するなど、教養を重んじてなお下町的な江戸情緒の濃い家庭でした。

府立第三中学校在学当時

芥川竜之介

それ以来、物心つくまで生活し、ここ両国界隈・大川端は竜之介の精神的風土となった地です。五歳で回向院に隣接する江東尋常小学校付属幼稚園に入園、翌年同小学校に入学しました。明治三八年府立第三中学校（両国高等学校）に入学、同四三年成績優秀により無試験で第一高等学校第一部乙類に入学しました。その後、大正二年東京帝国大学英文科に入学、同五年卒業しました。

このころ、芥川家は府下内藤新宿二丁目一番地（新宿区新宿二丁

目）に転居しています。そして、同七年塚本文子と結婚しました。

大学在学中、同人雑誌「新思想」に「鼻」を発表して夏目漱石に認められ、文壇に名をなす機縁をつくりました。初期には多く歴史小説を書き、「羅生門」「芋粥」「戯作三昧」「地獄変」「奉教人の死」「きりしとほろ上人伝」などを発表しています。彼の作風には外国作家の影響のほか、森鴎外や漱石からの感化が強いとされています。また、日本の古典、とくに『今昔物語』やキリシタン文学などから素材を発見し、殉教的感激・芸術至上主義的情熱などに興味を寄せています。文体は一語一句をゆるがせにせず、素材に応じて多種多様な試みをし、人生の一角を知的な視覚から切りとって、大正期の代表的短編小説家になったと言えます。

大正一〇年、中国周遊後に健康を害し、神経衰弱や胃瘍病に悩み、作品にも憂うつの度を加え、「玄鶴山房」「河童」「蜃気楼」に現れています。昭和二年七月二四日未明、「自嘲　水涕や鼻の先だけ暮れ残る」の辞世と遺書を残し、服毒自殺しました。豊島区染井の慈眼寺に葬られ、命日には毎年「河童忌」が営まれます。彼が好んで河童の絵を画いたことにより、この名があります。

遺稿に「西方の人」「歯車」「或阿呆の一生」などがあります。また、小説以外に詩、俳句（高浜虚子に師事）、評論、随筆にも優れました。

なお、**区立両国小学校**の正門前に最近（平成二年）、区の「文化都市づくり」の一環として、「杜子春」の一節を引用した**芥川竜之介の文学碑**が完成しました。また、両国高校内にも文学碑が建てられています。

## 57 榛稲荷社（はんのきいなりしゃ）

両国四丁目三四番一一号

このあたりは、榛馬場（はんのき）と呼ばれた馬場のあった所で、東西一〇二間（約一八五m）南北一二間（約二二m）ありました。馬場を囲む土手に大きな榛（はんのき）があったところから、この名がつけられたのでしょう。この馬場は本所に住む武士の弓馬の稽古を目的としたものです。この馬場の傍らに祀られていたのが榛稲荷社です。この神社には天保八年（一八三七）亀沢町の若者中が奉納した一対の木造朱塗りの**奉紙立**が現存しています。震災・戦火を免がれ、今に伝えられています。なお、勝海舟の父小吉の著書『夢酔独言』の中に、子供のころの回想として榛馬場のことが出ています。また、葛飾北斎も当社の隣に住んでいたとも記されています。

## 58　本所警察署（ほんじょけいさつしょ）

両国四丁目二九番六号

二基の「警察官殉職慰霊碑」があり、それぞれに副碑があります。

**①「本所原庭（はらにわ）警察署殉職警察官碑」**

大正一三年九月一日建立。この碑の右手前にある副碑には、建碑の由来が記されています。

関東大震災の折、業火の中を積極果敢に多くの人々の救出誘導にあたり、ついに殉職された当時の本所原庭警察署、和多喜義警部補以下一五名（氏名裏面に刻む）の勲功をたたえ、震災翌年の九月一日、現在の東駒形二丁目一番の本所原庭警察庁舎前に建立されたもので、のち移されたものです。

なお、副碑は昭和五九年一月二〇日建立。この副碑には、明治一三年凶悪犯人逮捕にあたって殉職された永山三月巡査をはじめ一五名、昭和二〇年三月の東京大空襲の際の殉職者川原一男巡査をはじめ一四名、合わせて二九柱の氏名が刻まれています。

**②「大震災相生（あいおい）警察署員殉職之碑」**

昭和八年九月一日建立。碑陰には殉職者氏名が刻まれています。関東大震災の時、とりわけ被服廠跡を擁した本所地区の悲惨な状況は筆舌に尽しがたいものがあります。傍らの副碑には、この地区を管轄していた当時の相生警察署員の、身の危険をも省みず救出に奮闘、ついに殉職された山内署長以下三四名の氏名が刻まれています。

# 59 両国公園（りょうごくこうえん）

両国四丁目二五番二四号

## 1 「勝海舟生誕之地」の碑

勝海舟は、文政六年（一八二三）一月三〇日、本所亀沢の父小吉の実家である男谷家に生まれました。初めの名は義邦、幼名鱗太郎。剣は島田虎之助に学び、向島弘福寺に参禅。また永井青崖について蘭学を修め、西洋の兵学、砲術、航海、測量法などを学びました。安政七年（一八六〇）一月、咸臨丸艦長として邦人の手による初の太平洋横断の快挙をなしとげました。慶応四年（一八六八）三月、高輪（港区）薩摩邸において西郷隆盛と会見、江戸城無血開城に成功し、江戸市民を戦禍から救いました。徳川将軍家が駿河七〇万石に封ぜられると、海舟は家族を挙げて静岡に移った後、明治五年一〇月赤坂（港区）氷川町に移り住みました。のちに明治政府にも重用され、参議兼海軍卿・元老院議官などになり伯爵になりました。晩年は著述に専念し『海軍歴史』『陸軍歴史』『開国起源』等の多くの著書があります。明治三二年一月一九日、七七歳で病没、大田区洗足池畔に葬られました。

勝　海　舟

# 60 尺振八の共立学舎跡

両国四丁目八番周辺

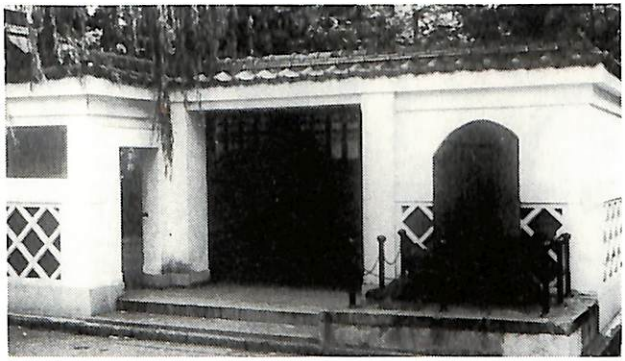
尺振八は天保一〇年（一八三九）、下総高岡藩の医師の子として生まれました。万延元年（一八六〇）二二歳の尺はジョン万次郎や英学者西吉十郎らから英語を学び、文久元年（一八六一）からは福沢諭吉もいた幕府外国方に通弁（通訳）として勤めました。その間、同三年（一八六三）の遣欧、慶応三年（一八六七）の遣米と二度の使節団に随行してじかに西洋文明に接しました。とりわけ、アメリカでは諭吉、津田仙と共に教育施設も視察して帰国し、諭吉は「慶応義塾」を、尺は明治三年七月に相生町のこの地に「共立学舎」を開くことになります。「共立学舎」は寄宿制英語塾でしたが、英語のほか、漢字教育も行った洋漢兼学のバランスのとれた私塾であったために開塾後の半年で一〇〇名を越える生徒数を誇りました。

尺はスペンサーの『教育論』を翻訳した『斯氏教育論』を刊行、自由民権運動の理論書として数多くの人々に愛読され、また未完の『明治英和字典』記述や多くの人材を輩出するなどの業績により、〝現代英学の祖父〟とも呼ばれ、諭吉と共に近代教育の幕開けを演じましたが、同一九年一一月二八日、四八歳の若さでこの世を去りました。

尺振八

## 61 本所松坂町公園（ほんじょまつざかちょうこうえん）

両国三丁目一三番九号



本所松坂町公園

### 1 吉良邸跡〈都指定旧跡〉

旧本所松坂町（両国三丁目）吉良家上屋敷は広大で、東西七三間（約一三四m）、南北は三四間（約六三m）であって、坪数二、五五〇坪（約八、四〇〇㎡）と記されています。

吉良上野介が近藤登之介の屋敷跡を拝領したのが元禄一四年（一七〇一）九月三日、義士の討入りがあって没収されたのが元禄一六年二月四日ですから、吉良家の上屋敷となっていたのは、前後一年半に満たない短期間でした。

屋敷の表門は東側、今の両国小学校に面した方にあり、裏門は西側に位置し、東・西・南の三方は周囲に長屋があり、北の方だけ本多孫太郎、土屋主税の屋敷と地続きになっていました。建坪は母屋が三八一坪（約一、二八〇㎡）、長屋は四二六坪（約一、四〇〇㎡）です。

現在、吉良邸跡として残る本所松坂町公園は、当時の七六分の一にすぎませんが、地元両国三丁目町会有志が発起人となって、邸内のいわゆる「吉良の首洗い井戸」を中心に土地を購入し、昭和九年三月東京市に寄附し、これ

によって貴重な旧跡が維持されました。なお、区移管は昭和二五年九月です。公園の周囲にある高家の格式を表すなまこ壁の、長屋門を模した高さ約二mのコンクリート壁と門とが、わずかに当時の模様を偲ばせます。

なお、毎年一二月一四日義士討入りの日には、地元義士会によって義士祭が、その日の午後には同じく吉良祭が盛大に行われています。

ちなみに、この敷地内に鎮座する松坂稲荷は、もと兼春稲荷と称し吉良邸内にあったもので、さらに古く、この地がまだ宅地開発される以前から、この周辺の土地に祀られていたものです。

## 62　塩原橋（しおばらばし）

両国三丁目九番

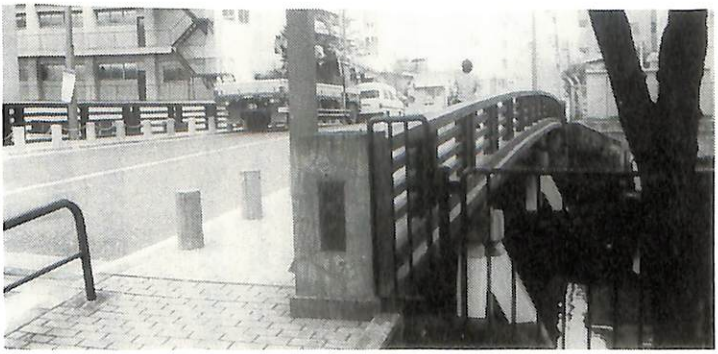
本所相生町二丁目（両国三丁目）あたりで、塩原屋太助（一七四三～一八一八）が薪炭商を営んでいたので、それにちなんで塩原橋とつけられました。

太助（三遊亭円朝作の人情噺では多助）は故あって上州下仁田小高明神の森に捨てられていましたが、村の旧家塩原角左衛門に拾われ育てられました。しかし、一六歳のとき義母の話を聞いて身の上を知り、江戸に出て独立する決心をしました。その時義父がくれた餞別の一〇両を元手にして薪炭商を始め、天性の商才によって財をなしました。江東区の亀戸天神社には彼の奉納した石燈籠が見られます。それには次のような銘が刻まれています。

「奉寄進石燈台　両基　武蔵国葛飾郡亀戸　天満宮大前

天明元辛丑年（一七八一）八月一七日　本所相生町住　塩原太助」

円朝作の『塩原多助一代記』には「本所に過ぎたるもの二つあり、津軽大名炭屋塩原」とはやされるほどでした。



塩　原　橋

## 63 江島杉山神社（えじますぎやまじんじゃ）

千歳一丁目八番二号

本殿脇の岩屋

杉山検校（けんぎょう）は若年のころ失明し、家が貧しかったので一念発起、江の島の岩窟にて断食祈願し、満願の前夜夢に弁財天より鍼術を感応、その後寝食を忘れて修練し、ついに杉山流の鍼術を創始しました。のち五代将軍綱吉に針治を奉り、本所一つ目に方一町（約一万二、〇〇〇㎡）の土地を拝領しました。ここに総録屋敷を建て、その西隣に弁財天の一社を建立したのが始まりです。総録屋敷では例年二月一六日、六月一九日盲人が集まり、弁天堂で琵琶を弾じ奉納する習わしでした。ここ江島杉山神社には、江の島の弁天洞窟を模した洞穴があり、奥深く弁財天が祀られています。

なお、境内に即明庵の由来を記した昭和四〇年建立の「**即明庵跡**」の碑と、建立事情・年紀ともに不明の**宝井其角**「ほととぎす」の句碑があります。

その他、戦火の傷も生々しいいちょうの大木もあり、このあたり一帯の戦禍の激しさを物語っています（弥勒寺の項参照）。

1　「杉山検校頌徳碑」

篆額の下に杉山検校のレリーフと点字による銘文銅板をはめ込んだ頌徳碑で、点字を掲げた碑は全国的にも珍しいと言えましょう。

大正一三年の二五〇年遠忌に営まれた碑が、戦災で損壊したので、昭和三四年に杉山検校遺徳顕彰会が再建したものです。

なお、岩屋内の壁面には昭和三九年銘の「岩屋重修記」が埋め込まれています。

2　八橋城秀検校の碑

八橋検校は江戸初期の箏曲家で、磐城（福島県）平の人。壮年、江戸に出て法水に筑紫箏曲を学び、八橋流を創始しました。また、三味線・胡弓の名手でした。

彼の遠忌に営んだ寛政七年（一七九五）の碑は、関東大震災で破損したので、その石を利用して、昭和九年に改めて二五〇年遠忌を営んだ旨の碑石を埋め込んでいます。山田流箏曲協会による昭和一〇年の建碑。

## 64 要津寺（ようしんじ）

千歳二丁目一番一六号

臨済宗、京都妙心寺末で、慶安年間（一六四八～一六五一）に僧東鉄が本郷に創建して、東光山乾徳寺と号しました。牧野越中守成儀（なりよし）を開基、西江和尚を開山とします。その後、天和二年（一六八二）に焼失して廃寺となっていました。元禄四年（一六九一）二月に牧野備後守成貞（なりさだ）が本所の地に七、一三四坪（二万三、五四二㎡）を下屋敷として給せられ、翌三月九日、その一部を寺に寄附し、再興されました。これによって成貞を中興開基、中興開山を梁伝（りょうでん）和尚とします。

1　**搗謙中野先生之墓**〈都指定旧跡〉

寛文七年（一六六七）長崎に生まれ、名を継善、字を完翁、通称は善助、搗謙と号しました。母は大原氏で、林道栄の妻と姉妹です。

幼い時父を失ったので道栄の家に寄寓しました。道栄はわが子のようにかわいがり、自ら句読を授け、書法を教えました。なお、道栄は儒者として、とくに書家として名声の高かった人です。

句碑群

撝謙はよく学び、七、八歳で経史に通じ一二、三歳で書を能くしました。世人はその名を呼ばずに林氏の神童と呼びました。一九歳の時江戸に学び、程朱学を修めました。たまたま篠山侯に才を認められ、その援助でいっそう学問に励みました。やがて神田鵜子町（千代田区小川町一丁目、司町）に住み、弟子たちに学問を授けたのち、関宿侯牧野氏に仕え、禄一五〇石を賜わり、江戸の藩邸に住みましたが、享保五年（一七二〇）に没しました。

2　**島男也の墓**〈都指定旧跡〉

島男也は勤王家で水戸藩士でしたが、故あって浪人し、大阪に出て生玉神社（天王寺区生玉町）の祠前に住み、剣術を教えて有名でした。

万延元年（一八六〇）高橋多一郎が上方に来て男也を訪ね、機密を示して反幕計画をたてようとしました。この高橋多一郎も水戸藩士で、藤田東湖に学び、徳川斉昭（なりあき）の近侍に抜擢されるなど、なかなかの人物でした。幕府に批判的で、とくに井伊大老の幕政に抗し、種々画策しました。しかし、幕府の探索は厳重を極め、ついに多一郎父子は自殺に追いこまれ、男也は捕われて江戸に送られ、文久元年（一八六一）一一月五日、小伝馬町牢で獄死しました。法名は「孝道是心居士」です。

3　**雪中庵蓼太「みかの月」の歌碑**（「芭蕉翁俤（おもかげ）塚」）〈区登録文化財〉

要津寺の山門を入るとすぐ右側にあります。

花崗岩の石の正面に「芭蕉翁俳塚」と刻まれ、裏面上部に「銘」として、次のような銘文が刻まれていますが、風化が進んでいて一部読みとれません。

「みかの月　弓矢とともに　すてし身を　くさの褥に
　ふししよの　むすひし夢に　はゝき□の　ありとは見えて
　あさかほの　しほめる花の　まほろしを　と□□うつしき
　ふてとせし　その翁さへ　なゝそちの
　おもかけ塚を　したはさらめやも　　雪中庵蓼太」

なお、右側に「宝暦十三年（一七六三）」、左側に「癸未十月十二日　雪中庵門人　建」と刻まれています。

4　「芭蕉翁百回忌発句冢碑」〈区登録文化財〉

芭蕉翁俳塚の後方にある碑で、正面（実はこれが裏面）に「碑に花百とせの蔦植む　雪中庵蓼太」と刻まれ、裏面には「芭蕉翁百回忌発句冢碑」の篆額の下に、素斎沢謙伯鳴甫撰で「芭蕉翁嘯月吟花之風雅自貴介公子至山野牧童無不瞻仰者実宇宙間一偉人也」という書き出しの長い銘文があります。なお、碑の左側に「東江居士書」、右側に「門人翠兄建」と刻まれています。

蓼太は、自分が病弱で芭蕉百回忌に関わることのできないのをおそれて、実際より一〇余年ほど早い天明二年（一七八二）四月、ここ要津寺で芭蕉翁百回忌の発句会を開いて、この碑を建てました。蓼太は天明七年（一七八七）九月六日、七〇歳で没しています。

5　**松尾芭蕉「古池や」の句碑**〈区登録文化財〉

「古池や蛙飛びこむ水の音　はせを」と正面に刻み、裏面には「雪は古池に和して水音をつたへ　月の一燈花の清光もをのつからなる　此翁の徳光をあふくのみ」の前文に続いて

「白妙の　雪より出たり　後夜の月　夜雪庵普成

夕汐や　のほれは月の　みやこ鳥　雪杉樓亀求

うつろはし　〳〵とて　ちる花か　玉雪齋子交」の三句が並べて刻まれています。

さらに碑の右肩には「安永二癸巳歳（一七七三）四月十二日」「深川親和七十三歳書」と二行に刻んでいます。深川親和とは江戸時代の有名な書家で、本姓は三井ですが、深川に住んでいたので俗に深川親和と称しました。なお、書道だけではなく弓馬の道にも達し、その門人も多かったといいます。

おそらく、詠者三名による建碑でしょう。

6　**雪中庵供養墓**

雪中庵四世完来に始まって対山、椎蔭、凰州、梅年、雀志、宇貫、東枝、竜雨、二松、双美と十四世までの供養墓です。

7　**大島蓼太の墓**

自然石を四角の台石の上に置いたもので、台石正面に「雪上加霜」と刻まれ、水さしに「雪碑」とだけ刻まれ

ています。天明七年（一七八七）に建てられたものです。これは供養墓だとする説もあります。

蓼太は本名大島陽喬、通称平八。吏登の門人にて三世雪中庵と称し、門人多く俳名一代に高かったといいます。天明七年九月六日、七〇歳で没しました。

**8　前雪中庵嵐雪居士・後雪中庵吏登居士墓碑**

一世雪中庵服部嵐雪、二世雪中庵桜井吏登供養のため、三世大島蓼太が安永五年（一七七六）に建立したものです。嵐雪は江戸湯島の生まれで、新庄隠岐守、井上相模守に仕えました。早く芭蕉の門に入り、其角と並び称される逸材で、多くの秀句をのこしています。「梅一輪一輪ほどの暖かさ」とか「黄菊白菊そのほかの名はなくもがな」などはとくに知られた名句でしょう。なお、嵐雪は宝永四年（一七〇七）一〇月、五四歳で没しています。また吏登は嵐雪の門人で、宝暦五年（一七五五）二月、七五歳で没し、法恩寺に葬られました。

**9　牧野侯代々の墓**〈区登録史跡〉

当寺の開基、牧野成儀侯等牧野家代々の墓が墓域にあります。天祥寺の松浦侯、弘福寺の池田侯と共に、区内に残る数少ない大名墓の一つです。四基の灯籠（年紀不明）が奉献されているのが、僅に大名墓らしい面影を偲ばせます。ただし、墓石は再建したものです。開基牧野成儀の法名は要津院殿壁立鈍鉄大居士。

## 65 弥勒寺

立川一丁目四番一三号

万徳山聖宝院と号し、新義真言宗で京都醍醐寺三宝院末でした。慶長一五年（一六一〇）宥鑁によって、小石川鷹匠町に創建されました。幾度かの移転の後、元禄二年（一六八九）二月、新開地である本所の現在地に移ったものです。現在は根来寺（和歌山県）の末寺となっています。

江戸時代は新義真言宗の触頭で、寺領一〇〇石の朱印状を下付され、関東四カ寺中の一寺として格式がありました。また、江戸十二薬師のひとつとしても有名でした。かつて縁日も本所では、元徳稲荷・徳山稲荷と並んで盛んでした。

この薬師像は、川上薬師といわれ、「文政寺社書上」によれば、かつて水戸領常陸の寺院にあったころ、故あって寺地が水戸光圀によって没収され、像も那珂川に流されたところ、川上に流れ、以後光圀の信仰も得て、川上薬師として祀られてきたと伝えています。

また、塔頭として、徳上院・法樹院・正福院・宝珠院・正覚院・竜光院がありましたが、現在、徳上院・法樹院・竜光院は寺院として独立しています。

現在もユニークな法話の聴ける寺院として知られ、書家相沢春洋をしのぶ筆塚も建っています。

1　杉山検校の墓〈都指定旧跡〉

杉山検校は名を和一といい、慶長一五年（一六一〇）伊勢（三重県）藤堂家の家臣の子として生まれました。しかし、幼くして失明し、家を義弟重之に譲り、江戸に出て鍼術を山瀬琢一の門に学びました。のち師の門を追われますが、努力工夫を重ね、さらに江の島の弁天の祠に詣で、断食祈願なども繰り返し、ついに杉山流管鍼（くだばり）を創案しました。さらに京都にいき、入江豊明について鍼術を学び、この道の奥義を究めました。

貞享二年（一六八五）正月、将軍綱吉の病を治療して白銀五〇枚を賞賜されました。ついで禄五〇〇石を賜わり、後に三〇〇石を加増されています。元禄五年（一六九二）五月関東総録（そうろく）検校に挙げられ、綱吉の命を受けて鍼術の興隆を図り、鍼治講習所を設けて諸生に教授しました。

元禄六年（一六九三）には宅地を本所一ツ目に受領し、ここで晩年を過ごしました。杉山検校はこの地に、日ごろ信仰厚い相模（神奈川県）の江の島弁天社を鎮祭しています。明治以後は江島神社と改め、同じ境内の杉山検校を祀った杉山神社と合わせて、江島杉山神社と呼んでいます。元禄七年（一六九四）五月一八日に八五歳でここに没しました。江の島の弁天社とこの弥勒寺に葬られました（江島杉山神社の項参照）。

## 2　戦災殉難慰霊観音像

石造の観音立像で、太平洋戦争の戦火による多くの殉難者、とりわけ、昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲によって亡くなられた人々の慰霊のために、昭和四二年三月建てられたものです。このあたりで亡くなられた三、五〇〇体もの遺骨が納められています。なお、この観音像は日展会員の片岡静観の作です。

## 66 野見宿祢神社

亀沢二丁目八番一〇号

かつて当社の東側に相撲の高砂部屋があり、明治一八年親方であった高砂浦五郎の尽力で、元津軽上屋敷跡に、相撲の神様として知られる野見宿祢を祀ったのが当社の起こりです。戦後の再建ですが、玉垣の石柱には力士や相撲関係者の名前が刻まれており、いかにも角界の信仰する神社であることがわかります。本場所前には必ず相撲協会のお祀りが行われています。

なお、境内には昭和二七年一一月、日本相撲協会によって歴代横綱の名を刻した石碑が二基建てられ、一基は初代明石志賀之助から四六代朝潮太郎まで、もう一基は四七代柏戸剛から六五代貴乃花光司までの名が刻まれ、さらに追刻できるようになっています。

# 67　日本電々(株)墨田営業所　石原四丁目三六番二一号

## 1　「慰霊」の碑

高さ二三〇㎝・幅三四㎝の細身の石柱に「慰霊」と刻むのは、時の電電公社総裁梶井剛氏の揮毫です。

傍らの副碑とも言える黒御影のプレート碑は、昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲の際に、殉職した女子交換手二八名と男子職員三名の殉難をいたみ、小説家吉川英治が撰文・朗読したものです。英治もまた、この災難で愛娘をなくし、行方を探すうちにこの地に至り、この悲劇を知り、後日の法要にも縁あって参加した一人でした。

吉川英治の「碑文」を集録すると、次のとおりです。共に、昭和三三年の建碑。

「春秋の歩み文化の進展は、その早さその恩恵に馴るゝ儘つい吾人をして、過去の尊いものを忘れしむる

こゝ百尺の浄地は大正十二年九月一日の関東大震災殉職者二名と、また過ぐる昭和二十年三月九日夜半における大戦の大空襲下に国を愛する清純と自らの使命の為ブレストも身に離たず　劫火のうちニ相擁して仆れた主事以下の男職員三名ならびに女子交換手二十八名がその崇高な殉職の死を永遠となした跡である。

当時の墨田分局　いま復興を一新してその竣工の慶を茲ニ見るの日　想いをまた春草の下に垂れてかっての可憐なる処女らや　ほか諸霊にたいし痛惜の悼みを新にそゝがずにいられない

人々よ　日常機縁の間ニふとこゝに佇む折もあらば　また何とぞ一顧の歴史と寸時の祈念とを惜ませ給うな」

## 68 法恩寺（ほうおんじ）

太平一丁目二六番一六号

法恩寺本堂と平川清水稲荷

長禄二年（一四五八）江戸平河（千代田区）の地に創建されたと伝えられています。それまでは小庵に過ぎなかったものを、当時の江戸城主太田道灌が日住上人に助力して一寺を建立し、本住院と号したといいます。その後、大永四年（一五二四）に至って道灌の孫に当る資高（すけたか）が、父資康（すけやす）追善のために堂舎を造営し、寺号を平河（へいか）山法恩寺と改めました。さらに、江戸開府以来、数度の移転を経て元禄元年（一六八八）に現在地に寺地を定めたものです。

日蓮宗本圀寺（ほんごくじ）（京都市）末で、本尊として安置する日蓮上人木像は日法上人の作と伝えられています。

境内には、寛保七年（一七四二）銘「平川清水稲荷大明神」の石柱、昭和七年建造の鐘楼三重塔（経石塔）、同三一年建立の「道灌公記念碑」などがあります。

江戸時代には一二の塔頭がありましたが、千栄院・陽運院・善行院・法泉院が現存しています。

① 塔頭千栄院

明応七年（一四九七）に法恩寺第三世日喜上人によって創建されました。祖師像及び大曼陀羅を本尊とし、また痰病守護道晴尊の木座像を安置して、「たんぼとけ霊場」の名によって知られています。

② 塔頭陽運院

大永元年（一五二一）に日新上人によって創建されました。本尊は日蓮上人像で、日朝上人秘伝という眼病守護のみょうがを授ける「めぼし霊場」としても名があります。

墓域には哥沢芝派の祖哥沢芝金一世及び二世の墓、江戸中期の俳人水間沾徳の墓などがあります。

1 太田道潅供養墓（五輪塔）

墓域正面にあって、目立つ五輪塔です。各石ごとに「妙法蓮華経」の各一字を充てています。地輪正面に「当山開基蓮乗院殿道潅日恩大居士」とし、側面には資康・資高・康資などの法号も見られます。

建立年代等は定かではありません。

2 「貞享二年」銘水鉢

寺内の平河清水稲荷社前にある水鉢で、大きさとしては小ぶりに属しますが、銘に古称の「御手水鉢」とあることにより貴重で、区内唯一の例と言えます。

「貞享弐年（一六八五）　御手水鉢　丑九月十日」

3　「天保一二年（一八四一）」銘「**無縁塔**」

本所入江町（緑四丁目）の小茶屋（娼家）松葉屋・吉本屋・島津屋・新鰕屋・海老屋・河村屋の六軒が共同で、身をひさぎはかなく死んでいった抱え女郎のために建てた無縁仏塔で、七二名もの女性の戒名が刻まれています。

4　「地震圧死火難水難剣難横死精霊」**供養塔**（「文政一二年」銘供養塔）

正面に「南無妙法蓮華経」の髭題目を刻み、その下に三行書で「地震圧死　火難水難　剣難横死　精霊」としています。文政一二年（一八九二）三月に本所竪川講中が建立したもので、世話人八名の名も見えます。

5　**水間沾徳の墓**

水間沾徳は江戸中期の俳人で、談林風、知的な比喩的俳諧を得意としました。寛文二年（一六六二）江戸に生まれ、通称を次郎左衛門、字を友兼といい、本姓は門田であったとされています。

俳諧を志して、初め福田露言に入門して沾葉と号し、後、内藤露沾の門にかわり沾徳と号しました。三一歳の時『一字幽蘭集』を著して好評を得、享保期（一七一六～一七三六）俳壇の中心的存在となりました。その他の著に『沾徳随筆』『文蓬菜』など多々あります。

なお、沾徳は赤穂浪士、とくに大高源吾（子葉）と俳諧の道で強い子弟関係にあったと言われています。

墓石に「本妙院沾徳日到居士」の法名を刻んでいます。

## 69 本法寺（ほんぽうじ）

横川一丁目一二番一二号

文禄四年（一五九五）、寿明院日慶上人が神田に土地を拝領して創建し、その後、慶安二年（一六四九）上野谷中に移り、さらにその地が公収されたため、元禄二年（一六八九）本所に移転したものです。日蓮宗で京都本圀寺の末寺です。

### 1　狩野元信の墓碑

狩野元信は、文明八年（一四七六）狩野派の始祖正信の子として京都に生まれました。父の跡を受けて足利将軍家の御用絵師となり、大炊介（おおいのすけ）のち越前守に任ぜられ、のち仏門にはいって永仙と号し、法眼（ほうがん）になりました。

元信は父に学んだ宋元（そうげん）の画風の上に、さらに大和絵の技法も取り入れて、力強い日本的な画法を大成しました。画題も山水、花鳥、人物等のあらゆる方面にわたっています。それまでの漢画は禅僧の余技的なものでしたが、彼に至って専門画家の手に移ったと言えましょう。彼の様式は後の狩野派の規範とされ、後世「古法眼（こほうがん）」と俗称されています。

室町から桃山時代にかけては、豪壮な建築が数多く建てられましたが、それらにふさわしい障壁画が多く、彼によって完成されていきました。なお、元信の妻は土佐興信の娘であり、彼は土佐派の技法をも吸収して、狩野派の新しい画法を確立し、御用絵師としての立場を不動にしていきました。室町幕府の崩壊、豊臣氏の滅亡など

権力者の交替でも、徳川幕府の絵師としての新しい地位を確立し、狩野派の繁栄を維持していきました。とりわけ江戸狩野と言っても、鍛冶橋狩野、木挽町狩野、浜町狩野といった奥絵師、さらに分派して表絵師・各藩お抱え絵師等その勢力を拡大していきました。もちろん、京都でも京狩野として栄えていきました。従って事実上の狩野派の始祖ともいうべき元信の供養墓を江戸に築き、狩野派永遠の隆盛を願ったことでしょう。

本法寺の元信墓碑は高さ一〇九cmで、正面に「善巧院殿元信法眼日到大居士」、左側面に「永禄二年（一五五九）十月六日歿狩野元信」、右側面に「昭和三十年十月再建　狩野文」とあります。なお、当寺には各狩野家関係の墓碑が多く見られます。

## 2　伊藤宗印（そういん）の墓碑

墓碑は将棋の駒形をしたものですが、戦災により破損し、正面に「藤」だけが残り、裏面も「名人」、右側面に「昭和五年十二月建立」とみえるのみです。

宗印は文政九年（一八二六）神田松永町に生まれ、本名は上野房次郎といい、御城将棋（おしろしょうぎ）の伊藤宗寿の養子となり、嘉永五年（一八五二）七段に昇格し、宗印を名のりました。幕府瓦解後、本所相生町四丁目（両国四丁目）に移り、明治一二年一一世名人となり、一四年には「魁進社（かいしんしゃ）」を作り、「将棋新報」を発行し、棋界復興につとめ、明治二六年相生町に没しています。一三世名人関根金次郎も内弟子として生活していましたし、金次郎の弟子となる一四世名人木村義雄も、本所表町（東駒形）に生まれています。

## 70 春慶寺（しゅんけいじ）

業平二丁目一四番九号

元和元年（一六一五）浅草森田町に起立した日蓮宗の寺で、開山は真如院日理上人とされています。その後、寛文七年（一六六七）現在地に移転し、「押上の普賢様」と言われたとのことです。近くの法性寺末です。

震災・戦災を共に受け、永いこと荒れるにまかせていましたが、昭和五八年にモダンな鉄筋造りの寺院として復興しました。

### 1　四世鶴屋南北の墓（碑）

記録によると、表に「南無妙法蓮華経」の七字題目が彫（ほ）られ、裏に「文政十二年（一八二九）十一月二十七日一心院法念日遍」とあり、側面には六樹園宿屋飯盛（やどやめしもり）（石川雅望）による墓誌銘があったとされますが、被災によって見る影もありませんでした。この度の寺院再築と同時に、新墓標に作りかえられました。珍しいケースと言えます。

四世鶴屋南北（一七五五～一八二九）は「大南北」と呼ばれたにふさわしく、「東海道四谷怪談」の名作を世に出しました。江戸乗物町（中央区本町四丁目）の紺屋伊三郎の子として生まれ、安永五年（一七七六）、初代桜田治助（法性寺「浄瑠理塚（ぢ）」参照）に入門し、文化元年（一八〇四）の「天竺徳兵衛韓噺（てんじくばなし）」で当てたと言われます。同八年（一八一一）四世鶴屋南北を襲名し、永く名声をほしいままにしました。

2　**宇野信夫「なつかしや」の歌碑**

さして大きくない石（高六五㎝）に

「なつかしや本所押上春慶寺　鶴屋南北おくつきところ」

としています。昭和四一年建立の宇野信夫による、南北への供養碑です。宇野は明治三七年、埼玉県本庄市に生まれ浅草橋場育ちで、芸術院会員です（平成三年没）。処女作「父親」を発表し、新劇作家としてスタートし、のち「人情噺小判一両」「髑髏妻」「初松魚」など、生世話的な芸風を生かした作品を書きます。戦後は、新作の歌舞伎の第一人者ともなります。

3　**普賢菩薩立像**〈区登録文化財〉

「押上の普賢様」として有名な立像で、約一〇㎝という小像でありながら、豊かな面相、細かな裳、彩色までもが残されており、室町前期に製作された秀美な仏像です。

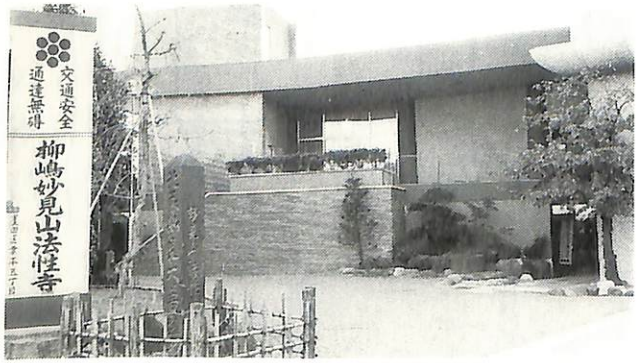
## 71 法性寺（ほっしょうじ）

業平五丁目七番七号

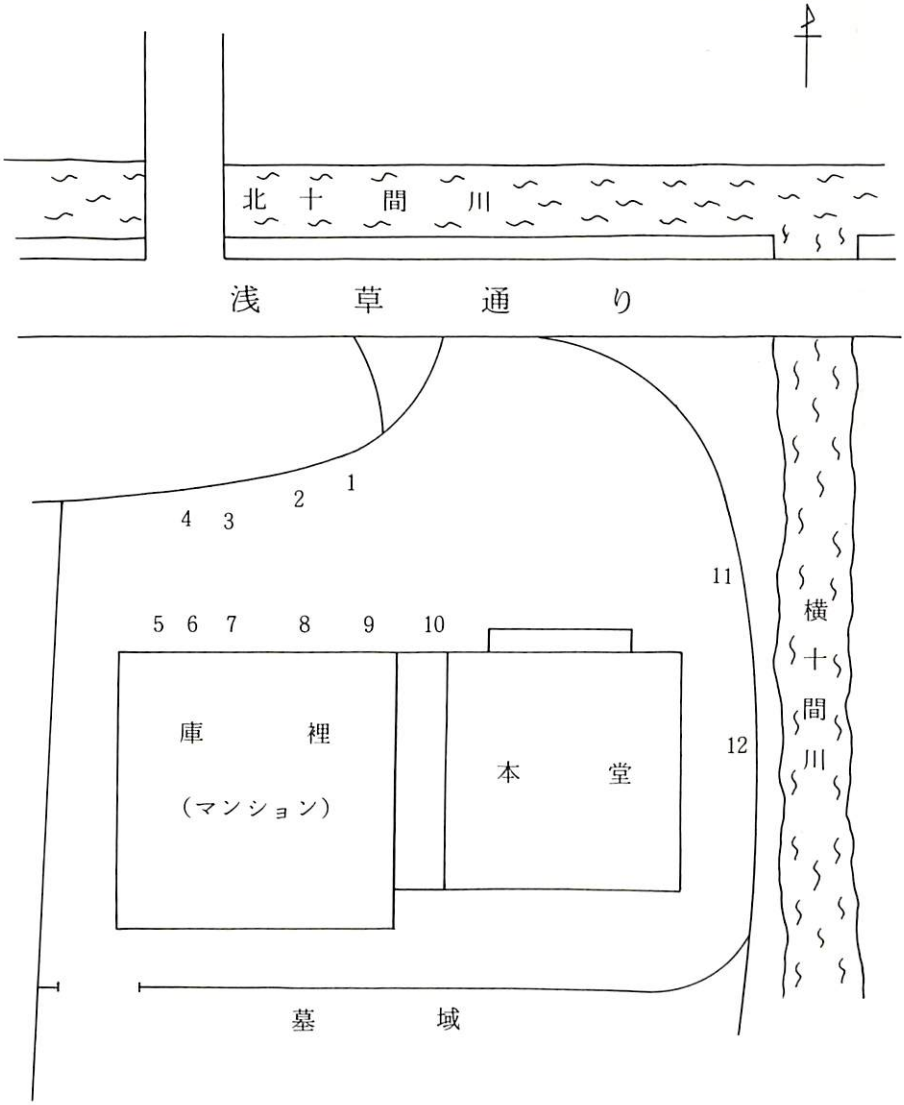
柳島妙見と呼ばれて江戸時代から信仰する人の多かった寺です。天正元年（一五七三）日遥（にっせん）上人によって創建され、妙見山玄和院と号し、日蓮宗真間山弘法寺（千葉県市川市）の末寺です。妙見大菩薩を奉安した妙見堂があります。妙見菩薩は北斗星を神化したもので、国土を護り貧窮を救うといわれている仏様で、像容は端麗な天女形です。

江戸城の鬼門除けとしておかれたというこの妙見堂のそばに、周囲二m余にもなる影向松（ようごうのまつ）という古木がありました。この松は妙見が降臨したと伝えられています。なお、妙見堂はとくに桂昌院の帰依が深かったそうです。北十間川沿い内には橋本屋という料亭もあり、舟で来る人も多くかなり賑（にぎ）わっていたようです。しかし、今は、本堂をはじめ庫裏等すべて近代建築となって昔の面影はありません。

寺の入口に「北辰妙見大菩薩」と刻まれた高さ一七〇cmの石標が建っています。右側面に「妙見山法性寺」、左側面に「宝暦二壬申（一七五二）六月十五日　坂本町講中　□□町講中」とあります。この石標は、以前は道標を




法性寺全景


北十間川
浅草通り
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
庫裡
（マンション）
本堂
横十間川
墓域

かねて浅草通りに面して建てられていたようです（妙は妙と同じ）。

1　**栄松庵一鶴「豊かさや」の句碑**

「豊さや　寝ても野山を　夢見艸（くさ）」

碑陰に、一〇人が句を寄せてますが、人名は、栄日庵一豊女だけしか読み取れません。一鶴については不詳ですが、書家の中川憲斎が書したものです。

建碑は文久改元年（一八六一）三月とあります。万延二年二月一九日、文久と改元していますが、年紀に「改元年」とあるのはあまり見かけません。

2　**瘞髪塚（えいはつづか）**（火消和解の碑）

火消の二番組と中組との争いに、仲間も共に髪をおろして和解に努め、その記念に髪を埋めたことが青石の自然石に彫られています。台石には、関係各組の多くの人名が見えます。天保九年（一八三八）の建碑です。

3　**「桂家元　故六世文治之碑」**

大正四年七月に「柳連」によって建てられたもので、世話人として三笑亭可楽、桂文楽、翁家さん馬の名が見えます。碑銘の左に

江戸落語の名家文治翁の碑の成りたるを悦びて　名に残る芝居噺しや涼み台　三代目柳家小さん」

とあります。柳連は、柳派の集まりでしょう（柳塚の項参照）。

4　**「小蓮遺愛之碑」**

画家老蓮が、儒者であった子息小蓮の若くして没したのを嘆き悼んで、その遺稿を埋めたのを銘した碑です。没した翌文化六年（一八〇九）一〇月に建てたもので、小蓮の師浪華葛質の撰文、巻菱湖書并篆額です。篆額の周りに、老蓮の描いた蓮の絵が彫られています。

5　**「夢さめて」の句碑**

「夢さめて　見れは色なし　青す□□」

「青す□□」は「青すだれ」と思われます。作句者は不明ですが、謝恩のための建碑者が、清元節、富本節、一中節の人々であることから、浄瑠璃関係の人ではないかと考えられます。建立は「□□八丁酉」とあるので、天保八年（一八三七）と判断できます。

6　**宝田寿助「それ辞世」の辞世歌碑**

「狂言作者宝田寿助　□□辞世　さる程にま□　是まて□　むかしの人□□真似をし□」と刻まれています。天保九年（一八三八）五月の建碑で、宝田寿助の百日忌の法要に妻が建てたものと考えられます。辞世の歌は「それ辞世　さる程にまた是までも　昔の人の口真似をして」です。書は、中川憲斎です。

7 「涼しさや」の句碑

「涼しさや　産まれた時の　天窓（あたま）つき」

句の左右に、それぞれ「い組」「北道具持若者中」とあります。両者とも「火消」の組名ですが、建碑者はどちらなのかは不明です。三世八巣謝徳の書で、慶応三年（一八六七）の建碑です。

8 桜田左交「花清し」の辞世句碑（「浄瑠璃塚」）

青石の自然石に「桜田左交　浄瑠理（ママ）塚　□□□　□□□□浮む　水の上」と刻まれています。江戸の歌舞伎狂言作者桜田治助（左交）の一周忌に、門人達が浄瑠璃塚を建て、辞世の句「花清し　散りても浮かむ　水の上」を碑面に残したものです。碑陰に治助の来歴が記されています。文化四年（一八〇七）六月の建碑です。

9 「葎堂午漣「世は花に」の辞世句碑

「世は花に　安かれわれは　旅に向く」

友人玉塵堂素山が、文政五年（一八二二）に建てていますが、午漣、素山については不詳です。

10 「豊国先生瘞筆（えいひつ）之碑」

上下が欠けていて全文は読み取れませんが、浮世絵師初代歌川豊国の略歴と、その遺筆を埋めて碑を建てたということは何とか読むことができます。狂歌堂真顔の撰文、山東京山の書並びに篆額（欠落）です。

この碑は倒して置かれていますので、碑陰は見ることができませんが、文献によると文政一一年（一八二八）の建碑です。

11「昔ばなし　柳塚」

表面に「昔は那し　柳塚　　楽痴生書」と刻まれています。碑陰は剥落がひどく年紀は読み取れませんが、社長、副頭取等の役職名と、柳派の落語家の名前がなんとか読み取れますので、落語界の一派、柳派の記念碑と考えられます。高さ二六六㎝もある青石の碑です。

落語界は、明治一七年に柳派と三遊派とに分かれ、大正六年に統一されました（木母寺「三遊塚」参照）。

12　**風也坊秋香**「あふぎ見る」**の句碑**

「あふき見る　松の光や　露の珠　　惟草庵主書」

妙見が降臨した伝説のある「影向松」に関する句とも考えられます。

『新選俳諧年表』によると、風也坊秋香は「沢田秋香、江戸人、声曲家。」、惟草庵主は「黒川惟草、惟草庵、無漏軒、夙也坊の号あり、寥松門、江戸人、持明院流の筆道指南を業とす。」とあります。二人の号が似ているところから、あるいは寥松の同門かとも思われます。天保一二年（一八四一）の建碑です。

## 72 伊藤左千夫旧居跡

江東橋三丁目一三番

この附近一帯はかつて茅場町と言われ、維新後は荒地のようになっていましたが、明治二〇年代後半に総武鉄道の終着駅となり、汽車製造工場が設けられるなどして、しだいに工業地・都市化していきました。

明治二二年、左千夫は上京後しばらくして、ここ茅場町三丁目一八番地（江東橋三－五－三）に居を構え、牧場を設け搾乳業を営みました。現在は駅前広場となっています。

伊藤左千夫

左千夫は元治元年（一八六四）八月一八日、上総国殿台村（千葉県成東市殿台）に生まれ、本名を幸次郎といいました。

二六歳の時上京、三〇歳の時に同業の伊藤並根に茶の湯・短歌の手ほどきを受け、三五歳の時はじめて正岡子規を訪ね、本格的な作歌活動に入りました。その後「ホトトギス」に『野菊の墓』を載せ、激賞を受けました。そして、門下に島木赤彦・斎藤茂吉を出しました。

この茅場町は左千夫文学の出発点となったところで、子規をはじめ多くの歌友を持ったところです。明治三六年六月「馬酔木」創刊に伴い発行所となり、さらに同四一年一〇月蕨真発行の

「阿羅々木」が東京に移り、翌年九月から大正二年六月まで、その発行所ともなりました。この間、この茅場町の家から多くの歌や小説が生まれ、名作も残りました。茅場町の生活は二六年間にも及びました。

1　**伊藤左千夫「よき日には」の歌碑**

自然石に黒御影石をはめ込んで

「よき日には　庭にゆさぶり　雨の日は　家とよもして　児等が遊ぶも　左千夫」

としています。「伊藤左千夫記念会」により昭和五八年建碑。

歌の出典は、明治四一年一〇月刊の「阿羅々木」第一巻第一号の連作「心の働き」三〇首のひとつで、家族思いの作者が日常生活の一こまを詠んだものです。

# 73 両国高等学校（りょうごくこうとうがっこう）

江東橋一丁目七番二号

明治三四年、東京府立第三中学校として築地に設立され、翌年新校舎落成と共に、現在地に移転してきました。震戦災と学制改革を経て、東京都立両国高等学校として現在に至り、二万三、〇〇〇余の人材を輩出しました。

## 1 「芥川竜之介」文学碑

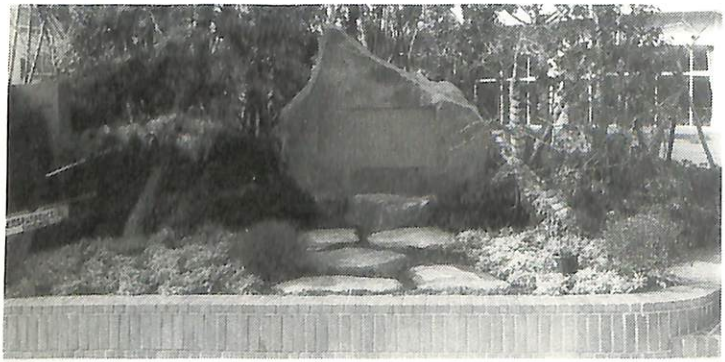
竜之介は本校の第七回生として卒業し、文壇に大きな足跡を残し（芥川竜之介生育の地の項参照）たことは、人の知るところです。

彼が愛してやまなかった大川（隅田川）についての、一九歳の時の随想の一部を引用したものです。

自分は大川あるが故に「東京」を愛し　「東京」あるが故に　生活を愛するのである

として、隅田川と本所に愛惜を示しています。

昭和五八年の建碑で、これまた卒業生の国文学者吉田精一の筆になるものです。



芥川竜之介文学碑

## 2　新燧社（しんすいしゃ）跡

この両国高等学校敷地の一帯は、わが国で最初に国産マッチを製造した地です。

創始者の清水誠は明治三年にフランスに渡り、マッチの製法を修得して八年に帰朝し、当時の芝区三田四国町吉井友実別邸に仮工場を興してマッチ製造を始めました。翌九年に大久保利通の後援をうけて、ここ本所柳原町に新燧社を設立し、赤燐マッチ（安全マッチ）の製造を開始したのです。

また、このことを記念した清水誠記念碑が、この地域の氏神である亀戸天神社境内にもあります。

## ◎墨田区指定有形文化財一覧表

| 名称 | 所有者 | 所在地 |
|---|---|---|
| 紙本着色梅若権現縁起絵巻（全三巻）付漆箱二匣 | 木母寺 | 堤通一―一六―一 |

## ◎墨田区登録有形文化財一覧表（平成八年三月一二日現在）

| 名称 | 所有者 | 所在地 |
|---|---|---|
| 多聞寺山門（一基） | 多聞寺 | 墨田五―三一―一三 |
| 板碑　宝治二年三月三日銘 | 正福寺 | 墨田一―六―二〇 |
| 板碑（一基） | | |
| 板碑　文明元年十一月十八日銘 | 日蓮宗運閣 | 墨田三―六―一四 |
| 板碑（一基） | 山村佐助 | 墨田五―一三―一二 |
| 板碑（一基） | 多聞寺 | 墨田五―三一―一三 |
| 板碑（一基） | | |
| 板碑　貞和三年三月　日銘 | 法泉寺 | 東向島三―八―一 |
| 板碑　延文六年三月四日銘 | | ※非公開 |
| 板碑　応永八年七月十九日銘 | | |
| 板碑　延徳四年二月九日銘 | | |
| 板碑　永禄十一年三月二十日銘 | | |
| 板碑　永享四年三月　日銘 | | |
| 板碑（一基） | 法泉寺 | 東向島三―八―一 |
| 板碑（一基） | | ※非公開 |
| 板碑　延文三年正月九日銘 | 教育委員会 | |
| 板碑　応永廿二年十一月一日銘 | | |
| 板碑　五月十六□銘 | | |
| 板碑　元弘三年十月　日銘 | 鈴木利光 | 東向島四―二二―四 |
| 板碑　元応銘 | 鈴木　長 | 東向島四―二九―二 |
| 板碑　嘉暦四年七月銘 | | |
| 鳥亭焉馬「いそがずば」の狂歌碑 | 牛嶋神社 | 向島一―四―五 |
| 室井其角「ゆうだちや」の句碑 | 三囲神社 | 向島二―五―一七 |
| 松尾芭蕉「いささらは」の句碑 | 長命寺 | 向島五―四―四 |
| 松尾芭蕉「ふるいけや」の句碑 | 要津寺 | 千歳二―一―一六 |
| 「芭蕉菊俤塚」および「芭蕉翁百回忌発句冢碑」 | | |

| 名称 | 所有者 | 所在地 |
| --- | --- | --- |
| 「木母寺」の軸、「都鳥および角田川」の軸 | 木母寺 | 堤通二―一六―一 |
| 伊勢参宮致道中覚之帳 | 松本とり | 東向島二―九―一三 |
| 武蔵国隅田村成林庵由来中興再建旨趣書 | 成林庵 | 墨田二―一―一二 |
| 村方議定書 | 白髭神社 | 立花六―一九―一七 |
| 秋葉神社文書（一〇三点） | 秋葉神社 | 向島四―九―一三 |
| 都鳥手鑑（二帖） | | |
| 扁額「時敏塾」 | 教育委員会 | |
| 木造扁額『牛嶋学校』 | | |
| 石造　海難供養碑（六基） | 回向院 | 両国二―八―一〇 |
| 石造　六面塔　安政四年八月二二日銘 | | |
| 石造　燈籠（一基）元禄十六年十月六日銘 | 天祥寺 | 吾妻橋二―六―五 |
| 石造　燈籠（一対）宝永元年五月銘 | 秋葉神社 | 向島四―九―一三 |
| 石造　燈籠（一基）宝永二年銘 | | |
| 石造　常夜燈（一対）寛政十一年四月銘 | 三囲神社 | 向島二―五―一七 |
| 石造　狛犬（一対）延享二年五月二二日銘 | | |
| 石造　狛犬（一対）享保十四年九月十五日銘 | 牛嶋神社 | 向島一―四―五 |
| 石造　狛犬（一対）文政十年二月吉日銘 | | |
| 木造　普賢菩薩立像（一躯） | 春慶寺 | 業平二―一四―九 |
| 墨堤常夜燈 | 牛嶋神社 | 向島一―四―五 |

| 名称 | 所有者 | 所在地 |
| --- | --- | --- |
| 石造　地蔵菩薩立像（一基）寛文二年銘 | 法泉寺 | 東向島三―八―一 |
| 石造　地蔵菩薩立像（一基）享保一年九月吉日銘 | | |
| 石造　神牛（一対）安政六年三月銘 | 牛嶋神社 | 向島一―四―五 |
| 牛嶋神社境内力石群（九個） | | |
| 力石（伍大力菩薩銘）（一個） | 教育委員会 | |
| 石造　神狐（一対）享和二年十二月銘 | 三囲神社 | 向島二―五―一七 |
| 石造　地蔵菩薩立像（一基）明暦一年二月吉日銘 | 円通寺 | 押上二―三九―六 |
| 石造　阿弥陀・尊像（一基）寛永四年八月十五日銘 | 回向院 | 両国二―八―一〇 |
| 石造　六地蔵坐像（六基） | 多聞寺 | 墨田五―三一―一三 |
| 石造　阿弥陀如来立像　万治四年三月二十日銘 | 正福寺 | 墨田二―六―二〇 |
| 石造　六面塔　延宝六年四月十三日銘 | 如意輪寺 | 吾妻橋一―二二―一四 |
| 石造　禊盥　文政十一年六月銘 | 香取神社 | 文花二―五―八 |
| 石造　狛犬（一対）文化十二年二月銘 | 白鬚神社 | 東向島三―五―二 |
| 石造　狛犬（一対）安永二年五月銘 | 吾嬬神社 | 立花一―一―一五 |
| 庚申講法具（一式） | 長友洋一 | 立花一―二三―二 |
| 石造　鳥居　安永九年六月銘 | 白髭神社 | 立花六―一九―一七 |
| 石造　鳥居　文久二年正月銘 | 牛嶋神社 | 向島一―四―五 |
| 庚申塔　万治二年十一月銘 | 長命寺 | 向島五―四―四 |
| 庚申塔　寛文四年九月銘 | 多聞寺 | 墨田五―三一―一三 |

| 名称 | 所有者 | 所在地 | 名称 | 所有者 | 所在地 |
|---|---|---|---|---|---|
| 庚申塔　寛文十二年十一月一日銘 | 圓徳寺 | 墨田五―四―一―一七 | 押上の富士塚 | 小宮治雄 | 押上三―一―八―一九 |
| 庚申塔　天和二年九月十六日銘 | 万福寺 | 東墨田三―一―一―一九 | 道標　文化十五年三月銘 | 蓮花寺 | 東向島三―一―三―一七 |
| 庚申塔　元禄二年正月銘 | 八広庚申堂 | 八広五―三―一―七 | 道標　文政五年四月銘 | | |
| 庚申塔　宝暦十三年銘（一基） | 東漸寺 | 立花六―一―七―四 | | | |

## ◎墨田区登録史跡一覧表

| 名称 | 所有者 | 所在地 | 名称 | 所有者 | 所在地 |
|---|---|---|---|---|---|
| 橘守部墓・橘冬照墓 | 長命寺 | 向島五―四―四 | 因幡国若桜藩主　池田冠山墓 | 弘福寺 | 向島五―三―二 |
| 肥前平戸藩主　松浦家墓所 | 天祥寺 | 吾妻橋二―六―五 | 常陸国笠間藩主　牧野家墓所 | 要津寺 | 千歳二―一―一六 |

## ◎墨田区登録無形文化財一覧表

| 名称 | 所有者（雅号） | 所在地 | 名称 | 所有者（雅号） | 所在地 |
|---|---|---|---|---|---|
| 錺金具づくり | 塩沢　幹 | 石原一―四一―一五 | べっ甲工芸 | 磯貝庫太（甲心） | 横綱二―八―一二 |
| 釣竿づくり | 中村準一 | 向島一―一六―九 | 組み紐・紐結び | 深井理一 | 錦糸一―一二―一一 |
| 宮大工 | 諏訪野喜一郎 | 向島四―四―四 | 組み紐・紐結び | 深井尾里（君倭） | 〃 |
| 堂宮彫刻 | 大野勘三郎（晃誉） | 東駒形四―七―八 | 帯仕立て | 鈴木イト | 東向島二―二―一〇 |
| 木版摺り | 新味三郎 | 石原一―一三―六 | 刀づくり | 大崎繁春（靖宗） | 八広三―一四―一〇 |
| 蒔絵 | 渡邊武（武山） | 押上二―五―一三 | 象牙象眼 | 山崎登（民生） | 向島三―四〇―一六 |
| 江戸小紋 | 五月女利平 | 東駒形四―一三―一三 | 尺八づくり | 長堀榮次（榮延） | 吾妻橋三―二―一五 |
| 押絵羽子板 | 青山甲 | 押上二―六―五 | 押絵羽子板面相師 | 西山幸一郎（鴻月） | 向島五―四三―二五 |
| 押絵羽子板 | 野口誠之助（清市） | 石原一―二八―三 | | | |

墨田区文化財調査員・執筆者

井沼武夫
五木田直
小島惟孝
（兼編集）中野日出夫
原田三郎
福森幸男

すみだの史跡文化財めぐり（改訂版）

平成四年三月三十一日　初版
平成八年五月三十一日　第三版発行

発行　墨田区教育委員会生涯学習課
東京都墨田区吾妻橋一―二十三―二十
墨田区役所内
電話　〇三（五六〇八）一一一一（代表）

印刷　東京墨田　合同印刷株式会社
東京都墨田区業平二―九―一三
電話　〇三（三六二四）六一一一（代表）

墨田区立あずま図書館
(03)3612-6048
31164387